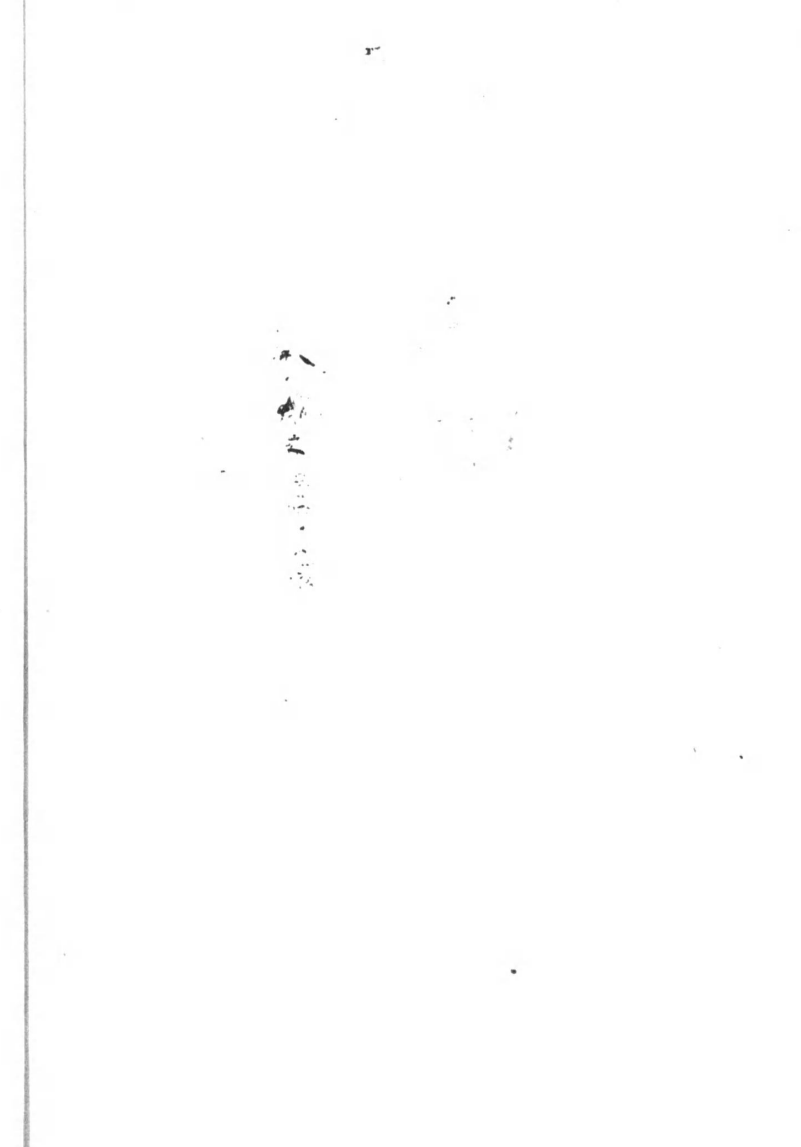




準十郎著

(第二分冊)

# 「マイ・カンパ」研究





石川 準 十郎 著

ヒトラー『マイン・カンフ』研究 前篇 (第二分冊)

—— 前大戰に於けるヒトラーとドイツ革命・敗戦・崩壞の研究 ——

國際日本協會發行



1734

此書をば私は、何よりも先づ、多年私と思想的勞苦を共にし來れる私の同志諸君に捧げる。此書が今遅れ走せ乍らも世に現れ得たのは、正に諸君の變らざる隠れたる協力と援助とに因るものである。此書は如何なる意味に於いても、私一個のものではなくして、諸君との共同の所産であり、我々がこれを超えて進まねばならぬ所の我々の一の記念標である。

著 者

## 序 文

私が本書を綴るに至つた所以の大體は、本書起稿に際しての序言の中にこれを記した。見るが如き祖國最近の事情の下に於いて私は、私の觀たる在るがまゝのヒトラー氏『マイン・カンフ』、歪められず骨抜かれざる眞の獨逸ナチスを、紹介せんと欲したのである。

私は、瘖せても枯れても、日本の國家社會主義者、獨逸ナチス以前からの日本の *Nationalsozialist* である。獨逸ナチスが尙ほ不遇に在り四面嘲罵の中に在つた時に於いてこそ、私乃至我々は、我々の信ずる理由よりして、狂熱を以つて彼等を語り彼等を擁護した。が、彼等の既にその祖國に號令し、世界の脚光を浴びて新たな歴史を創りつつある時に、而して我國にも既にその禮讃者・解述者の充満してゐる時に於いて、殊更に彼等に就いて語ることは、私の寧ろ潔しとせざる所である。それは、私にとつては一の苦痛でさへある。

私が夙に十餘年前に未だ我國に於いては獨逸ナチスの殆んど問題とされなかつた時より、同志と共に『マイン・カンフ』を譯出研究し、これをそのまゝ埋れしむるに忍びず、その後二度も正式にその出版を企てつつ、その時に於いても尙ほ私の名に於いてこれを出版することを躊躇したのも、

右の心情に基づくものであつた。その二度目の企圖の時の如きは、さる大新聞社より出版することに定り、全改譯逐字譯をなし、その最後の原稿を渡した時に、たま／＼獨ソ協定が成立し、平沼内閣の謂はゆる『複雜怪奇』なる内外情勢の出現の爲に出版中止の已むなきに至つたのであつたが、私は運命の我々の努力への殘酷に苦しみつつも、却つて何か知ら救はれたる氣さへした。そしてその後笑つてその企圖及び權利を放棄した。私が單なるジャーナリストであつたならば、如何様にもして夙にこれを出版してゐたであらう。が、私は單なるジャーナリストたるを欲しなかつたのだ。

が、私は、祖國の最近の事情を考へれば考へる程、而して我國のドイツ通諸君なる者のドイツ論乃至ナチス解釋を眼にすればする程、私の觀たる眞のナチス獨逸、私の讀める眞のヒトラー『マイン・カンフ』を、私の同胞に對して傳へるの必要を痛感しなければならなかつた。如何に愚劣の支配する當世とは言ひ乍ら、斯かる眞實が斯くも何時までも蔽はれて宜いものであらうか！ 私は、本文序言の中にも言へるが如く、以前から、單なる翻譯紹介とは別個に、私の觀たる忌憚なきヒトラー『マイン・カンフ』に獨逸ナチスを紹介したく思つてゐた。私は今や日本の品位の爲にも、實に我等の國にも決して御都合主義者のみが居るに非ざることを示す爲にも、その必要を考へた。

然るに運命は私をして思ひ切つてこれを決行せしむるの皮肉な機會を與へた。私は昨皇紀二千六

百年の戦争の中にも國を擧げて祝賀光榮の年、米内内閣の『皇道』外交の下に於いて、私の我が國家國民を最も禍ひ深く誤るものと信じて已まない所の二つのもの『古支那的皇道主義』と『西歐的自由主義』とを攻撃して、圖らずも當局の忌諱を得、祖國の爲に私の最も必要にして最も寄與し得ると信ずる所の批判的仕事を中止するの已むなきに至つた。私はこれを機會に、私の多年考へてこれまで果し得なかつた本書の執筆に着手した。そしてその一半をば、その少しづゝ成るに従つて、私の同志の發行する雜誌『國際評論』に發表した。

私の此書は斯くの如くして生れたものである。此書は、私にとつては、長い間の私の獨逸ナチズム研究の一の清算であると共に、祖國の現狀に對する私の心からなる警告書である。私は私の此書をば、世の謂はゆる充ち足りたる人々や諸々の事大主義者共に讀んで貰はうとは思はない。新しき時代を望んで、私と同じ様に貧しく生き・苦しむ・悩んでゐる所の人達に讀まれんことを欲する。而して私は信ずる——此書は必らずやさうした新しき時代の考察に役立つであらうことを！

昭和十六年十一月

石川準十郎

# 目次

|        |            |     |
|--------|------------|-----|
| 題      | 寄 (同志に捧ぐ)  | I   |
| 序      | 文 (出版に際して) | II  |
| 第二分冊抄言 |            | VII |

## 第四章 大戰前夜のドイツ

|   |                           |    |
|---|---------------------------|----|
| 一 | ウインを去りてミュンヘンへ             | 一  |
| 二 | 誤れるオーストリアとの同盟             | 七  |
| 三 | 對外政策の根本前提としての國家國民生存の四つの方途 | 一九 |
| 四 | 國內拮据か對外進出か                | 二四 |
| 五 | 採るべかりし反露東方進出政策            | 三五 |
| 六 | 誤れる反英海外經濟進出政策とその根因        | 四四 |
| 七 | 上下を蔽ふ甚しき認識不足              | 五一 |

## 第五章 大戰勃發と戰線の經驗

- 一 奧國皇太子の凶死——大戰勃發……………五
- 二 時代刷新と民族自由の爲の戰ひ……………三
- 三 志願出征——フランダ—戰線へ……………六
- 四 死の體驗と國內政治に對する不滿……………七
- 五 自由主義・マルクス主義に對する誤れる處置……………八
- 六 權力に依つて思想を倒し得るか……………六
- 七 不可避なりしマルクス主義の勝利……………六
- 八 誤れるドイツの戰爭宣傳——戰爭目的の晦冥……………一〇三
- 九 逆效果宣傳の模範——宣傳對象への認識不足……………一二一
- 十 宣傳態度の不徹底——宣傳に既に敗る……………一二六

## 第六章 革命・敗戰・崩壞

- 一 敵の宣傳漸次奏功す……………一二七



|    |                      |     |
|----|----------------------|-----|
| 二  | 國內窮乏の増大とその戦線への影響     | 一五  |
| 三  | ソナムの戦ひと負傷歸還          | 一四〇 |
| 四  | 變り果てた祖國——漲る反戦氣分      | 一四〇 |
| 五  | 全生産早くもユダヤ人の支配下に歸す    | 一五  |
| 六  | 再度の出陣と一九一七年のドイツ内外情勢  | 一六  |
| 七  | ロシアの崩壊——ドイツの最後の總攻撃準備 | 一四  |
| 八  | 罷業の勃發——ドイツは革命の前に在り!  | 一七  |
| 九  | 總攻撃の失敗と社會民主黨の有力化     | 一六  |
| 十  | 北佛轉戦退却——再度の負傷送還      | 一六  |
| 十一 | 盲目となりて病院に知る革命        | 一九  |
| 十二 | 一切無駄となりて政治家たらんと志す    | 一九  |
| 附  | 記                    | 一〇六 |

## 第二分冊抄言

既刊第一分冊は、ヒトラーの人的及び思想的生立ち、その單なる Nationalist より Nationalsozialist に至る迄の研究を主とせるものであつたのに對して、本第二分冊は、前大戰關係の論述解明、前大戰に於けるヒトラーの認識・經驗及びドイツの革命・敗戦・崩壞の研究を以つて主とする。

最初の豫定では、本第二分冊は第四章、第五章、第六章の四章を以つて構成し、大戰關係の研究は本冊を以つて始まり且つ終る積りであつた。然るに最後の第七章『ドイツ崩壞の原因』は、種々の都合上、これを第三分冊に廻さざるを得なかつた。それは主として私の遲筆に基づくものであるが、それ許りではない。其處には他にも尙ほ、若干の考慮を必要とするものが在つたが爲である。いづれにしても、豫定を果し得なかつたことは遺憾であり、讀者諸氏に深くお詫びして置く。

既刊第一分冊が、種々の方面に注目され、少からず人々の關心を得てゐることは、私の本懷とする所である。我々は今や公然の對英米戦に入り、本格的な近代戦に入つた。我等の劍は忽ちにして世界を驚倒する効果を擧げてゐる。が、戦ひは寧ろこれからである。本書は這般の考察にも役立つを得ば私の幸甚である。

昭和十六年十二月

著 者

## 第四章 大戰前夜のドイツ

### 一 ウインを去りてミュンヘンへ

我々は既に Nationalsozialist としてのヒトラーの思想的及び人間的生成を見た。

若し人あつて、『マイン・カンフ』の研究に於いて、或ひはヨリ積極的に言へば、今日のヒトラー乃至今日のドイツといふものを知る上に、何が先づ最も肝要かと問ふならば、私は何等の躊躇もなく、それは Nationalsozialist としてのヒトラーの思想的及び人間的生成の理解認識であると答ふるものである。Nationalsozialismus といふものを引去つて、今日のヒトラーはなく、今日のドイツはない。ドイツに於いてはこの考へ方は、必ずしもヒトラー乃至ヒトラー一黨に始まるものではなく、夙に哲學者フイヒテ、政治家ビスマルク、社會運動家ラツサール、『講壇社會主義派』の名を以つて呼ばれるワグナー、シュモラー等の一聯の社會政策學者の中に、多かれ少かれ見られたものである。然しそれはヒトラー一黨に依つて始めて定形化され運動化されたのである。それはドイツの必然的に到達しなければならなかつた道であり、近世ドイツの思想的歸結を成すものである。而してこれが構成及び本

質は、ヒトラーの Nationalsozialist としての思想的及び人間的生成の中に、換言すればそのウイン時代に至るまでの中に、素朴ではあるが、最も典型的にこれを窺はれるのである。

それは、私に據れば、ただ『マイン・カンプ』を棒讀することに依つては、幾度その全文を讀まうとも、よく理解され得ないものである。それは、その歴史的時代的背景との關係に於いて、而も同じやうに民族的社會的本能乃至精神を以つて、これを心讀する時に於いてのみ、乃至心讀する者に依つてのみ、よく理解され得るものである。我々の研究もその點に於いて元より充分なものとは言ひ難いであらう。然し我々は可なり立ち入つて、ヒトラーの謂はゆるグルンドリツヒ（根本的）にこれを見た。我々の『マイン・カンプ』研究はこれを以つてその最も重要な基礎段階を終了し、新たな段階へと入る。彼れは既にそのウイン時代を以つて、謂はゆる endgültig（究極的）に Nationalsozialist となつてゐる。ただ彼れは、未だ斯かる者として公然その社會的活動の機會を與へられず、従つてまた Nationalsozialismus をも公唱してゐないだけである。然し彼れのこれからの發展は、要するに、このウイン時代までに到達せるものゝ發展あるのみである。即ち彼れはこれから母國ドイツへ移り、世界大戰といふ一大經驗を経て、その敗戦・崩壊の廢墟の中から、愈々國民社會主義運動の實踐に入るのである。而も彼れはその場合、そのウイン時代までに到達した考へをば、その根本に於いて何等變更する必要は無かつた。ただ『細目』に於いてこれを補ふ』必要が有つただけであつた。原著第三章ウイン

時代諸考察（『私のウィン時代よりする一般政治的諸考察』）の最後に於ける次の言葉が、ヨク這般の關係を語つてゐる。

『ウィンは私にとつては實に、私の生涯の最も根本的ではあるが然しまた最も苦難な學校であつた。私は、曩に尙ほ半ば子供にしてこの都市に踏み入り、而して寡黙嚴肅なる大人としてこの都市を去つたのであつた。私はこの都で、大は世界觀の根柢から小は一の政治的考へ方まで獲た。私は後にこれをばその細目に於いて補ふ必要が有つたが、然しそれは最早私から離れなかつた。當時の修業時代の眞の價値をば、私は寧ろ今日にして始めて充分これを評價することが出来るものである。』

私がこの時代に就いて比較的詳細に論じたのも斯かる事情に基づくものである。蓋しこの時代こそは、極めて小さな集まりから出發して僅か五ヶ年経つたか經たないかの間に今や一大大衆運動にまで發展せんとしてゐる我が黨の基礎を成してゐる諸問題に就いて、私に最初の實地教育を與へたものであつたのだ。若し、私自身の見解の基石が、斯くも若き時代に運命の重壓に依つて、並びに私自身の勉學に依つて、逸早く形成されてゐなかつたならば、ユダヤ人や、社會民主主義ヨリ正確に言へば全マルクス主義や、社會問題や、其他に對する私の態度が今日如何なるものとなつてゐたか、私はこれを知らない。

成るほど祖國の不幸は、幾千度びでも、實に幾千度びでも、その崩壞の内部原因に就いて考察を促し得る。が、さうした考察なるものは、斷じて、かの徹底性と深き洞察とに到り得るものではない。斯かる徹底

性と深き洞察とは、たゞ、それ自身多年の戦ひの後に始めてその運命の支配者となつた者にのみ可能とされるものであるのだ。』(S. 136—137)

ヒトラーにとつてはそのウイン時代は斯様に重大な意義を持つものであつたが、一九一二年春、彼れはこのウインを去つて、多年憧れのドイツ本國ミュンヘンへと移つて來た。一九一二年の春と言へば、前世界大戦は一九一四年七月—八月に始まつたのであるから、丁度その二年前であつたわけである。その頃は殆んど何人も大戦が斯くも間近かに起るとは考へて居らず、ヒトラーも全くこれを豫期してゐなかつたやうであるが、彼れは圖らずも——ヒトラー流に言へば測り知るべからざる運命の御手に依つて——大戦前夜にドイツへ來たのである。若し彼れが尙ほウイン(オーストリア)に留つてゐたならば、恐らく大戦に際してドイツ軍に志願出征といふことも有り得ず、彼れの生涯といふものはモット異つてゐたかも知れない。少くとも彼れは、戦争を戦場に經驗するの機會を持たず、従つてまたその教訓も持たなかつたであらう。何故かならば、我々の既に見た如く、彼れはハプスブルグ國家(オーストリア)に關しては、その崩壞こそ望んで居れ、これが爲に戦ふ氣持ちは全然持ち合せなかつたからである。彼れがミュンヘンに來たといふのも、そのそもぐの原因を尋ねれば、ハプスブルグ國家に對する憎惡からであつたのである。

彼れがその生國オーストリアを去つてドイツへ來た根本原因はハブスブルグ國家に對する憎惡にまつたことは明らかであるが、直接的には如何なる關係乃至都合で而も大戰直前にこれに來たかは、『マイン・カンフ』に記してゐる範圍内では必らずしも明らかでない。ウイン時代の記述の中に、『一九〇九年から一九一〇年に掛けての間に、私自身の生活狀態にも幾分の變化があつた。といふのは、私は今や最早手傳ひ工として日々のパンを稼ぐ必要が無くなつたのであつた。私は當時既に一の小さな製圖家及び水彩畫家として獨立して働く様になつてゐた。』(p. 33) と言つてゐる點や、其他の種々の點から考へて、直接的には恐らく大した事情もなく、要するに生活の自信も次第について來たし、かね／＼厭なオーストリアのことであるから、潔くこれを去つて、憧れのミュンヘンへとやつて來たのであらう。彼れがミュンヘンに來て如何に喜んだかは、原著第四章『ミュンヘン』冒頭の次の記述の中に窺はれる。

『一九一二年の春、私は遂にミュンヘンへ來た。この都をば、私は恰かも既に數年來その城郭の中に住んでゐたかの如くにヨク知つてゐた。それは私の豫ねての研究に基づくものであつて、該研究はこのドイツ藝術の首都の到る所を私に指し示して呉れたのであつた。實に、ミュンヘンを知らざる者は、ドイツを見ざる者と言つて宜い。否、それだけではない、何よりも先づ、ミュンヘンを見ざる者は、ドイツ藝術を知らざる

者である。

兎に角、戦前のこの時代は、私の生涯中、最も幸福にして且つ最も満足に充ちた時代であつた。私の獲る金は相變らず尙ほ少いものであつたが、然し私は當時實に、繪を描かんが爲に生活してゐたのではなくして、たゞそれに依つて私の生活を可能ならしむる爲に、ヨリ適切に言へば、それに依つて私の研究を一層進めんが爲に、繪を描いてゐたのである。而も尙ほ私は、私の抱くに至つた目的（獨逸合併を始めとする國民社會主義的諸理想）は何時かは必らず達成されるといふ確信を持つてゐた。而してこの確信が有つたればこそ、私は他の凡ての日々の生活の細かい心配をば、容易に且つ平氣で耐へ忍ぶことが出来たのであつた。

それに加ふるに私は、この町に來て住み初めたその殆んど最初から、私の知つてゐた他のいづれの町よりも、深くこの町に心の愛着を感じたのであつた。ドイツの町！ ウインに較べて何んたる相違であらう！

諸人種の混亂せるウインの町は、私には、思ひ起すだに不快なものであつた。その上に更に、この地方の言葉は私の元來のそれに極めて近いといふことがあつた。それは殊に下バワリア地方を廻つて見る時に、私の曾つての少年時代を思ひ起させるものであつた。その他にも其處には、私の心から敬愛してゐた乃至敬愛するに至つた幾多の事物があつた。就中最も私の心を惹付けたものは、自然そのまゝの力と高尚な藝術的氣分との驚くべき結合たる宮廷醸造場からオデオン座へ、オクトーバーフェストから繪畫館其他に至るあの比類なき線であつた。私が今日、この世界に於ける他の何處の土地よりもこの町に愛着を持つ所以は、確かに、この町が私自身の生涯の發展に不可分に結び付いてゐるといふ事實にも在る。だが、當時早くも既に私が其



處に眞に衷心より満足するの幸福を得たのは、専ら、この驚くべきヴィッテルバッハ城の都が、單に計算的な理性のみでなく多感な心情をも惠まれてゐる者には何人にも及ぼす所の、その不思議なる力に基づくものであつた。』(S. 138—139)

ナチス黨がミュンヘン(南獨バワリア州)に始まり、ナチス黨本部は今日でも尙ほミュンヘンに在ることは周知の所と思はれるが、以上の如くしてヒトラーは、前大戰の始まれる二年前から、ミュンヘンに居住することになつたのであつた。彼れはこれを無上の幸福として記してゐるが、今日から見る時、それはドイツにとつてもまた大なる幸福であつたと言はねばならないであらう。蓋しこの結合から今日のナチス獨逸は始まつたのである。

## 二 誤れるオーストリアとの同盟

ミュンヘンに來てもヒトラーの研究心には變りなかつたが、その研究上の最大の關心事は今や一進展して對外政策、ドイツ對外政策の問題であつた。『マイン・カンフ』第一卷全十二章のうちその中間の約五章といふもの——詳しく言へば第四章『ミュンヘン』、第五章『世界大戰』、第六章『戰爭宣傳』、第七章『革命』及び第十章『崩壞の原因』——は、直接間接に前世界大戰に關するものである。

が、その前驅をなす所の我々が茲に見る原著第四章『ミューンヘン』と題する一章の大部分は、實にこの對外政策の批判に宛てられてゐる。

サラエヴォに於けるセルビア青年のオーストリア皇太子暗殺に始まる前世界大戰が、その根本に於いて何に原因するかは、人々に依つて多かれ少かれその見解を異にする所であり、今尙ほ一個の研究問題であり得る。が、かの場合ドイツは、少くとも直接的には、オーストリアとの同盟との義理乃至關係に引かれて、豫め戰ふ意志も用意もなくして、戰爭に入つて行つたことだけは、今や各方面から明らかとなつて來てゐる。これとても從來は必らずしも明らかでなかつた。世界は戰後久しく、英佛側の戰時宣傳に従つて、ドイツは計畫的にオーストリアをして戰端を開始せしめたものと信じ且つ語つてゐたのである。

ヒトラーの記してゐる所に據れば、當時ドイツは殆んど何等の用意もなく、驚くべき認識不足から、フラ／＼と戰爭へと入つて行つたのであつた。問題のオーストリアとの同盟は、元來ウィルヘルム一世時代にビスマルクに依つて結成されたものであつて（一八七九年）、これには更に同じくビスマルク時代よりイタリアも加はつて居り（一八八二年）、謂はゆる『三國同盟』として三十餘年の久しきに互り世界の注目を買つたものであつた。然るに一九一四年愈々戰爭となるや、イタリアは忽ちにして同盟より離反し、遂にはその敵とまでなり（一九一五年）、ドイツは足掛五年に互り最後まで戰つて

が、遂に力盡きて周知の如き敗戦崩壊を見るに至つたのである。それといふのも、ヒトラーに據れば、ドイツ上下を擧げての甚しき認識不足、根本に於いてその方向を誤れる對外政策の結果であつた。彼れに據れば、オーストリアとの同盟なるものがそも／＼誤れるものであつた。ビスマルク時代に於いてはそれは、フランスの復讐（一八七〇年の普佛戦争に於ける敗戦の復讐）に對する備へとして意義も有つたかも知れない。が、其後、オーストリアに於いてもドイツに於いても、事情は甚しく異つて來てゐた。何よりも先づ、オーストリアは最早何等のドイツ人の國家でもなくなつて來てゐた。否、寧ろ、ドイツ民族にとつては宥すべからざる敵とまでなつてゐた。ドイツはそれと依然同盟を持續し、その爲に戦争にまで入つたのである。戦争したこと自體が敢へて悪かつたといふのではない。ドイツとしても戦争は必須の情勢にあり、遅かれ早かれ免れない所であつた。が、信すべからざるものを信じ、共にすべからざるものと共にして、無意義な戦ひを戦つたことが誤りであつたといふのである。ドイツ民族の制壓亡滅を計るやうな國と共に戦つて、ドイツは結局何を獲たか！ この同盟の爲にオーストリア・ドイツ人は如何に苦しんだか！ この同盟の持續の爲に、ドイツの失つた外交上の利益乃至機會は如何に甚大であつたか！これが爲にドイツは、敗れなくても宜い戦ひに敗れて了つたといふのである。彼れはこれに就いて先づ次の如く記してゐる。茲にも彼れのハブスブルグ神聖國家反對が遺憾なく現れてゐる。

『私がその職業上の仕事以外で最も關心を呼び起させられたものは、此處でもまた、政治上の日常事件、就中、殊に對外政策上の問題であつた。私がこの對外政策の問題に關心を持つに至つたのは、ドイツの同盟政策の問題から間接にであつた。私はこのドイツの同盟政策をば、既に私のオーストリア時代から、絶対に誤れるものと考へてゐた。然しウインでは私には尙ほ、そのドイツ帝國の自己錯誤の程が充分明らかでなかつた。當時私は稍々もすれば次の如く考へようとした。といふよりも、或は、次の如く考へて以つて自らを辛うじて辯明説得してゐたと言ふべきかも知れない。即ち、その盟邦（オーストリア）なるものが實際に於いて如何に弱く且つ信賴し難きものであるかは、ベルリンでも恐らく夙に知つてゐるであらう。而も尙ほ、多かれ少かれ秘密な理由よりしてさうした洞察をば抑へて、一の同盟政策を保つて居るのであらう。蓋し、この同盟政策は實に曾つてビスマルクその人に依つて創建されたものであり、これを今にして突然破棄することは、機を窺つてゐる外國を兎や角と策動させたり、國內の凡俗共を騒ぎ立たせたりする恐れもある爲に、望ましからざるものと考へられてゐるのだ、と。

然るにドイツに来て見て、殊に民衆自體に接して見て、その私の考への誤つてゐたことが間もなく分り、私は驚いたのであつた。私の到る所に見せつけられて驚いたことには、他の點では充分教養ある人々の間に於いてすら、ハプスブルグ王國の正體に就いて微塵も知る所の無かつたことであつた。一般の人々は實に、この盟邦をば一の眞摯な強國と見做し、一旦緩急あればドイツの爲に直ちにその兵を出動させるだらうとい

ふ妄想に囚れてゐた。人々は、この王國をば尙ほ一の「ドイツ」國家と考へ、これを頼り得るものと信じてゐた。ドイツ自體に於けると同じ様にハプスブルグ王國に於いても、その兵力は何百萬を以つて算へられ得るものと考へてゐた。そして次のことを完全に忘れてゐた。——第一に、オーストリアは夙にドイツ人の國家ではなくなつてゐるといふこと、第二に、同國の國內狀態は刻一刻と益々解體に向つてゐるといふこと、これであつた。

私は當時オーストリア國家なるものをば、謂はゆる「外交當局」よりはヨリ良く知つてゐた。「外交」當局は當時、殆んど常に然るが如くメクラにも等しく盲目的に災厄へと落ち込んで行つてゐた。國民の氣分なるものは實は、斯うした上から輿論として注ぎ込まれたものの發露に過ぎなかつたのだ。上では「盟邦」をば、實に、黄金の犢に對するが如くこれを敬拜してゐたのである。人々は、誠實に於いて缺くる所をば、愛嬌に依つて補はんとしたのであつた。其處では言葉は、常にその眞實の價値を有するものと考へられたのであつた。

私は既にウインに於いて、當局政治家の言説とウイン新聞の内容との間に時々相違の現はれてゐるのを見て、全身怒りに燃えたのであつた。だが、それでも尙ほウインは、少くともその外觀上では、一のドイツの町であつた。然るに一度ウインを去つて、又はヨリ正確に言へばドイツ・オーストリア（ドイツ人の主として居住するオーストリア地方の謂ひで、戦後の縮小されたオーストリア地方を意味す）を去つて、同國のスラブ地方に來るならば、事態は如何に異つてゐたことか！ 其處では三國同盟といふ高尙な全手品が如何に

批評されてゐたかを知るには、たゞブラーグ（チエコスロヴァキア地方の首都）の諸新聞を手に取りさへすれば宜かつた。これらの新聞紙上に於いては、この「政治家の傑作」に對してただ殘酷なる嘲笑と侮蔑あるのみであつた。兩方のカイゼルが互ひの頰の上に親交の接吻を交してゐる平和の眞最中に、人々は、この同盟がその輝やくニベルング（北歐神話の一種族）の理想から實踐の現實に移さんとする日に終りを告げるものであることを、何等祕密にして置かなかつた。

然るにそれから數年後、遂に來たれる瞬間、即ち同盟が眞にその眞價を發揮すべき時に於いて、イタリイが三國同盟から飛び出して二盟邦を置き去りにした許りか、遂にはその敵とまでなつた時に、人々は如何に激昂したことであつたか！ が、そも／＼斯かる奇蹟の可能性を、即ちイタリイがオーストリアと提携して戦ふといふ奇蹟を、例へ一分間たりとも敢へて信じたといふことは、外交的盲目に禍ひされない者にとつては何人にも、全く不可解なものでしか有り得なかつたのだ。オーストリア自體に於いても事情は正に同じことであつた。

オーストリアに於いては同盟思想の信奉者は、ハブスブルグ人士とドイツ人のみであつた。ハブスブルグ人士は打算と餘儀なき必要からであつた。ドイツ人は善意と政治的馬鹿からであつた。善意からといふのは、彼等オーストリア・ドイツ人は三國同盟に依つてドイツ本土に一大奉仕をなし、これを強化し確乎ならしめんものと考えたからである。政治的馬鹿からといふのは、實に、この最初の考へが正しくなかつた許りでなく、反對に彼等は三國同盟に依つてドイツを一の國家屍體に結び付けることに協力したことになり、そ

の爲に結局兩國家共に奈落の底に引きずり込まれなければならなかつたからである。が、就中、彼等自體が實にこの同盟に依つて單に益々非ドイツ化の手に陥つたからである。蓋しハプスブルグの連中は、そのドイツとの同盟に依つて、この方面からの干渉は免れることが出来ると信じ、事實また悲しい哉その通りであつたので、彼等はその國內に於いてドイツ民族を漸次驅逐するの政策をば、ヨリ極めて容易に且つ危険なく遂行することが出来たのであつた。周知の『客觀性』<sup>オブエクティブ</sup>（第三者から見たる狀態の意）に於いてドイツ側から一つの抗言も毫も心配する必要がなかつた許りでなく、オーストリアのドイツ民族自體が、或る何等かの餘りにも卑劣極まるスラヴ化に對して反對を叫ばんとした場合には、逆に同盟を振り翳すことに依つてこれを直ちに沈黙させることが出来たのであつた。

ドイツ本土のドイツ國民自體がハプスブルグ政府に對して承認と信頼とを表明してゐた時に當り、オーストリアに於いて迫害を蒙つてゐたドイツ民族は一體どうすれば宜かつたのか！ 彼等は反抗すべきであつたか？ 若し反抗したならば、全ドイツ人界に、自民族に對する反逆者として刻印を押されねばならなかつたではないか！ 數百年この方、正に自民族の爲に未曾有も極まれる犠牲を拂つて來た所のオーストリア・ドイツ民族がだ！

然し、若しハプスブルグ王國のドイツ民族が遂に驅逐されるに至つたならば、この同盟は一體如何なる價值があつたか？ ドイツにとつての三國同盟の價值は、正にオーストリアに於けるドイツ人の優位の維持に懸つてゐたのではないか？ それとも人々は、スラヴ的ハプスブルグ帝國であつても尙ほ同盟を保つことが

出来るものと、眞に信じてゐたのであるか？

オーストリア國內の民族問題に對するドイツ當局の外交態度並びにその全輿論の態度なるものは、愚昧を通り越して寧ろ氣違ひ沙汰であつた。人々はこの同盟に依頼して、七千萬國民の將來と安全とをこれに托したのであつた。そして相手國に於いてこの唯一の基礎が、計畫的に且つ極めて着實に、年々破壊されて行くのを傍觀してゐたのであつた。斯くして何時かは、ウイン外交との「契約」は残つても、實際の一國の同盟援助といふものは失はれる日が來なければならぬ状態に在つた。

イタリーにあつては事情はそも／＼の始めから同様であつた。

若しドイツに於いて人々が多少でも明瞭に歴史を研究し、民族心理を攻究してゐたならば、ローマのキリナールとウインの宮城とが共同の戦線に立つなどといふことは、一瞬と雖も考へられないことであつた。若しイタリーに於いて政府が、その人民の狂熱的に憎惡するハプスブルグ國家の爲に、唯だ一人のイタリー人でも戦場に敢へて立たせようとしたならば、それより前に逸早くイタリーは一個の噴火山となつたであらう。私は、イタリー人のオーストリア國家に對して「抱懷」せる底知れぬ憎惡並びに激しい感情的輕蔑が、ウインに於いて一再ならず燃え上つたのを見た。ハプスブルグ家が數百年に互つてイタリー人の自由と獨立とを妨げた罪は、イタリー人の忘れんとしても忘れることの出来ないほど大なるものであつたのだ。而もこれを忘れんとする意志はイタリー國民にも政府にも毛頭無かつたのである。それ故にまたイタリーにとつては、オーストリアに接して生きるには二つの可能性しかなかつた。即ち、同盟するか戦争するかである。



イタリイは前者を選ぶことに依つて、落付いて後者を準備することが出来たのだ。』(S. 139—140)

當時のドイツ支配者は、政治的にも軍事的にも、周知の如くウイルヘルム二世を中心とするウンケル(貴族)の一黨であり、同皇帝の親政に近いものであつた。彼れは二十幾歳の若くして皇位に即き(二八八年)——因にビスマルクはウイルヘルム二世の即位後間もなくその三十年の宰相の地位を退けられて死去した——夙に英明の聞え高き人物であつたが、彼れ乃至彼等は然らばどうして斯くも馬鹿な政策を續けてゐたか? ヒトラーに據ればそれは、その根本に於いて國家發展の方向を誤つてゐたからであるといふ。斯くして彼れは次に、ドイツ對外政策の根本前提たるべきドイツ民族の維持乃至發展の四つの方法に就いて検討し、當時ドイツはそのいづれを採り如何にすべきであつたかを論じてゐる。が、我々はこれをば尙ほ後に見ることにし、問題のオーストリアとの同盟に就いて最後に彼れの言つてゐる所を見やう。彼れは、後に見る四つの方法及び當時ドイツの採るべきであつた對外政策に就いた論じた後、再びこの同盟の問題に言及して次の如く言つてゐる。

『……ビスマルクの如き人物にして始めて斯かる緊急手段も許されたのであるが、然らざる一切の凡庸な後繼者達には到底許されることではなかつた。而も殊に、ビスマルクの同盟の根本前提たりし諸條件が夙に

存在しなくなつた時に於いてをやである。蓋し、ビスマルクの場合は、オーストリアは尙ほ一のドイツ國家と見做すことが出来た。然るに普通選舉法が漸次採用されるに至つてからは、この國は議會に依つて統治される一の混亂體と化して了つたのだ。

オーストリアとの同盟は、更に、種族政策上からしても全く有害なものであつた。人々は、ドイツ帝國と境を接して新しいスラヴ強國の生ずるのを容認することになつた。而してこの新スラヴ強國は、晩かれ早かれ、ドイツに對して例へばロシアに對するとは全く別な態度を以つて臨んで來ることは必定であつた。その場合にはまた、オーストリア王國に於ける同盟思想の唯一の擔當者たるドイツ民族がその勢力を失ひ、その最も支配的な地位から驅逐されるに従つて、それに正比例して、同盟自體も年々内部的に空虚にして且つ薄弱なものとなつて行かざるを得なかつた。

既に世紀の變る頃に於いてドイツとオーストリアとの同盟は、全くイタリーとオーストリアとの同盟に等しい様な段階に入つて來てゐた。

この場合に於いても僅かに二つの可能性しかなかつた。即ち、ハブスブルグ王國との同盟を保つか、それともそのドイツ民族の迫害に對して抗議を起さなければならなかつた。が、若し、一度びさうした抗議がましき態度に出たならば、その結果は先づ大體公然の戦争と覺悟せねばならなかつた。

三國同盟の價値は心理的に見ても些細なものであつた。何故ならば、一つの同盟の強さなるものは、その同盟の目的が現状そのものゝ維持に局限され、ばされるほど、それだけ多く減少するからである。これに反

して一つの同盟は、當該各締盟國がその同盟に依つて一定の具體的な發展的目的の達成を期待することが出来れば出来るほど、それだけ益々強固なものとなる。凡ゆる場合に於いて然るが如くこの場合に於いても、強味は防衛側に在らずして攻撃側に在る。

このことは既にその當時種々の方面から認識されてゐたが、悲しい哉、たゞ謂はゆる「當局者」だけはこれを認めなかつた。當時大參謀本部勤務の陸軍大佐たりしルーデンドルフは殊に、一九一二年、建白書を提出してこの弱點を指摘したのであつた。然しこれに對して「爲政者」の側からは、勿論、何等の價值も意義も認められなかつた。恰かも、明確な理性なるものは結局唯だ普通の人間にのみ有効に發現されるものであつて、一度び「外交家」といふものになると、それが根本的に阻止されるかの如くである。

世界大戰が一九一四年オーストリアを経て勃發し、その爲にハブスブルグ人士も共に戰はなければならなかつたことは、ドイツにとつては實に一の幸福であつた。若しそれが逆であつたならば、ドイツは孤立してゐたであらう。若し戰爭がドイツから始まつたならば、ハブスブルグ國家は決してこの戰爭に参加することが出来ず、また自らも參加することを欲しなかつたであらう。而して、人々がイタリアに就いてあれほどまでに非難した事柄は、既にそれより前にオーストリアに現れたであらう。少くとも革命から國家を救ふ爲に、オーストリアは、戰爭と同時に、「中立」に留つたであらう。オーストリアの斯拉ヴ民族は、ドイツに加勢する位なら、寧ろ一九一四年にオーストリア王國を叩き壊したであらう。』(S. 160-161)

「然るに、このドナウ王國との同盟が齎したる危険と困難とが如何に大なるものであつたかをば、當時極めて少數の者しかこれを理解することが出来なかつた。

第一に、オーストリアはこの腐朽せる國家遺産を相續せんと考へてゐた所の敵を餘りにも多く持つてゐたので、時の經つにつれて各方面にドイツに對して或る憎惡の念を生ぜざるを得なかつた。蓋し、それらの敵は、各方面の期待し熱望する王國の瓦解を阻止する原因は、全くドイツに在りと見たからである。人々は、ウインは唯だベルリンを迂回してのみ結論に到達するものと信じてゐたのだ。

第二に、それと共に實にドイツは最善の且つ最も見込みある同盟可能性を失つたのであつた。然り、而してその代りにロシア及びイタリーともさへ益々大なる對立狀態に陥つたのであつた。それにも拘はらずローマに於いては一般の意向は極めて親獨的であつて、オーストリアに對しては最後のイタリー人の一人までも心に反感を抱き、屢々それが高く燃え上りさへしたのと、好個の對照をなしてゐた……。

最後に、第三に、この同盟はドイツにとつて次の如き理由から全く無限の危険を包蔵するものでなければならなかつた。それといふのは、ビスマルク帝國に事實上敵對してゐた一の強國は、各國に對してオーストリアといふ同盟國を犠牲にして富強になるの見込みを與へることに依り、何時でも容易に多數の國家を反獨的に動員することが出来たことである。』(S. 161—162)

### 三 對外政策の根本前提としての國家國民生存の

#### 四つの方途

オーストリアとの同盟に對するヒトラーの反對に就いては以上の如くである。人々は、『マイン・カンプ』は戰後即ちドイツが敗戦崩壊を見るに至つた後に書かれたものであるが故に、ヒトラーも斯かる反對意見を持ち且つ説くに至つたものと思ふかも知れない。世の中には、何事にもあれ、初めは大いに賛成し率先主張さへしてゐながら、後にそれがウマク行かないとなると、如何にも自分は最初から反對であつたかの如く尤もらしく反對する者が少くないのである。が、ヒトラーは斯かる輩とは最初から少からず異つてゐた様である。彼れは、既に我々の見た如く夙にオーストリア時代からオーストリアとの同盟に反對であつた許りでなく、ミュンヘンに來たるや、彼れの周圍に頻りにこれを力説強調してゐたといふ。

然らば彼れは、當時ドイツは如何なる對外政策を採るべきであつたといふのであらうか？

凡そ、軍備や財政は國家國民の爲に存在するものであつて、國家國民が軍備や財政の爲に存在するものではないと、同じく一國民の對外政策なるものは該國民の生存確保の爲に存在するものであり、

その同盟するにせよ戦争するにせよ、一定の而も内外に首尾一貫せる國民的生存確保の大方針があつて、その上に行はれるものでなければならぬ。それ無き漫然たる『國威發揚』や『世界平和』の爲の對外政策なるものは、嚴密にはその成立さへも考へられぬ空なるものであり、アテ無くして舟を漕ぐにも等しいものである。と共に、根本に於いてその國民的生存確保の方途を誤れる對外政策は、その延長乃至特殊の現れたる戦争も含めて、泥舟で流れを横切らんとするにも等しく、遅かれ早かれいづれは破綻を免れない。ヒトラーに據れば、舊ドイツがオーストリアとの同盟といふやうな誤れる政策を持続し、味方となし得た國までも敵に廻し、遂に敗戦崩壊を見るに至つたといふのも、畢竟するに、その根本に於いてこの國民生存確保の大方針を誤つてゐたことに、乃至その徹底を缺いてゐたことに原因するものである。當時ドイツは年々約九十萬もの人口の増加を見てゐたが、この大問題に對應してドイツ國民が善かれ悪しかれその一定水準の生存を維持する爲には、ヒトラーに據れば、次の四つの方法があるのみであつた。而してこの四つの方法なるものは、單に理論上可能とされるのみならず、多かれ少かれ實際に人々に依つて提唱された所の方法であつた。

(一) 産兒を制限し人口過剰を防止する方法。

(二) 國內植民を行ひ極度に國土收益を計るの方法。

(三) 新たに土地を獲得し自給自足を計るの方法。

(四) 商工業を盛んにしその貿易に依存する方法。

右の四途のうち、前の二者は消極的なものと言ふことが出来、後の二者は積極的なものと言ふことが出来る。而してこの四者は必ずしもその一者のみが撰ばねばならないといふ性質のものではなくして、その二者乃至三者或ひは場合に依つてはその全部もの採用も考へられないことはない。善き凡ゆる事を標榜する——そして結局善き何事も爲さず悪しき事のみを爲す——政府の如きは、少くとも産兒制限の方法を除く三者をば同時に等しく追求するであらう。が、斯かる多方途追求なるものは、與へられたる一定の國力の下に於いては、そのいづれも中途半端なものになり易いのみならず、實際に於いて相互に反撥するものがあり、多くの場合結局謂はゆる『二兎を追ふて一兎を獲ず』の結果に陥る。それ故に、假りにその二者乃至三者を多かれ少かれ同時に追求するにしても、そのいづれに重點を置くかが決定されねばならず、それに依つて對外政策も必然に異つて来る。例へば、フランス流に産兒制限に依つて人口過剰を防止し、從來の生存に甘んじて行く場合には、別に積極的な面倒な對外政策を敢へて必要とせず、精々凡ゆる國と親善を持し、精々他國にその持てる物を奪はれないやうにすれば足りるであらう。が、然らずして、例へば、新たに利用され得る土地を獲得し、將來の子孫の爲にもその生存の確保を計らんとする場合には、先づその何處に求むべきかが、國際的公正やその他の幾多の關係に於いて決定されねばならず、これに相應した積極的對外政策が行はれなければなら

ぬ。例へば茲にヒトラーの問題とする舊ドイツの場合に於いて、東方に新たな土地を求めロシアと衝突せざるを得ない場合に於いては、イギリスと親善を計りこれと同盟を結び、反對に海外に進出を求めイギリスを敵とせざるを得ない場合に於いては、ロシアに讓歩しこれと結ぶといふ風にである。これが對外政策なのであつて、その如何にするかは前記の國民的生存確保の根本方針から割り出さるべきものである。對外政策の延長たる戦争また然りである。ヒトラーは先づオーストリアとの同盟問題から説いて次の如く語つてゐる。

「殊にオーストリアとロシアとの關係が益々一の軍事的對立にまで陥るに至つてからといふものは、ドイツのオーストリアとの同盟政策は無意味であつたと共にまた危險であつた。

この場合のオーストリアとの同盟なるものは、正に、大きな正しい一貫した思想を全く缺いてゐたことを立證する所の典型的な例であつた。

一體何んの爲に同盟を結んだのであるか？ それは實に、ドイツ帝國の將來をば、その孤立の場合に孤りで守り得るよりも、ヨリ善く守り得んが爲でなければならなかつた。ところが、このドイツ帝國の將來といふことは、ドイツ民族の生存の可能性を確保するといふ問題に他ならなかつた。

従つて問題は、局次の如くでなければならなかつた。ドイツ國民は、その見透し得られる近き將來に於い



て、如何にしてその生存を計るべきであるか？ 而して現在のヨーロッパの一般勢力關係の下に於いて、如何にしてこの國民的發展にその必要な基礎及び必要な安全性を與へることが出来るか？

ドイツ政治の對外政策活動の諸前提を明瞭に考察する時、人々は必然的に次の如き考へに到達しなければならなかつた。

即ち、ドイツの人口は年々殆んど九十萬近くも増加する。この新たなる國民の軍勢を養ふの困難は、年と共に益々増大せざるを得ない。その飢餓貧困化の危險を今にして豫め防止するの手段と方途とを見出すに非ざれば、他日結局破局に陥らざるを得ないといふこと、これである。

而して斯かる恐るべき將來の發展に對處するには、次の四つの途があつた。

一、フランスの例に倣つて、産兒の増加を人爲的に制限し、以つて人口過剰を防止する方法が有り得た』(S. 144)

『二、第二の方法は、今日でも幾度となく提唱され推稱されてゐる所の方法であつて、國內植民これである』(S. 146)

『三、能く新たなる土地を獲得して、數百萬の過剰人口をこれに年々送り出し得る様にし、以つて自給の基礎の上に生存を維持して行くか又は、

四、工業と商業とに依つて外國の需要を充足し、その賣上金で國民の生活を支へる様にするか、そのいづれかである。』(S. 131)

ヒトラーは右の四方法のうち、その第三の方法、即ち新たな土地を獲得して、原則として自給自足を計るの方法を採るものである。然るにウイルヘルム二世治下のドイツは、海外發展熱に浮かされて、第四の方法即ち工業及び商業の振興に依つて經濟的に國外特に海外に進出する方法を採り、依然オーストリアとの同盟も續けてゐた。而してその爲にイギリスその他とも衝突することになつた、といふのである。

#### 四 國內拮据か對外進出か

一國對外政策が據つて以つて立つべき所の一國民生存確保の根本方策として、(一)産兒制限の方法と謂ひ、(二)國內植民の方法と謂ひ、(三)新領土獲得の方法と謂ひ、(四)貿易依存の方法と謂ひ、その主張そのものは別に珍らしいものではなく、寧ろ世に有りふれたものである。が、その是とし非とする理由に至つては、人々に依つて必らずしも同一ではない。ヒトラーは、前にも言へるが

如く、ドイツの採るべき根本方策としては第三の新たに土地を求むるの方法を主張し、他の三者をば非なるもの乃至不充分なるものとしてこれを排し、その見地より當時のドイツを批評してゐるのであるが、其處にはナチオナルゾツィアリストとしての彼れの徹底した對外政策思想——それ有るが爲に果敢に戦ひ得る所の——が示されてゐる。

彼れは先づ第一の方法即ち産兒制限に依つて國內人口を制限し以つて一定の國民的生存を維持する方法をば、これを非なるものとして排してゐる。然しそれは世に有りふれた『人道主義』などの考へ方からではない。彼れに據れば斯かる方法なるものは、その數量上の問題は暫らく別とするも、内部的に却つて優強なる者の生育を妨げ、劣弱なる者を強ひて生存せしむるの結果を來たし、結局該國民の資質を低下せしむるものである。而して斯かる事は、自然の意志——彼れに據ればこれはまた天の意志、神の意志と同じものであるが——に反するものであり、結局該國民の生存を危うからしむるものである。何故ならば、自然「天」神は人類界に於いてもその優強なるもの乃至優良なるものゝ生存を望んで居り、結局斯かるものをして最後の勝利者たらしむるからであるといふ。これは彼れに一貫せる考へ方であつて、彼れの言ふ貴族主義とは畢竟するにこの意味に他ならぬものであり、その言ふ強きもの乃至良きものゝ概念の中には、道德的に勝れたるものゝ意味も含まれて居り、單に體力乃至智力の勝れたるものを意味するものではないが、屢々對敵に依つて問題とされて來た所の注目すべ

き考へ方である。即ち彼れは次の如く説いてゐる。

『一、フランスの例に倣つて、産兒の増加を人爲的に制限し、以つて人口過剰を防止する方法が有り得た。

自然自らも非常の災厄の時若しくは氣候關係の悪くして且つ土地收穫の少き時には、矢張り、一定の方乃至種族の人口の増加を制限するを常とする。これは確かに賢明な方法であると共にまた假借なき方法たるものである。自然は生殖能力そのものをば妨げないが、その既に生れて居る者の生存を止めるのである。即ち自然は彼等を極めて困難なる試練と缺乏とに曝し、以つてその比較的弱き者、健康ならざる者をば凡て強制的に再び永劫の不可知者の懷ろに歸らしむるのである。が、その場合その自然の生存の迫害に堪え得たものは、幾度もの試練を経て剛健となり、再び生殖を續け得るに至り、斯くしてまた根本的淘汰が新たに開始され得るに至る。斯くの如く自然は各人に對して殘酷な處置をとり、彼等が生存の嵐に堪えられなくなるや否や、直ちにこれを自分の懷ろに呼び戻すことに依つて、人種乃至種族そのものを強健ならしめ、これをしてその最高の成績にまで發達せしめる。

それ故にこの場合に於いては數の減少は個體の強化となり、従つてまた結局種族の強化となる。

然るに人間が自ら數の制限を事とする場合に於いては事情は異なる。人間は自然の木材より造られたるものではなくして、謂はゆる「人間」である。彼れは全智全能の冷酷な女王よりもこの事をヨク知つてゐる。彼

れは各個の存續を制限するよりも、寧ろ生殖そのものを制限する。この事は、常に唯だ自分自身のことをみ考へて種族のことを考へない者にとつては、これと反對の方法よりもヨリ人間的にして且つ妥當なものゝ様に考へられる。が、遺憾乍ら、その結果たるやまた逆である。

自然は生殖を自由に委せるが、然しその存續に對して極めて困難な試練を課することに依つて、過多の個體の中からその最善の者を生存の價値あるものとして選び出し、斯くて最善者のみを維持してその種族存續の擔當者たらしめる。然るに人間はこれに反して生殖を制限するが、一旦生れた者をば凡て如何なる犠牲を拂つても維持しやうとする。人間は斯うした神意の修正を以つて賢明にして且つ人間的なるものゝ様に考へる。そして、その點に於いてもまた自然に打ち勝つた、自然の及ばざることを證明したと喜ぶ。實際には成るほど確かにその數は制限されるが、然しその代りにその生存する各個の價値もまた低下されることをば、萬物の父の可愛い小猿達はいつかな容易に見やうとも聞かうともしないのである。

蓋し、一度び生殖そのものが制限され童兒の數が減少し始めるや、最も強き者乃至最も健全なる者のみを生存せしめる所の自然の生存鬭争に代つて、最も虚弱な者・最も病弱な者までも如何なる犠牲を拂つても「救はう」とする自明の欲望が現れて来る。と共にその禍根は子孫にまで移し傳へられ、その自然及び自然意志を蔑視することが長ければ長いほど、その子孫の狀態は益々悲慘なものとならざるを得なくなる。

その結果は實に、斯かる民族は他日結局この世界からその存在を奪はれることになる。何故ならば、人間は成るほど一時は永劫の存在意志の法則に反することも出来るが、然しその酬ひは晩かれ早かれ到來するか

らである。強い種族はいづれは弱い種族を驅逐する。蓋し、生存の爲の已むに已まれぬ必要は、結局に於いて常に、各自の謂はゆる人道などといふものゝ一切の笑ふべき桎梏を破碎して、代ふるに自然の人道を現れしめ、必然的に弱き者を絶滅して強き者にその席を譲らしむるからである。

それ故に、人口増加の自己制限に依つてドイツ國民にその生存を保障せんとする者は、取りも直さずドイツ國民よりその將來を奪ふものである』(S. 141—145)

次に、第二の國內植民 (innere Kolonisation) の方法に就いては、彼れは、これを不充分にして而も誤られ易きものとして排してゐる。國內植民乃至國內拓殖といふのは、要するに、從來の自國の範圍内に於いて新たな土地の開墾、耕作民の移住を計り、そして土地收益を増大せんとするものであるが、ヒトラーに據れば、斯かる方法なるものは自づから一定の限度が存するのみならず、國民をして稍々もすれば萎縮衰亡の危險に陥しいるものである。この地球上に最早開發利用すべき土地の存しない時に於いては、それもまた已むを得ない。が、然らずして、他方には尨大な未開拓土地が存し、而もそれが一部少數國民に依つて別にこれぞといふ正當な理由も無しに占有されてゐる時に於いて、その扶養人口多く有能にして勤勉なる國民が斯かる方法に自らの運命を託すといふことは、自然の意志、天の意志、神の意志にも反するものである。自然「天」神は何等の『政治的境界』をも知らな

い。彼れはこの世の土地が最も有効に開發されることを望んで居り、常にその最も有効に開發利用する者にこれを與へんと欲してゐるものである、といふのである。この思想を國內に適用する時は、既にナチスがドイツに於いて實踐してゐるが如く、當然少數地主に依る大土地所有の如きは否認されることになり、謂はゆる私有財産制度の多かれ少かれ否認となるのであるが、この考へ方に據る時に始めてまた外に對しても果敢に斷乎として新たなる土地を要求することが出來、而もそれが正義の要求たり得るものである。これ以上の説明は引用文に譲るが、其處には革命的社會主義的ナチオナリストとしてのヒトラーの面目が躍如としてゐると共に、謂はゆる大地域主義の地政學的思想まで遺憾なく示されてゐる。

『二、第二の方法は今日でも幾度となく提唱され推稱されてゐる所の方法であつて、國內植民これである。それは實に多くの人々に依つて是認されてゐる所の提案たるものであるが、然しその多くの場合また常に曲解されて居り、その爲に凡そ人々の考へ得る絶大な弊害を來たしてゐるものである。

疑ひもなく土地の収益能力は一定の限界まではこれを高めることが出来る。然しそれは一定の限界までであつて、無限に高め得るものではない。即ち我々は、或る一定の間は我國土地の利用を高めることに依つて飢餓の憂ひ無しに、我がドイツ國民の増加に應ずることが出来る。然しこれに對して一方には、生活上の諸

要求は實に人口數よりもヨリ急速に増加するといふ事實が存在する。衣食住に關する人間の要求は年一年と増大するのであつて、例へば今日と百年も前の我々の祖先の欲求とは最早到底比較にならないものである。

従つて、生産の増加する毎に人口増加の前提が作られると考へるのは誤りである。否、この考へは單に或る程度まで妥當であるに過ぎない。何故ならば、少くとも土地の該加増生産物の一部は、人口の増大せる欲求の充足に向けられるからである。而も一方に於ける最大の節約と他方に於ける極度の不撓の勤勉を以つてしても尙ほ、その場合更に、土地自體に依つて自づから調される限界が来るであらう。凡ゆる勤勉にも拘はらず、最早土地からヨリ多くを產出することが出来なくなる。斯くて或る一定の期間は延引されても、遂には再び災厄が現れて来る。飢餓は初めは先づ時々、凶作などの起る場合に、再び起つて来る。而してそれは國民數の増加と共に益々頻繁に現れる様になり、遂には稀れなる大豐年が穀倉を充たす場合の外は、最早その現れざるはなきの有様に至る。斯くて遂には、大豐作の場合でも最早窮乏は充たされずして、飢餓がその民族の永久的伴侶となるの時代が到來する。茲に於いて自然は再び救援の手を伸べて、彼れに依つて選り残されてゐる者の間に眞に淘汰を行はなければなくなる。或ひは人間は再び自らを救ける。換言すれば、人間は人口増加の人爲的阻止を行ふ。然しその結果は、人類乃至種族に對して容易ならぬ影響を及ぼすことは既に述べた如くである。

人々はこの場合次の如くも抗議し得るであらう。——斯かる將來はどつちみち何時かは全人類の前に立ち現れるのであつて、従つていづれの國民としてか當然その災厄から免れ得るものではない、と。



この抗議は、一見文句なしに正しいかの如く思はれる。然し、その場合、尙ほ次のことが考慮されなければならぬ。

確かに全人類は或る一定の時点に達すれば、土地の豊度が最早人口の増加に應ずることの不可能となる結果、人口の増加を抑制すべく再び自然の裁決に委せるか、或ひは出来れば自裁〔産兒制限〕に依つて——但し其時には勿論今日よりもヨリ正しい方法で——必要な均衡を樹てるを餘儀なくされうであらう。然しその場合にはそれは、凡ての民族に適用されることである。然るに現在では、この世界に自己に必要な土地を確保するだけの充分な力と強さとを有しない種族のみが、斯かる困窮に置かれてゐるのである。といふのは、實際には決して土地なきに非ず、この地上には現在尙ほ極めて龐大な地域に互る土地が何等利用されずに存在して居り、専らその開拓者を待つてゐるのである。従つて次のことも亦正しい。即ちこの未開拓の土地なるものは、自然そのものに依つて或る一定の國民乃至種族に對してその將來の豫備地として與へられたものではなくして、これを獲得するの力を有しこれを開拓するの勤勉を具へた國民の爲に存在する土地であるといふこと、これであらう。

自然は何等政治的境界なるものを知らない。自然は諸生物を先づこの地球上に出現せしめ、その自由な力の演舞を傍觀する。斯くて、勇氣と勤勉に於いて最も優れた者が、自然の最も愛する子として生存の主權を與へられるのだ。

他の諸民族がこの地上に益々廣大な地面を獲得すべく努めてゐる時に當つて、一國民が國內植民に自らを

制限するならば、その國民は爾餘の國民が尙ほ未だ絶えず人口増加を續けてゐる時に、既に早くも自己制限を行はなければならなくなるであらう。將來さうした場合が必ずや起つて来る。而もそれは、一國民の自由にし得る生存地域が小さければ小さいほど、それだけ早く起つて来る……。(S. 141-142)

『いづれにしてもこの世界が、將來益々激烈極まる人類の生存鬭争に曝されるであらうことは、何人も疑ひ得ない。結局、自己保存欲のみが永久に勝利する。自己保存欲の下に於いては、愚昧や臆病や自惚れた「知つたか振り」の混合の現れたる謂はゆる人道主義の如きは、陽春の太陽の下に於ける淡雪の如くに消え去つてしまふ。人類は永久の鬭争の中に偉大となり、永久の平和の中に亡んで行く。』

我々ドイツ國民にとつては「國內植民」なる標語は、次の理由に因つて既に禍害である。といふのは、それは、安らかな假睡生活の中にその生存を「獲得」することの出来る平和主義の精神に適應せる手段を發見したといふ考へを、我々の間に忽ちにして強めるからである。この理論にして一度び我々の間に眞面目に受け容れられんか、我々もまた當然權利を有するこの地球上の場所を我々に保有せんとする一切の努力は終止する。一般ドイツ人が、斯かる方法に依つてその生活及び將來を確保し得るといふ考へを持ち始めるや否や、ドイツ人の生存上の必要を積極的に且つたすら效果的に主張する一切の企圖は、終りを告げるであらう。一切の眞に有用なる對外政策は、斯かる國民の態度では遂行不可能といふべく、ドイツ民族の將來一般もまた望みなしと見做さなければならぬ。

斯ういふ結果の認識の下にユダヤ人が、先づ第一に、斯かる危険極まる思想を我が國民の間に植え付けやうとしてゐるのは、決して偶然ではない……。

次のことは如何に強調されても尙ほ強調され足りない。——ドイツの一切の國內植民は、差し當り先づ單に社會的弊害を除去するに、就中土地を一般的投機から解放するに、役立ち得るだけであつて、新たに土地を獲ることなしには、斷じて國民の將來を確保するに足らないといふこと、これである。

若し我々がこれと異つて行動するならば、我々はやがて遂に我々の土地の最後に到達するのみならず、また我々の力の最後に到達するであらう。

最後に尙ほ次のことが確認されねばならぬ。

國內植民に依る一定の小地積への跼蹐、並びに生殖の制限に依つて起る同様の終局結果は、當該國民をしてその軍事政策上甚しく不利な状態に陥らしむることである。

一 國民の居住地域の廣大は、それだけで既にその國民の對外的安全を決定する一の重大な要素を成す。一國民の自由の使用し得る地域が大なれば大なるほど、その國民の自然的保護もまたそれだけ大である。蓋し、小さな壓縮された地域の國民に對する軍事的決定は、何んといつても比較的迅速に、同時にまた比較的容易、殊に比較的有效、比較的完全に行はれ得る。然るに領域の廣大な國家に對する軍事的決定は正にその逆であり得る。従つて國家領域の廣大はその中に常に、輕率な攻撃に對して或る程度の保護を具へてゐることになる。といふのは、この場合に、戰果はただ長期に互る困難な戦闘の後にのみ達し得られ、従つてまた

全く特別の理由の存しない限り、無鐵砲な襲撃は餘りにも危険に思はれるからである。それ故に、國土の廣大それ自體の中には既にそれだけで以つて、一國民の自由及び獨立を比較的容易に維持するの一の基礎が存在して居り、これに反して國土の狹小は直ちに侵略を誘發することになるのである。』(S. 148—150)

ヒトラーは、産兒制限及び國內植民の二方法をば以上の如く批評し否定し去つた後に、最後に、この問題に對するブルジョアのドイツ國粹陣營と自己の相違に就いて次の如く語つてゐる。一般國粹派もこれに反對してゐたが、然しその理由が甚しく異つてゐたといふ。

『増加する人口と大さの變らぬ土地との間に均衡を求むる前述の二つの方法は、ドイツの謂ゆる國粹陣營に於いてもまた事實上拒否されたものであつた。が、彼等が斯かる態度に出た理由は、私の上述の理由とは勿論異つてゐた。即ち彼等は何よりも先づ、或る種の道徳的感情から産兒制限に對して拒否の態度に出たのであつた。また彼等は國內植民にも憤激反對したのであつたが、それは彼等がこれを以つて大土地所有に反するものと考へ、結局私有財産制度に對する一般的闘争の發端をなすものと見たからであつた。特に後者の救済案、國內植民案の提唱された形式よりして(註)、彼等はまた容易に斯かる見解を正當となし得たのであつた。』(S. 150—151)

【註】 國內植民案は主として社會民主黨一派に依つて提案されて居たのである。

## 五 探るべかりし反露東方進出政策

前述の（一）産兒制限の方法と（二）國內植民の方法とは、共に國內的に問題の解決を求むるものであつて、一國民の生存確保方策としては消極政策とも謂はるべきものであるが、この二方法にして共に非なりとすれば、積極的に外に向つて活路を求むるの外はない。即ち（三）國外に（但し近くに地續きに）新たな土地を求むるか、それとも（四）國外との商工業貿易に依存するかである。

ウィルヘルム二世指導下の舊ドイツが外に向つてその活路を求めたことは、その限りに於いては正しかつた。が、ヒトラーに據れば、舊ドイツはその場合不明にして且つ不幸にも、その對外進出の方向を誤つたのであつた。ドイツは外に向つて貿易に依る雄飛の方策にではなく、端的に新たな土地を求むるの方策に、換言すれば第四の方策にではなく、第三の方策に出づべきであつた。而もその新たな土地の獲得は、遠くアフリカ等の海外にではなく、近くヨーロッパ大陸に陸續きに求めらるべきであつた。斯くして始めてドイツは安全にして且つ健全な國家たり得、その將來を保障され得るものであつた。然るに舊ドイツは、當時の海外熱及び海外競争に浮かされて、足許のヨーロッパ大陸を忘れ、反對に海外貿易及び海外植民方策を追求してゐたのであつた。ヒトラーに據れば、前に述べたオーストリアとの同盟と共に、これが舊ドイツのそもゝの誤りであつた。

このヒトラーの見解、これから順次紹介する所の敘述は、現在の歐洲時局を理解する上にも最も注意さるべきものである。殊にその『Mit Russland gegen England (ロシアと提携してイギリスへ)』、『Mit England gegen Russland (イギリスと提携してロシアへ)』、イッ流に言へば、『如何に注意するも尙ほ注意し足りない』ものである。〔因に、本個所を執筆したのは昭和十六年四月、これを雑誌「國際評論」に發表したのは同五月であつたが、其後間もなく、一、二ヶ月にして、獨ソ戦が勃發した。〕彼れはこの問題に就いて先づ次の如く語つてゐる。

- 『斯くて、増加しつゝあるドイツ人口に仕事とパンとを保證するの道は、ただ次の二つのみとなる。
- 三、能く新たなる土地を獲得して、數百萬の過剰人口をこれに送り出し得る様にし、以つて自給の基礎の上に國民を維持して行くか。又は、
- 四、工業と商業とに依つて外國の需要を充足し、その賣上金で生存を支へるやうにするか、そのいづれかである。

即ち、土地政策で行くか、それとも植民貿易政策で行くかである。

この二つの方策は、種々の方面から着目され、吟味され、推擧され、討論されて、結局遂に後者が採用されたのであつた。

が、この二つの方途の中でヨリ正しいのは無論前者であつた。

溢れ出る人口を植民する爲の新しい土地の獲得は、特に現在よりも將來を念頭に置く時に、極めて多くの長所を有するものである。全國民の基本としての健全なる農民階級を維持するの可能性は、如何にこれを高く評價するも評價し切れないものである。我國の今日の悩みの多くは、要するに、農村民衆と都市民衆との間の不健全なる關係の結果に外ならない。中小農民の確乎たる存在は、凡ゆる時に於いて、我等の今日見るが如き社會的疾患に對する最善の防護であつた。それはまた實に、一國民をして一經濟の内部循環の中に日常のパンを見出さしむる唯一の方法でもある。それに依つて商工業はその不健全なる指導的地位から退いて、一の國民的な需要經濟及び均衡經濟の一般圏内に編入される。と共に、商業及び工業は最早國民扶養の基礎ではなくして、その助成手段となるのである。商工業は凡ゆる領域に互つて自國の生産と需要との間の均衡をひたすら保つことに依り、全國民の扶養を多かれ少かれ外國から獨立せしめ、斯くて國家の自由と國民の獨立とを——特に非常時局に際して——確保することを助成するのだ。

斯かる土地政策なるものはそも、カメルーン（アフリカの舊ドイツ植民地）などに於いてその實現を見出されるものではなくして、今日に於いては専らヨーロッパに於いてのみ實現され得るものである。それ故に、我々は、この地上に於いて或る國民が他の國民よりも五十倍もの多くの土地を與へられるといふ様なことは、斷じて天の意志では有り得ないといふ立場に、冷靜且つ率直に立たねばならない。この場合我々は、政治的境界に依つて永久の權利の境界から引離さるべきではない。この世界が眞に凡てに對して生存の

機會を與へてゐるものであるならば、我等の生活に必要な土地が當然我等に與へられて然るべきなのだ。

人々は無論快くオイそれとは斯かることを許さないであらう。が、その時には、自己保存の權利がその效力を發する。而して穩和手段が拒否されたものをば、拳が引受けなければならぬ。若し我等の祖先が集まつて、今日見るが如き平和主義的迷妄に依存してその諸々の決定をなしてゐたならば、我等は今日結局現在の我が國土の僅かに三分の一しか有して居なかつたであらう。然る時には、ドイツ國民は最早ヨーロッパに於いて兎や角と口を利くだけの力も有しなかつたであらう。然り、ドイツ帝國の兩東部邊境とそれに依る我が國家及び國民範圍の廣大なることの内部的強味とは、この自己の存在の爲の當然の斷乎たる鬭争に負ふものであつて、これ有つたが爲に我々は今日あるを得てゐるのである。

更に別の理由からもこの解決策は當然とさるべきものであつた。

今日多くのヨーロッパ諸國は、逆様さかさまに立てるビラミットの如きものである。彼等のヨーロッパに於ける領有地は、その植民地や外國貿易等の爾餘の持物に較べて可笑しいほど小さい。これを稱して、尖端はヨーロッパに、基底は全世界にといふことが出来る。アメリカ合衆國は斯様な状態とは異つてゐる。即ち、合衆國はその基底を尙ほ自己の大陸に有してゐて、ただ尖端を以つて爾餘の世界と接觸してゐるに過ぎない。アメリカ合衆國の未曾有の大なる内部的力も、ヨーロッパの多くの植民地所有諸國の弱さも、實に斯かる事情から來たるものである。

イギリスと雖も決してこれが反證にはならない。といふのは、人々は餘りにも輕々に單に大英帝國のみを



見て、アングロサクソン世界そのものを忘れてゐるのである。イギリスの地位は、アメリカ合衆國と言語及び文化を同じくしてゐることに依つて、既に専ら爾餘のヨーロッパ諸國との比較にならぬほど強固なものとなり得てゐるのである。

それ故にドイツにとつては、健全なる土地政策遂行の唯一の途は、ただヨーロッパ自體に新たなる土地を獲得するに在つた。諸他の植民地はヨーロッパ人の極めて大量的な移民には適しないと思はれるものがあり、従つて如上の目的には役立ち得ないものである。のみならず、斯かる植民地域（ヨーロッパ外即ちの海外植民地）も、十九世紀に於いては最早平和手段に依つては獲得出来なくなつてゐたのである。従つて斯かる植民政策もまた、ただ困難なる鬭争に依つてのみ遂行され得るものであつた。而して、さうであるならば、ヨーロッパ外の領土を獲得する爲に戦ふよりは、寧ろ故郷たるヨーロッパ大陸に國土を護る爲に戦ふべきであり、その方が合理的なものであつたのだ。

斯くの如き決斷は、その場合、勿論徹底的な捨身の態度を必要とする。中途半端な手段や躊躇し乍らでは、斯かる任務に赴くことは出来るものではなく、これが遂行はただ最後のエネルギーまでも傾けて始めて可能なものであつた。従つてその場合には、ドイツ帝國の全政治的指導もまた、この唯一の目的に歸一されなければならなかつた。斷じて、この任務とその條件との認識に依る以外には、他の考慮に依つては一步も導かるべきではなかつた。この目的はただ鬭争に依つてのみ達成し得ることを、明瞭に認識しなければならなかつた。そして靜かに、落付いて、武力行動に着目しなければならなかつたのである。（G. 151—153）

然らば、その必要とする新たな土地をば何處に求むべきか？ 何處にでもその手當り次第取つて  
いか？ これは、更に歴史的・民族的・地理的・社會的等の種々の關係より、慎重に決定されねば

ならない所の一の重大な問題である。然らざれば、折角の正義も不正義化する恐れあるのみならず、  
多くの土地』を持つてゐる國の主たる犠牲に於いて、先づ第一にそれは、『他の國民よりも五十倍もの  
る。ヒトラーに據れば、ドイツの場合に於いてはそれは東方に、『ロシアの犠牲に於いて』求めらる  
べきであつた。これがヒトラー乃至ヒトラー一黨の有名な『東方政策』であつて、殊に『マイン・カ  
ンプ』第二卷に獨立せる一章まで設けて強調してゐる所のものであるが（第二卷第十四章『東進又は東  
方政策』、第二卷を俟つまでもなく本章の論述の中に既に、而もヨリ生々しき姿に於いて、明らかに  
されてゐる。ヒトラーに據れば、ドイツは新たな土地を求めて、而も東方に『ロシアの犠牲に於い  
て』進むべきであつた。而してその時には、實に、イギリスを味方に出ることが出来た。謂はゆる  
『イギリスと共にロシアへ』又は『イギリスと結んでロシアへ』——(Mit England gegen Russland)——  
が可能であつた。イギリスから斯かる政策を示唆されたと思はれた時さへもあつた。ドイツは其際イ

ギリスと結ぶ爲には、如何なる犠牲も惜しむべきではなかつた。然るに舊ドイツの爲政者達は、

……の犠牲も惜しむべきではなかつた。然るに舊ドイツの爲政者達は、その

そもぐの根本思想及び方向を誤つてゐた爲に、その爲すこと行ふこと凡てが中途半端にして、常にフラ／＼し、そのイギリスとの提携の機會もまた失つて了つたのであつた。そしてひたすら戦争を避けやうとしつゝ、遂に周知の如き大戰に乗り上げ、周知の如き結果に陥つて了つたのであつた。

このヒトラー乃至ヒトラー一黨の『Mit England gegen Russland (イギリスと提携してロシアへ)』の考へは、私に據れば、その根本に於いて今日に於いても何等變更されてゐないと考へられるものであるが。成るほどドイツは今日イギリスと戦つてゐるが、それは、彼等がその理想の實現の爲に、その途上に於いて、その時の事情已むなく採れる一の過程であり、世界の變局はこれを以つて終るものではないことは注意さるべきであらう。彼れは這般の關係に就いて次の如く記してゐる。

『それ故に同盟關係をば凡て専ら右の觀點から吟味し、その效用に従つてこれを評價すべきであつた。ヨーロッパに於いて土地を獲んとすれば、これは大體に於いてただロシアの犠牲に於いてのみ行はれ得た。而してその場合には、新ドイツ帝國もまた昔の組合騎士の道を歩み、ドイツの劍を以つてドイツの鋤鋤に土塊を與へ、以つてその國民に日々の糧を與へなければならなかつた。

ところで斯かる政策の爲に提携すべき國は、ヨーロッパでは當然ただ一國しか無かつた。それは即ちイギリスであつた。

ただイギリスと提携してのみ、背面を掩護されて、新しいゲルマンの進軍を開始することが出来た。而してこれが權利は、我々の祖先のこれに對する權利よりも敢へて輕少なものではなかつた。最初の鉄は曾つては「劍」を意味したものであるが、今日、我國平和主義者の何人も東方のパンを食ふことに反對してゐないのである！

その場合イギリスの好意を得る爲には、如何なる犠牲も過大とさるべきではなかつた。植民地及び海洋勢力も須らく放棄して、イギリス工業の爲に競争を省いてやるべきであつた。

ただ限りなく明確な方針のみが斯かる目的を達成することが出来た。明確な方針とは、世界貿易及び植民地の放棄、ドイツ戰艦隊の放棄、而して陸軍への全勢力手段の集中、これであつた。

その結果は或ひは一時勢力の縮小となつたかも知れない。然しその代り洋々たる將來があつたのだ。

イギリスがこの意味に於いて了解を與へたであらうと思はれた時期があつた。何故ならば、ドイツがその人口増加の捌け口をヨーロッパに求めるか、又はイギリスと關係なしにその捌け口を世界に求めるか、その孰れかでなければならぬといふことは、充分理解してゐたからである。

世紀の變る頃、ロンドン側目體からドイツに接近しやうと試みたのも、それは先づ第一に斯かる豫見に基づいたものであつた。然るに當時早くも、我々が後に至つて眞に恐しきまで見せつけられたものが現れたのであつた。人々は、イギリスの爲に火中に栗を拾はねばならぬものと考へて、これを迷惑としたのであつた。恰かも、相互の取引の基礎以外の他の基礎の上に立つ同盟なるものが有り得るかの如くである。實際

當時イギリスとは斯かる取引が充分行はれ得たのであつた。イギリス外交は常に賢明にして、反對給付なしには如何なる給付も期待されないことを、充分心得てゐたのであつた。

ドイツ對外政策が若し賢明にして、一九〇四年の日本の役割（ロシアとの戦争）を引受けてゐたと假定せんか、それに依つて獲られたドイツの成功は、測り知るべからざるものが有つたであらう。

恐らく其處には「世界戦争」も何等生じなかつたであらう。

一九〇四年に於ける血は、一九一四年から一九一八年に互る血を十倍も節約してゐたであらう。

而してドイツは今日世界に如何なる地位を占めてゐたことであつたか。（C. 153—154）

『然るに人々は何等さうした方法に出なかつたのだ。人々は何よりも先づ戦争を恐れたのであつた。而もその結果は遂に、最も不利な時期に戦争を餘儀なくされたのである。』

人々はその運命から逃れやうとして、結局その運命に追ひ付かれたのであつた。人々は世界平和の維持を夢みつゝ、世界大戦に乗り上げたのであつた。

實にこれが、何故に人々がドイツの將來の形成といふ第三の途を毫も考へなかつたかの最も重大な理由であつた。人々は、新しい土地の獲得はただ東方に於いてのみ達せられることを知つて居り、而してそれには戦争の必要なことも認めて居り乍ら、而も尙ほ如何なる價格を拂つても平和を維持しやうとしたのであつた。さればこそドイツ對外政策の標語は夙に、凡ゆる方法を以つてドイツ國民を維持するといふにあらずし

て、如何なる手段を以つても世界平和を維持するといふことになつてゐたのだ。而してそれが如何なる結果に陥つたかは周知の如くである。』(S. 160)

## 六 誤れる反英海外經濟進出政策とその根因

内に拮据を許されず、外に發展を求めて、而も自己の大陸自體に新たな土地を求めないとすれば、その對外發展は海外に向けられるの外はなく、而も植民地分割の既に大體終了せる時に於いては、主として商工業貿易に依るの外はない。海外植民地はその場合に於いては、精々その足場として第二次的重要性を有するに過ぎない。と共に、斯かる海外への進出の場合に於いては、これを防護すべき龐大な海軍力を必要とする。ウイルヘルム二世指導下の舊ドイツは、ヒトラーに據れば、この最後の途を採り、世界大戰の始まる前正にその途を歩んでゐたのであつた。

これはヒトラーに據れば正に誤れるも甚しいものであつたが、然しそれならばそれでその途に徹底すべきであつた。この途を追求する時に於いては、必然的にイギリスとの衝突を免れず、遅かれ早かれ矢張り戦争を免れないものであつた。従つてその場合に於いては、當然『Mit Russland gegen England』(ロシアと提携してイギリスへ)の對外政策を採るべきであつた。而してそれは充分可能なことであつた。然るに當時のドイツ爲政者ユンケル達はそれをも爲さず、ロシアを敵とした上にイギリスをも

敵とし、而もイギリスから宣戦を突き付けられた時には、——戦史の傳へてゐる所に據れば——全く意外なこととして『呆然』としたのである。これは、今次戦争に於けるナチス・ドイツとは全く對蹠的なものであつて、今次戦争に當つてナチス・ドイツがそのイギリスとの衝突不可避と見るや、周知の如くロシアと協定を結んで戦争に臨んだのは、全くこの『マイン・カンフ』に説いてゐる『ロシアと提携してイギリスへ』の政策を適用したものである。彼れは次の如く言つてゐる。

『斯くして第四の可能性が残されるに至つた。——工業と世界貿易、海軍力と植民地、これである。』

斯かる發展は確かに、何よりも先づ、比較的容易に且つ速やかに達成され得た。土地の植民開拓の場合に於いては、往々にして數世紀にも互る緩慢な行程を必要とする。實際その場合に於いては、早急の發展が相手ではなくて、漸次の然し根本的永續的な成長が相手であつて、其處にまた該行程の強味もあるのである。

然るに工業的發展はこれと趣きを異にし、比較的少い年月の裡に擴大されることが出来、それは密實なる糊よりも寧ろ石鹼球に似てゐる。また艦隊は、根氣強き闘争を以つて農園を建設し、これに農民を植民するよりも、勿論、ヨリ速やかに建設され得る。然し艦隊はまた農園よりもヨリ速やかに破壊され得る。

而も尙ほ、ドイツがこの第四の方法を採つた場合に於いては、人々は少くとも、その發展もまた他日結局戦争に至るべきことを明瞭に認識しなければならなかつた。愛想よく慇懃な態度や平和的氣分の絶えざる強

調に依りて、人々のいとも美しく且つ尤もらしく説き立てたが如き「諸國民の平和的競争」の中に、即ち實力に訴へるなどの必要なしに、その目的が達成されるなどといふことは、全く子供の考へでしか有り得ないものであつた。

否、我等がこの第四の途を採る時に於いては、イギリスが何時かは我等の敵とならねばならなかつた。イギリスが後に暴虐な利己主義者の本性を現はして、ドイツの平和の追求に反對するの勝手に出たことを憤慨するのは——その憤慨は全く我國自身のお目出度さを示すものであつたが——愚かといふも及ばざるものであつた。我國にはさうした適當などは勿論、遺憾乍ら出來やう筈もなかつた。

ヨーロッパの土地政策が唯だイギリスと同盟してロシアを敵としてのみ追求され得たならば、植民地政策及び世界貿易政策は逆にただロシアと提携しイギリスを敵としてのみ考へ得られたのであつた。さればこの場合に於いても果斷にその結論が下されなければならなかつた筈であり、就中オーストリアを出來るだけ速やかに放棄しなければならなかつた。如何なる方面から考察しても、このオーストリアとの同盟は既に世紀の變る頃には全く狂氣の沙汰であつた。

然るに人々はイギリスと提携してロシアに對することを何等考へなかつたと同様に、ロシアと提携してイギリスに對することも毫も考へなかつた。それといふのは、兩方の場合とも結局は實に戦争であり、而もこの戦争を避けんが爲に、色々と考へた末結局、商業政策及び工業政策を採ることを決心したものであつたからである。人々は今や實に、世界の「經濟平和的」征略を以つて、從來の武力政策の斷然打破さるべき方法



と考へたのであつた。だが、殊にイギリス側から時々全く不可解な威嚇が來た時、恐らく彼等は自分の採れる政策に充分の自信が無かつたであらう。それ故に彼等はまた艦隊を建設することも決心したのであつた。然しそれは矢張り、イギリスを攻撃してこれを撃破する爲ではなくして、例の謂はゆる「世界平和」と世界の「平和的」征服を擁護する爲であつた。されば該艦隊の建設も、實にその數の上に於いてのみならず、また個々の軍艦の噸數並びに裝備の上に於いて、凡ゆる點に於いて若干控へ目にされ、以つて矢張り結局その「平和的」意圖を示さうとしたのであつた。(Cf. 186—187)

ヒトラーが右に言つてゐる『人々』乃至『彼等』といふのは、結局要するに當時のドイツ爲政者階級のことに外ならぬものであるが、然らば彼等は どうして斯かる誤れる政策——或はヨリ正確に言へば無政策——のみを事とし、而も常に中途半端なこと許り行つてゐたのであらうか？ 當時ドイツには、ウイルヘルム二世皇帝の信任厚くして戦争の始まる久しき以前より宰相の任にあつたフォン・ベートマン・ホルヴェーク（第一次戦時内閣宰相）を始めとして、第二次戦時内閣宰相となつたフォン・ミヒャエリス、第三次宰相となつたフォン・ヘルトリング、第四次宰相となつたフォン・マックス等のエライ存在が存在し——因にドイツで『フォン』といふのは貴族の印稱で、この四人の戦時宰相のうち確か二人か三人かまでは更に大公だの伯爵だのといふ人達であつたが、いづれにしても宰相に任ぜ

られる位であるからエライ人達であつたらうと思はれる——更に内閣の更迭をも支配した軍部にはフオン・モルトケ、フオン・ヒンデンブルグ等の有名な將軍達が居た。これ程の『嚇々』たる人々が揃つて居ながら、ドイツはどうして敗れたのであらうか？ 彼等の眼は曇り硝子からでも成つて居り、彼等の頭腦は少し細胞でも足らなかつたのであらうか？ 否、ヒトラーに言はせれば、彼等は寧ろ『賢明』なる人達であつた。が、彼等は卑俗的に『賢明』であり、そしてまた一般國民とはカケ離れた貴族官僚——謂はゆるフオン階級の所屬者であつたが爲に、一國民の指導者として最も肝腎なものを缺いてゐたのであつた。それは何んであつたか？ 彼等は國家乃至國民なるものに就いて、従つてまた戦争は何んの爲に戦はるべきものかに就いて、正しいな認識を缺いてゐたのであつた。

一體、國家とは如何なるものであり、何んの爲に存在するものであるか？ ヒトラーに據れば、國家は單にその支配者の威徳や武勳の發揚機關たるものではないと共に、また單に庶民の一時的な經濟機關たるものでもない。國家は、要するに、種族を同じうする一定國民が、その種族的生存を後にま

で互つて確保さんが爲に、その種族的本能よりする恒久的生活共同體たるものである。これは小にしては家族に通じ、大にしては『世界人類』にまで通ずるものであるが、國家はその典型的なものである。國家の目的及び意義また其處に求めらるべきであり、戦争は元よりその一切の活動は端的に其處から出發しなければならぬ。政治も經濟も、統制も自由も、戦争も平和も、凡てその爲のものでな

なければならない。その時に於いて國家乃至國民は最も強く且つ的確に戦ひ得る。子供を救はんとする母の種族的本能は彼女をして死にも突進せしめる。自民族を守らんとする種族的本能のみが、諸々の男子をして槍襖の間にも突進せしむる。

然るに舊ドイツの爲政者達は、ヒトラーに據れば、このことをどうしても理解しなかつた。彼等は國民を激勵して口を開けば、ただ『カイザーの爲』とか、『ドイツ軍の名譽の爲』とか、『世界平和の爲』とか、然らずんば精々『ドイツ經濟の爲』とかを叫んでゐた。これは恐るべきことであつた。何故ならば、他の色々の原因と相俟つて、これが爲にドイツ國民は漸次その戦意を失つて行つたからである。ヒトラーは、前記の第四の方法即ち商工業貿易及びこれが爲の植民地主義の考へ——經濟に依る『平和的征服』の考へ——の根柢を成してゐる所の經濟第一主義の思想を批判し、これに關聯して同じ章の中に次の如く言つてゐる。

『國家は、一定範圍の生活地域に於いて經濟的任務を遂行する爲の經濟的契約者の集合ではなくして、自己の種族の存續と該種族に對して神の豫定せる生存目的の達成とをヨリ良く可能ならしめる爲の、肉體的精神的に同種の生命體（人間）の共同體組織である。國家の目的と意義とはこの點にあつて、それ以外の何ものにもない……。

種族維持の本能は人間共同體形成の第一の原因である。従つて實に國家は民族的有機體であつて、經濟的組織體ではない。この區別は特に今日の謂はゆる「爲政者」には全く理解出来ないほど大きいものである。若し人々が、國家を形成する又は國家を維持する眞の力は何んであるかと問ふならば、それはただ一つの言葉に要約され得る。曰く、種族全體の爲の個人の犠牲能力及び犠牲意志これである……。イギリス人がその戰爭に對して考へ深くも與へた理由付けほど、民族精神の認識に於けるイギリス人の心理的優秀性を良く證明してゐるものはない。我等は目先のパン〔商工業貿易〕の爲に戦はされたのに反し、イギリスは「自由」の爲に戦つたのであつた。而も決して自國民の自由の爲に許りでなく、弱小諸民族の自由の爲に戦つたのであつた。我國の人々はこのイギリスの鐵面皮を或は嘲笑し、或は憤慨した。が、それは寧ろ、ドイツの謂はゆる政治なるものが戦前に於いて、既に如何に無思慮な馬鹿なものになつてゐたかを證明するものであつたのだ。諸々の男子をして自由なる意志と決意とから死に赴かしむる所の力の本體に就いて、當時のドイツの謂はゆる政治は、最早微少の知覺すらも持ち合せなかつたのだ。

……自分の小兒を救はんとする母の焦慮は、か弱き母をもして英雄たらしめる。種族維持の爲の戦ひ、彼等を保育する群團乃至國家を維持する爲の戦ひのみが、諸々の男子をして何時でも敵の槍の中に突進せしめる。……

貿易政策及び植民地政策に依り平和的方法を以つて、ドイツ國民の爲に世界を開拓し又はこれを征服さへもすることが出來ると考へた戦前時代のドイツの考へなるものは、眞に國家を形成し維持する資質並びにそ

れから來たる凡ゆる洞察、意力、行動、決意を喪失せる一の典型的な例であつた。而してこれに對する自然、法則的清算こそは實に世界大戰とその結果であつた。』(G. 164-169)

私はこのヒトラーの敘述を読み、當時のドイツを想像して、何かしら焦慮を感じるものである。當時ドイツは國民主義の徹底を缺きつゝも、國民主義的言論までは彈壓しなかつたかの如くである。が、若し何處かにその國民の運命を賭せる重大な戦ひの時に當つて、これに眞の勝利を齎らすべき國民主義的言論までも、舊ドイツと同じくただその爲政者の無知無自覺の爲に彈壓してゐる國があつたとしたら、その國家國民の戦ひは果してどういふことになるであらうか？『マイン・カンフ』はこの點でも我々の考ふべきものを與へてゐる。

## 七 上下を蔽ふ甚しき認識不足

ヒトラーに據れば、一九一四年—一九一八年の戦争に入るに先立つて、ウイルヘルム二世指導下の舊ドイツが、既に久しくその國策を全く誤つてゐたことは、以上の如くである。これは畢竟するに、同カイザー以下の爲政者階級が、徒らにその恰好だけ嚴めしくその胸間飾物だけ偉大にして、實際は到底一國指導者たるの資格のなかつたことを意味するものであるが、この戦前ユンケル・ドイツ

の著しい特徴の一つは各方面に亙る甚しいその認識不足であつた。前述の國策の誤りもその現れといふことが出來、對オーストリア同盟問題といひ、重商貿易政策問題といひ、その現れならざるはないのであるが、この認識不足は獨り爲政者階級のみならず、當時のドイツ上下を蔽へる一般的現象であつた。或は、上が上であつたから下も下であつたのだとも言へるであらう。ヒトラーに據れば、前に紹介した所に見るオーストリアの真相に對するドイツ上下の認識缺如の如きは、その最も甚しく且つ最も重大なものであつた。が、その認識不足の最も代表的なもの、最も悲喜劇的なものに、更にイギリス人といふものに對する認識不足があつた。

世界史殊にその植民史を少しく注意して學ぶ者は誰でも知るが如く、イギリス乃至イギリス人ほど、その目的の爲には手段も選ばず、殘虐に、執拗に、大膽に、斷乎として戰ふ者はない。殊にその東亞經略に於いて然りしもので、その到るところ火砲と火酒と阿片とを以つて土民を征服し、その或る場所の如きに於いてはこれを皆殺しにさへしたのであつた。今日の大英帝國なるものは實に斯くして、彼等の果敢な殘虐性と幾多の弱小民族の犠牲との上に築き上げられたものである。然るに大戰前のドイツは上下を擧げて、イギリス人をば到底碌に戰爭などの出來る國民ではないと考へ、精々商人に適する國民位に考へ、ただ恐るべきはその富なりとし、これを著しく輕侮してゐた。然るにロシア及びフランスの二大對敵を對手に戰爭となり、而もドイツ側が到るところ勝利を示した時に於いて、

イギリスから突然且つ斷乎として宣戰を突き付けられ、前に言つたやうにドイツ爲政者達は果然としたのであつた。のみならず、實際に戰線にイギリス軍と相見ゆるに及んで、ドイツ兵士は、イギリス兵士が今まで聞いてゐた所とは全く異つて意外に強いのにビックリしたのであつた。而してこれがドイツ軍の作戰及び士氣への影響は甚大なものであつた。政治的にも作戰的にも、ドイツはこれに依つて重大な齟齬を來したのであつた。ヒトラーは次の如く言つてゐる。

『世界の「經濟的平和的」征服といふ冗言は、曾つて國家政策の指導原理にまで祭り上げられた所の最大  
のナンセンスであつた。このナンセンスは、その效力の可能性の證人として、敢へて憚る所もなくイギリス  
が擧げられたことに依つて、愈々益々大なるものとなつた。その場合、我國の講壇歴史論及び歴史觀が共に  
犯した所の罪たるや、これを償はんとして償ひ得ないものであつた。それは實に、如何に多くの人々が歴史  
を理解する又は會得することなくして、單にこれを「學ぶ」かを示す所の適切なる證據たるものであつた。  
人々は、正にイギリスに於いてこそ、前記の教説の痛烈な否定を見出さなければならなかつたのだ。實にイ  
ギリス國民ほど野獸的に、殘忍に、劍を以つてその經濟征服を巧みに進め、且つこれを引き續いて無慈悲に  
護つて來た國民は、この世界に又とないのである。政治權力から經濟所得を引出し、更に一切の經濟勢力を  
また政治勢力に注ぎ移すことは、これ正にイギリス政治の特徴ではないか！ この場合、イギリス人は臆病

にしてその經濟政策の爲に自己の血を賭する様なことはないと考えなければ、それは何んたる大きな誤謬たることか！ イギリス國民が「國民軍」を持たなかつたといふことは、この場合決してその反對を證明することにはならない。何故ならば、その場合問題はその時の國防力の軍事的形式にあるのではなくして、寧ろその存在せる國防力を賭するの意志と決斷とにあるのである。イギリスは常にその必要とする軍備を有してゐた。イギリスは常にその勝利に必要とされた武器を以つて戦つた。彼れは傭兵で間に合つた間は傭兵を以つて戦つた。だが、若しただ血の犠牲のみが勝利を齎らし得る場合には、全國民の最も尊い血を流すこともまた飽くまで辭しなかつた。鬭争の決意と鬭争の根強さ並びにその果敢な遂行は、常に一貫して變らなかつた。

然るに我がドイツに於いては、學校、新聞、漫畫等を通じて、イギリス人の本質殊にその帝國の本質に就いて、一の間違つた觀念を養成してゐた。而してこの誤つた觀念は、一の最も惡質の自己錯誤とまでならなければならなかつた。蓋し、この馬鹿げたことに依つて凡てのものが漸次影響され、その結果はイギリスに對する一の輕侮となり、後にその爲に手痛く復讐を受けたのである。その錯誤たるや全く甚しいものであつて、人々はイギリスを以つて如才のない然し人間的には全く信ぜられないほど臆病な商人と考へてゐたのであつた。苟くもイギリスほど偉大な世界帝國の人間が、徒らに逃げ隠れたり眼を廻したり許りしてゐる筈はないといふことをば、我が國の講壇科學の尤もらしい先生達には遺憾乍ら分らなかつた。少數の警告者は有つても看過され默殺された。我々が後にフランドーに於いてイギリス兵と直接對戦した時、我が戰友達が如



何に驚いた顔したかを、私は今尚ほハッキリと憶ひ出す。彼等イギリス兵は——スコットランド兵であつたが——我々が漫畫新聞や早分り通信でイギリス兵の眞狀として描き知らされてゐたものとは、全く似ても似付かぬものであつて、この考へは既に最初の戦闘の日以來凡ての戦友の腦裡に浮んで來たのであつた。』

(S. 158—159)

一國が崩壊する時又は躓く時は、一家が崩壊する時乃至躓く時と同じく、如何とも致し方のないものである。この舊ドイツの認識不足は誤謬もその元を質せば、結局その爲政者達が無知無自覺にして誤つた教育を國民に施してゐたことに基づくのであるが、一家の主人がダメになればその家族の一人や二人が如何に頑張つてもドウにもならないと同様に、一國に於いてもその爲政者階級がダメなれば、少數の識者が如何に努力しても何んともならないのだ。否、國家の場合に於いては、斯かる識者は謂はゆる『國策に反する』ものとして彈壓され、監獄にでも投ぜられるのが關の山であらう。ドイツは斯くしてあちこちに齟齬を來たし、遂に全面的崩壊に陥つたのであるが、ヒトラーは最後に次の如く言つてゐる。

『斯くして周知の「局外者」(民間の識者)にとつては、「爲政者」(當局者)が何故に且つ如何に破滅に向

つて一直線に進むか、そして愛する國民がハーメルンのテリヤ犬の如くにその後について行くかを傍觀してゐるより外に全く致し方が無かつたのだ。』(S. 164)

## 第五章 大戰勃發と戰線の經驗

### 一 奧國皇太子の凶死——大戰勃發

前大戰の始つた時、ドイツは、軍事的にこそ一應の用意は有つたが、政治的思想的には——ヒトラに據れば——全く何等の用意も無かつたことは、前章に見たる如くである。當時のドイツ爲政者達はウイルヘルム二世を始めとして、明らかに一の『世界征服』を望みつゝ、而も常に『世界平和』を望んでゐた。謂はゆる『平和的經濟政策』に依つて、無言の武力を背景とし、少くとも國家の運命を賭するが如き戰爭とならない範圍内に於いて『平和裡に世界を征服せん』ものと、而してその可能なるものと、考へてゐたのであつた。これは誰が考へても蟲の宜い話と言ふべく、ヒトラに據ればこれこそ正にドイツ爲政者階級の過誤たり罪たるものであつたが、ウイルヘルム二世を始めとする彼等爲政者階級は、間違つて戰爭となつても、陸海軍さへ強大旺盛なれば、大丈夫なものと考へてゐたかの如くであつた。

然るに、このドイツ爲政階級の一切の豫期に反し、戰爭は遂に、而も世界的規模に於いて來ねばな

らなかつた。

一九一四年六月二十八日、オーストリア皇太子フエルヂナント大公は、その妃と共に、同國の數年前より正式に併合する所となれるボスニア地方サラエボに行啓し、一群の同地方セルビア系青年の手に暗殺された。彼等は、『南方スラヴ』ことバルカン地方スラヴ系民族の一大糾合を目指す『大セルビア』主義を奉ずるものであり、従つてまたオーストリアの同地方併合を恨みとするものであつた。襲撃は組織的に續けさまでに行はれ、遂に目的は達せられたのであつた。

これは、ヒトラーに據れば、運命の大なる皮肉であつた。

何故ならば、フエルヂナント大公こそは、オーストリアに於ける『スラヴ化』の元兇であつたのだ。彼れの妃はスラヴ系チエコ人であり、その家庭（皇室）に於いてはチエコ語とスラヴ語を話し、その血に於いてのみならず言語に於いてまで、オーストリアを根柢からスラヴ化しつゝあつた『スラヴ最大の朋友』であつたのだ。そのスラヴ主義者が、今や、同じくスラヴ主義者の手に斃れたのである。ハプスブルグ權力者達は、その國內のスラヴ化を以つて、その國內のスラヴ系諸民族と融合し、以つてその腐朽せる汚れたる『神聖帝國』を維持せんとしたのであつたが、『南方スラヴ』は『大セルビア』を以つて彼等共同の理想の母國となし、血を以つてこのオーストリアの意志を拒否したのである。

戦争勃發の由來や經緯を研究することは我々の目的ではないので、茲にはこれらの點に就いては簡

單に述べるに止めるが、これは明らかにセルビア（大戰後のユーゴスラビア）を中心とする『南方スラヴ』のオーストリアに對する一の『挑戦』であつた。さらでだに『大セルビア主義』に惱まされ、頭痛鉢巻姿の半病人となつてゐたオーストリアが、これを以つて腦天を叩き割られた如く感じたのも無理ならぬことであつた。のみならず、調査の結果はこの兇行の背後には、セルビア軍憲が動いてゐたことが明らかにされた。セルビアの背後には更に大ロシアがゐた。オーストリアは約一ヶ月に至る『無氣味な沈黙』を守つた後、十個條に互る最後通牒をセルビアに突き付けた。この最後通牒は、當時世界に依つて、『セルビアの獨立國の地位を無視せる餘りにも過酷なもの』とされたものであるが、オーストリアとしては、此際問題をば決定的に解決し、將來永久に互つて禍根を斷たんものと考えたのであつた。

オーストリアの要求はその比較的重要な點に於いて過半容れられたが、最後の重要な點に於いて容れられなかつた。セルビアは斷乎としてこれを拒否したのであつた。斯くて事件の起りし正に一ヶ月後の七月二十八日、オーストリアはセルビアに對して宣戰を布告し、遂に兩國の開戰となつた。と共に、直ちに、セルビアを援けてロシアの對オーストリア開戰となり、次いでオーストリアを援けてドイツの對ロシア開戰（八月一日）、ロシアを援けてフランスの對ドイツ開戰（八月三日）となり、茲に前古未曾有の世界大戰がその火蓋を切られたのであつた。

それは僅か五日間の出来事であつた。この場合、いづれから先に宣戦を布告したかの如きは問題ではなからう。いづれは斯くなる運命に在つたのだ。それはサラエボは於ける暗殺事件から起算しても僅か一ヶ月と五日間の出来事であつたが、その原因は久しきに亙つて形成されて來て居たのであつて、それがただサラエボ事件を機會として爆發したまでに過ぎなかつたのである。

當時ヒトラーは、夙にオーストリアを去つてドイツ・ミュンヘンへと來て居り、その畫工としての傍ら、コツ／＼として殊に政治問題を勉強してゐたこと、そしてつく／＼當時の一般爲政者階級なるものに對して殆んど絶望的憂鬱を感じしめられてゐたことは、我々の既に見た所である。彼れは實に、大戰前夜のドイツに在つて、『彼等爲政者達は何故に且つ如何に破滅に向つて一直線に進むか、而も愛する國民がハーメルンのテリヤ犬の如くにその後を跟いて行くか』を痛感してゐたのであつた。然し彼れは、或はそれ故に彼れは、サラエボ事件が起り遂に戦争とまでなるや、來たるべきものが遂に來たるものとして、寧ろ歡呼してこれを迎へたのであつた。彼れが何故に且つ如何に喜んだかは我々の尙ほ後に見る所であるが、彼れは先づ右のサラエボ事件及びオーストリアの宣戦問題に就いて次の如く記してゐる。

『フランク・フェルデナンド大公殺害の報がミュンヘンに到着した時——私は丁度家に籠つてゐて、事件

の顛末をば漠然と知つたに過ぎなかつたが——私の先づ以つて心配したことは、その彈丸は恐らく、此の皇太子の不斷のスラブ化工作を憤慨し、ドイツ國民をこの内部の敵から解放せんと欲したドイツ學生のピストルから飛び出したであらう、といふことであつた。然りとすれば、その結果が何んであるかは直ちに想像され得る所であつた。即ちそれは新しき迫害の波であつた。而してその迫害は今や全世界の前に「是認」され「理由付け」られるのであつた。だが間もなく推定犯人達の名前を聞き、更に彼等がセルビア人と確認されたことを讀んだ時、私は測り知り難き運命の復讐に幽かな戰慄を覺えた。

最大のスラブの朋友はスラブ主義熱狂者の彈丸に斃れたのだ。

オーストリアとセルビアとの關係を最近絶えず觀察する機會を有した者は、今や石が轉り出して最早これを停めることが出来ないと言ふことを、殆んど一瞬たりとも疑ふことが出来なかつた。

ウイン政府の發した最後通牒の形式及び内容について今日此の政府に非難を浴せるのは間違つてゐる。世界の他の如何なる國と雖も同じ立場、同じ状態に置かれたら、それ以外の行動をとることが出来なかつたであらう。オーストリアは其の東南方國境に峻嚴なる不倶戴天の仇敵を有してゐた。この仇敵は、益々頻繁にオーストリアに挑戦し來たり、結局同帝國を粉碎するの好機會が来るまでは一步も譲歩せぬかの如くであつた。斯うした場合が遅くとも老カイゼルの薨去と共に必然的に到來するであらう、而も其時には既にこの主國は恐らく最早抵抗を爲すことが出来ないであらう、と憂慮される理由があつた……。

然り、さうでなかつたら恐らく尙は避け得られたであらう所の戰爭を今や遂に始めるに至つたものとし

て、ウイン政府要路者達を非難するならば、それは彼等に對して正に不當な非難たるものである。早避けられなかつたのである。精々尙は一兩年之れを延ばすことが出来た位のものである。戦争は最  
ざる清算を常に延引せんと努めて、遂に最も不利なる時期に開戦するを餘儀なくされたことは、實にドイツ  
並にオーストリア外交の禍ひであつた。平和を今一度救はうとする企圖は、戦争をヨリ一層不利な時期にま  
で持越したただけであらうことは、明らかに疑ひなき所であつた。

否、此の戦争を欲しなかつた者も、亦その結論を得るの勇氣を振ひ起さなければならなかつた。而してそ  
の結論は、ただオーストリアの犠牲に於いてのみ存在し得たであらう。その場合にも尙ほ戦争は來たであ  
らう。ただ然し、最早我がドイツに對する全世界の戦争としてではなく、代ふるにハプスブルグ王國分割の形  
式に於いてである。而してその時には人々は、空手を以つて運命にその成行を委すべく協力乃至傍觀するを  
決意しなければならなかつたのだ。

然るに、今日戦争の發生に就いて最も多く呪ひ且つ最も巧妙に批判する連中こそは實に、戦争に進むより  
に最も禍ひ深く協力した連中であつたのだ。

社民主黨は、數十年來ロシアに對する戦争の煽動を最も卑劣に行つてゐた。また中央黨は、宗教的觀點  
からオーストリア國家を最も多くドイツの政策の眼目となし中心となしてゐたのであつた。今や彼等は此の  
狂妄行爲の結果を負擔しなければならなかつた。來たるべきものは必然的に來たらねばならなかつた。而も  
如何なる事情の下に於ても最早これを避けることが出来なかつた。その場合に於けるドイツ政府の罪は、唯



だ平和を維持することにのみ汲々として常に開戦の都合好き時機を逸し、世界平和を維持せんとして誤れる同盟に落ち込み、そして結局世界聯合（聯合諸國）の犠牲となつたことにあつた。世界聯合こそは世界大戦の決断を以つて世界平和維持への熱望を阻止したのである。

ウイン政府が當時その最後通牒にもつと穩かな他の形式を與へてゐたとしても、精々該政府自體が國民の憤激に依つて掃き棄てられてゐたらうと言ふ一事を除いては、最早狀況に毫も變りはなかつたであらう。蓋し、國民大衆の眼には最後通牒の調子は尙ほ極めて遠慮勝ちなものであつて、決して行き過ぎたものでも亦餘りに殘酷に過ぎたものでもなかつたのである。今日此の事を否定せんと試みる者は忘れつばき馬鹿野郎か、さもなくば全く意識的な虚言者である。』(C. 173—176)

## 二 時代刷新と民族自由の爲の戦ひ

ヒトラーが寧ろ喜んで戦争を迎へたことは、彼れがあれほど憎惡してゐたハブスブルグ政權『オーストリア政府をば、この問題に就いてだけは右の如く擁護してゐる所にも既に窺はれるが、然らば彼れは何故に斯くあつたか？ 彼れは戦争勃發と共に、一朝にして、反ハブスブルグ『反オーストリア主義者からハブスブルグ』オーストリア主義者に、換言すれば『民族的國民的國家主義者』『國民社會主義者』から單なる『王朝的愛國主義者』『單なる臣従的『俗流的國家主義者』に、『轉向』した

のであつたらうか？　當時ドイツ、オーストリアに於いては、數多の社會民主主義者及び自由主義者は戦争直前までにこれに反對して居乍ら、大勢既にこれに賛成し且つ四圍の情勢既にこれを免れずと見るや惶惶としてこれに賛成し追隨し、遂に天晴れその『鼓舞者』とまでなつたのであるが、彼れもまた同じであつたらうか？

否、ヒトラーに於いてはこれとは全く異つてゐた。彼れは以前から寧ろ戦争を欲してゐた。彼れに據れば、これまで我々の見て來た所にも既に明らかなるが如く（例へば前章對外策論參照）、夙にドイツ民族はその新たなる生存の自由の獲得の爲に戦はねばならぬものであり、その點に於いては寧ろ遲きに失した程であつた。が、それ許りではない。彼れに據れば、資本主義自由主義の支配する時代、而してその上に　當時のドイツ、オーストリアに於いて然りであつたやうに　時代の要求も國民の疾苦も知らざる貴族や軍閥や官僚が種々と苟合して政治する時代なるものは、餘りにも愚劣なるものであり、禍害なものであり、憂鬱なものであつた。少くとも彼れにとつては、或は心有る若者にとつては、それは堪えられざるものであり、速やかに打開轉換されねばならぬものであつた。彼れは未だこれが爲に一の獨立せる運動を起すには至つてゐなかつたが、然しその痛切に要望してゐたことは、これまでの彼れの論述の中にも明らかなところである。

彼れは、この二つのもの、即ち愚劣なる存在の支配する時代の刷新とドイツ民族の新たなる自由の

獲得の途をば、戦争の中に認めたのであつた。如何に彼れは斯く考へて、與へられたる戦争を喜んで迎へたかは、次の彼れの『世界大戦』（第一卷第五章）冒頭の敘述の中にハッキリと窺はれる。

「曾つて私はその青春時代、年少氣銳の若者として、時代の榮譽の殿堂が唯だ商人や官吏の爲にのみ建てられるであらう様な時代に生れ合はせたことほど、世にも悲しく思はれたことはなかつた。當時の情勢たるや、歴史的事件の波は既に收つて、未來は正にただ「平和的競争」のみが、換言すれば暴力的な防衛方法ば抜きにした相互の入念な騙し合ひのみが有るやうに思はれた。各國は競ふて益々その企業を同じうし始め、據つて以つてその足場を奪ひ合ひ、その顧客と契約とを爭ひ、凡ゆる方法を以つて利を貪るべく努め、而もこれをば凡て大聲の無邪氣な呼號の下に競ひ合ふのであつた。而もこの發展は、停止すべくも見えないのみか、やがて遂には——一般の推奨の下に——世界を擧げて唯一つの大百貨店と化せしめ、その入口には最も狡猾な奸商と最も凡庸な行政官吏との胸像が、永しへに飾り立てられるであらうやうに思はれた……」。

どうして我々はもう百年も前に生れなかつたであらうか？ 例へば彼の解放戦争（一八一三年から一五年に互つて佛國ナポレオン一世に對して行はれた戦争）の時代には、恐らく人々は假令「仕事」は無くとも、もつと何等かの生き甲斐があつたのではなからうか？！

私は、その見るが如く餘りにも遅く始められた私の此の世の旅を、屢々自分で腹立たしく思ひ、その眼前の「平穩と秩序」の時代なるものを、運命の不當な虐待と思つた。私は、若い時に既に何等の「平和主義

者」でもなく、斯かる方面への一切の教育的企圖は無駄であつた。

その時に於ける南亞戰爭の勃發は、私には一の電雷の如く思はれた。

私は毎日新聞を待ち焦れて、その電報や通信を貪り讀んだ。せめて遠くからでも勇ましい戦ひの目撃者なり得ることが、私には幸福であつた。

日露戰爭時代には私は既に大體成人して居り、自然又注意深くもなつてゐた。私はその場合既に、以前にも増して國民的理由より態度するやうになつてゐた。而して私は當時、我等の意見の決定に當つて直ちに日本側に味方した。私はロシアの敗北の中に同時にオーストリア・スラヴ民族の敗北を見たのであつた。

それから幾年かの歲月は流れ去つた。曾つて年少の私に老朽の病弱の如く思はれた所のは、今や嵐の前の静けさと感じられた。既に私のウイン時代に、バルカンの空には颶風を豫告する所のあの鬱陶しき蒸暑さがあつた。そして屢々鋭い稻妻も閃めいたが、併し直ぐ氣味惡き暗黒の中へ再び消え去つて行つた。それからバルカン戰爭が起つた。それと共に神經過敏となれる歐洲の天地に最初の突風が吹き過ぎた。今や來らんとする時代は、燃ゆる熱帶の灼熱の如く蒸しつゝ、重苦しき夢魔の如く人々の上に乘し懸つて來た。それが爲に破局接近の感情は、絶え間なき憂ひの結果、遂に一つの憧れとまでなつた。最早阻止することの出來ぬ運命に對して、天は自由にその道を與へて呉れ、ば宜いといふ憧れにである。その時早くも最初の電光が落下した。一天忽ち荒れ出し、その雷鳴の中には世界大戰の砲火の響きが混つてゐた。(S. 172-173)



人間は欲するが故に希望し信ずる。國民中の壓倒的大多數は既にとつから恒久的な不安狀態に厭きてゐた。だからこそ、彼等はオーストリア、セルビア間の紛争の平和的解決を最早信ぜずして、却つて最終決定的清算を希望したといふことも、充分理解されるのであつた。而して私も亦これら數百萬人の中の一人であつた。

暗殺の報道がミュンヘンに傳へられるや否や、二つの考へが私の頭に閃めいた。第一には、戦争は遂に避け得られないであらうと言ふこと、第二には、今やハプスブルグ國家は餘儀なくも同盟を保持しなければならぬと言ふことであつた……。

この争ひに對する私自身の態度は同様に極めて簡單明瞭であつた。私にとつてはオーストリアがセルビアに對する何等かの報復の爲に戦ふものではなくして、寧ろドイツが其の存立の爲に、ドイツ國民がその興亡の爲に、その自由と將來との爲に戦ふものであつた。ビスマルクの事業が今や戦はれなければならなかつて獲得した所のものを、今や若きドイツは新たに戦ひ取らなければならなかつた。而して此の戦争が勝利に終つたならば、我が國民は世界大國の間に再び有力な勢力として登場し、茲に再びドイツ帝國は平和の偉大なる楯として認められることが出来たのであつた。愛する平和の爲に子孫の日常のパンを減らす必要も無しにだ。

私は曾つて青年乃至若き人間として、少くとも一度は私にとつて國民的感激が空虚な妄想でないことの事

實に依つて證明し得ることを希望した。私には、恐らく衷心よりの權利を持たずして萬歳を叫ぶことは、屢々殆んど罪惡のやうに思はれた。凡ての遊戲が終熄して運命の女神の冷酷なる手が、國民及び人類の心意の眞實さと確固性とを計り初める所に於いて一度試験せらるゝことなくして、抑々誰か萬歳と言ふ言葉を使ふを許されたのであらうか？斯くて私は他の幾百萬の人々と同じやうに、今や遂にこの跋行的な感情から解放され得ると言ふ誇らかな幸福の前に心を躍らせたのであつた。私は頻りと「ドイチエランド・ユーパー・アレス」を歌ひ、そして有らん限りの聲を出して萬歳を叫んだのであつた。蓋しこの氣持ちの眞實を證明するの本人として永遠の審判者たる神の法廷に立ち得ることは、私には遅れ馳せ乍らも與へられたる恩惠のやうに思はれたからである……』(S. 176—179)

### 三 志願出征——フランダ―戰線へ

愚劣なる時代からの解放と祖國の將來の確保——これが前大戰に於けるドイツの戦ひにヒトラーの認めた戰爭意義であつたことは、前節に見るが如くである。この場合、愚劣なる時代からの解放といふだけが、恐らく當時のユンケル・ドイツの『戰爭目的』よりは餘計であつたであらう。が、この氣持ちは、眞に祖國を愛し同胞を愛し而して時代の憂鬱を感じてゐる者、特にその若き者には、容易に理解され得るであらう。前大戰が始まつた時には彼れは、數へ年正に二十六歳であつたわけだが、我

々の既に見た如く、夙に彼れは一の立派な Nationalsozialist となつてゐたのである。

斯くの如くして彼れは、戦争が始まるや、早速バワリア軍隊に志願して出たのであつた。バワリア州の首都ミュンヘンに移住して來てゐたからであり、當時彼れはドイツ聯邦の有力な一邦たるバワリアの統轄する所であつたからである。本來ならば彼れは、國籍は當時オーストリアに在つたわけであるから、オーストリアに歸つて志願すべきであつたらうが、彼れはオーストリアの爲には、例へどドイツと共にであらうとも、戦ふ氣にはなれなかつたのである。それやこれやの爲に彼れは、戦後即ち舊オーストリア及び舊ドイツの崩壊後、その國籍が失はれ、久しく『無國籍者』となつてゐたことは有名な話であるが、彼れがこのバワリア軍隊の志願及びその許されて入隊した時の思ひ出に就いて次の如く記してゐる。如何に彼れが感激を以つて戦ひに臨んだかはまぎ／＼窺はれる。

『それ故に私は問題の起つた最初から、愈々戦争となつた場合には——因に私には戦争は避けられないと思はれたのであつた——どうあらうとも早速本を棄て去らうと固く覺悟を決めてゐた。と共に私はまた、その場合には、私の内心の聲が一度指し示した所〔軍隊〕に、必らず私の席が有るものと信じてゐた。政治的理由から私は夙に先づ第一にオーストリアを見棄てゝゐた。今や愈々戦ひの始まるに及んで私は、



この私の精神を先づ充分考慮に入れねばならなかつたことは言ふまでもない。私はハブスブルグ國家の爲には戦ふことを欲しなかつた。ただ私は、ドイツ民族とその結晶たるドイツ帝國の爲に、何時でも喜んで死なんとしたのであつた。

八月三日私は、バワリア王ルドウイツヒ三世陛下に宛て、何處かバワリア聯隊の一つに入れて貰ふ様に請ふて直接願書を提出した。當時、内閣官房は明らかに多忙であつた。だから、私がその翌日早くも私の願ひに對する返事を受取つた時には、私の喜びはそれだけ一層大なるものがあつた。私は慄へる手で返書を開いて、私の願ひを許すからバワリア聯隊の或る一つに出頭するやうにとの通達を讀んだのであつたが、その時には私の歡びと感謝とはその止まる所を知らなかつた。かくてそれから數日後には軍服——その後約六年後に至つて始めて脱ぐに至つた所の——を着けたのであつた。

斯くして今や、恐らく一切のドイツ人にとつて然りであつたらうやうに、私にとつてもこの世の私の生活の中で最も忘れ難い、そして最も偉大な時代が始まつた。この絶大なる戦ひの出來事の前には過去の一切は一の味氣なき空無と化し去つた。今日、この偉大なる出來事が正に十周年を迎へる時に當つて、私は、誇らかなる悲哀を以つて、運命が恩恵を以つて私にもその參加を許した所の、この我が國民の偉大なる戦ひの始まれる數週間といふものを思ひ出すものである。

恰かも昨日の出來事の如くに、私の腦裡には、當時の有様が次から次へと浮んで来る。私は、私の愛する戰友達に交つて武裝し、それから先づ始めて行進し、練習し、その他等々をして、遂に出征の日の來たこ

を思ひ浮べる。

他の多くの戦友達も同じであつたらうと思ふが、當時ただ一つの心配が私の心を悩ました。それは、我々の戦線に出動するのが遅過ぎはしないかといふことであつた、ただこの心配のみが屢々私を落着かせなかつた。だから、新たなる武勳行動の傳へられて勝利の歡呼の起る毎に、私には一抹の幽かな苦痛が感じられ、新たなる勝利の傳へられる毎に、我々の出征の遅くなる恐れが高まるやうに思はれたのであつた。』

(S. 179—180)

ヒトラーの入つた聯隊は、後に見るが如くヒトラーがこれを屢々『志願聯隊』と呼んでゐる所を見ると、殆んど志願兵からのみ成る聯隊であつたらしいが、彼等はそれから一・二ヶ月の速成訓練を受けた後、ライン河に沿ふて、謂はゆる『西部戦線』の最西端フランダー戦線へと出征したのであつた。そして其處で始めて砲火の洗禮を受けたのであつた。フランダー（英語読みではフランダース）といふのは、周知の如く今次戦争でも有名な激戦場となつた地でベルギーの西部海岸寄りの地方一帯の謂ひであるが、當時、謂はゆるシリーフエン策戦に依つてベルギーを迂廻してバリ攻略の戦法に出たドイツ軍は、忽ちの間にベルギーの東部及び中部を席捲して一方フランス領深くバリに迫りつゝ、他方はこのフランダーで有力な聯合軍の反撃に會し、戦局の凝滞を見てゐたのである。彼れはこの出征

及び初陣の思ひ出を次の如く記してゐる。

『斯くして遂に、我等がその義務を果たすべくミュンヘンを出發する日が來た。ドイツの河川中の河川たるライン河を古くからの敵の貪慾から護るべく、その靜かなる波に沿ふて我等が西へと向けて進んだ時、私は始めてライン河を見た。朝霧の柔かなヴェールを通して輝き出たばかりの太陽の柔かな光線が、ニーデワルド（地名）の記念碑を我等が上に幽かに投影した時、果しなき長き輸送列車の中から、古きラインの守りの歌が曉の空へと一齊に轟き上つた。私は感極まつて胸も張り裂けるばかりであつた。

それから濕つばい寒い夜となり、その中を我々は沈黙裡にフランダーへと入つて行つた。そして霧の中から夜が明け始めた頃、突如として彈丸の挨拶が唸りを立て、我等の頭上に訪れた。鋭い響音と共に小さな彈片が、濡れた大地を叩いて、我等の隊伍の間に飛び散つた。そして小さな硝煙の尙ほ消えやらぬ前に、二百人の戰友が、苦しい息の下から、最初の死の使者に對して最初の萬歳を叫んで斃れてゐた。それから實に、鳴り、響き、叫び、吼えるの戦ひが始まつた。いづれもが熱した眼を見張つて、前へ／＼と益々急速に進み、遂にいきなり蕪烟及び生籬を超えて、その彼方に鬭争が、白兵戦が開始された。その時、遠くから歌声が我等の耳に響いて來た。それが益々近づいて來て、中隊から中隊へと響き渡つた。そして、死が將に私達の隊を慌しく襲はんとした時、その歌の主（援軍）もまた私達の隊に到着したのであつた。斯くて私達は相共に一層聲を大にして再び、「ドイツ、ドイツ、比類なし、世界に比類なし」を歌つたのであつた。

四日の後に私達は歸つて來た。今やその歩み方まで變つてゐた。十七歳の少年達も今や大人と同じやうになつてゐた。

リスト聯隊の志願兵達は恐らく充分の戰國訓練を受けてゐなかつた。然し彼等は古兵と同じく死ぬことを知つてゐた。

これが私達の初陣であつた。(p. 180—181)

#### 四 死の體驗と國內の政治に對する不滿

この戰線に於いてヒトラーは、後に彼れの血となり肉となつた所の幾多の尊い經驗をしたのであつた。今日彼れが單に政治家としてのみならず、軍略家としても比類なきものを示してゐるのは、この前大戰に於ける經驗。兵士としての經驗に基づくものである。今次戰爭に於けるドイツの戰略戰術はその細末に至るまで、實に戰場に於ける將士の起居動作に至るまで、ヒトラーの方針及び命令に基づくものであることは、ナチス生え拔きの黨員にして今日『總元帥』に任じられてゐるゲーリングの親しく語つてゐる所であるが、若しこれが前大戰に於けると同様にユンケル出身の、従つて士官學校上の職業軍人將軍に依つて指導されてゐたならば、マヂノ線も決して崩壊してゐなかつたであらうし、バルカン戰も成功してゐなかつたであらう。今日ドイツが比類なき戰勝を示してゐるのは、勿論

根本的にはその獨特の國家社會主義即ち Nationalsozialismus に據るものであるが、直接的にはこのヒトラーの兵士としての經驗に因ること大なるものである。

蓋し、戰線に於ける兵士は日常に於ける國民大衆の延長に外ならない。日頃國民大衆の生活を知り、これに深き痛心を有する者にして始めて、戰線に於ける兵士の氣持ちも眞に知ることが出來、而して戰線に於ける兵士の氣持ちを身を持つて知れる者にして始めて、その眞に果敢有效に戦ひ得る戰略戰術も考へ得るのである。

然らば彼れは戰線に於いて如何なる經驗をしたか？ 彼れの戰場に於ける經驗及びその賜物は元より多く、後に見る『戰爭プロバガンダ』の如きもその代表的な一つたるものであるが、彼れは先づ戰場に於ける死の恐怖の偽らざる經驗に就いて次の如く記してゐる。彼れも亦これを免れなかつたのであつた。

『今や一年また一年と經つて行つた。戰爭に對する夢の如き空想は消えて、代りに恐怖の念が起つて來た。熱狂は次第に冷却して、熱烈な歡呼の聲も死の恐怖の爲に出なくなつた。誰も彼もが、自己保存の本能と義務の催促との間に板挟みになつて、苦しまねばならぬ時が來たのであつた。私もまたこの兩者の相違から免れなかつた。死の危機に立たせられた時、常に、一の何か知らハッキリしないものがこれに對して反駁

し來たり、それが更に理性となつて身を庇はうとした。それは實に臆病心に外ならなかつたものであつて、臆病心が斯かる變裝の下に各人を迷はさうとしたのであつた。斯かる場合には非常な躊躇と警戒とが起つた。そして往々にして、ただ良心の最後の一片のみが漸やくこれを制止し得たのであつた。慎重を促す斯うした聲が呼び掛けられれば掛けるほど、而してその聲が高らかに且つ強烈に誘惑すればするほど、これに對する反抗もまた激しくなり、長い間に互る内心の葛藤の後、義務の意識が最後に漸やく勝利を占めたのであつた。私に於いてはこの闘ひは、既に一九一五年から一六年至る冬の間に片付いてゐた。意志が遂にその完全な支配者となつたのであつた。出征當初の私は歡呼と哄笑とを以つて突進したものであつたが、今や私は靜かに且つ寡黙であつた。而もこの態度は恒久的なものであつた。今や運命は始めて私をして、神經を惱ますことも思慮を失ふこともなく、最後の試練にまで進む能はしめたのであつた。斯くて若き戰爭志願者は何時しか老兵となつてゐた。』(S. 181)

然しこれは全軍が經驗せる所であつた。全軍は斯くして始めて眞に精強なものとなつて行つたのであつた。

『然し斯かる變化は全軍に行はれたのであつた。全軍は絶えざる戦ひの中に老練となり頑強となつて行つた。この嵐に耐えなかつた者は、正にこの嵐に依つて打ち碎かれたのであつた。』

斯くて始めてその軍隊は評價さるべきであつた。斯くて二年三年と経て、その間、一つの戦闘を終へてまた他の戦闘へと入り、常に兵數と武器の優勢な敵軍を相手に戦ひ續け、飢ゑに苦しみ缺乏に堪えて來て、始めてその無双の軍隊の眞價が云々され得るものであつた。』(S. 182)

ヒトラーはこの戦線に一九一四年から一九一八年に至る足掛け五年間、即ち大體戦争の始めから終りまで暮し、その間二度重傷を負ふて國內へ送還され、その最後の時に病床に於いて『革命を聞いた』のであつたが、彼れはこの前大戰に於けるドイツ軍隊に就いて次の如く記してゐる。

『假令幾千年の歲月が經やうとも人々は、世界大戰に於けるドイツ軍隊を考ふことなくして、勇士を語り論することが出来ないであらう。而してこれを思ひ出す時には、過去のヴェールの中から、揺がず退かざる古びた鐵兜の鋼鐵の戦線が見えて來るであらう。これこそは實に不滅の警告記念標たるものである。ドイツ人の存する限り、彼等は、これが曾つてドイツ國民の子供達であつたことを反省するであらう。』(S. 182)

斯うした戦線に於いてヒトラーの國內に就いて感じたことは先づ、當然、『政治』に對する不満であつた。當時ドイツの政治は、既にこれまで紹介して來た所にも窺はれる如く、ウイルヘルム二世を

中心とする貴族・軍閥・官僚の一黨（思想的には單なる王朝的國家主義）と、種々の系派から成る議會勢力（思想的には大體自由主義）とから成つて居り、後者は戰爭勃發と共にその左右を問はず舉げて一先づ全く前者に呼應し、謂はゆる學國一致内閣及び政治を見てゐたのであるが、ヒトラーに據れば、既に我々の見て來た如く、彼等は久しきに亙つて國策を誤り乃至誤らせて來たものであり、その最惡の時に於いて國家國民を戰爭に立たしめたものであつて、本來ならばそのいづれも到底その時局を擔當する資格を有する代物共ではなかつたのである。然るに彼等は、實に日頃民族主義國家主義に反對し『インターナショナル』を叫んで來たマルクス主義社會民主黨の代議士共に至るまで、天つ晴れ時局の指導者として種々と國民に説教し、ひたすら國民及び兵士を鼓舞激勵してゐたのである。これは當時のドイツとしては致し方ないことであつたかも知れない。然しそれは、一命を賭して戦線に戦つてゐる心ある兵士にとつては、或は少くともヒトラーにとつては、憤慨に値ひする所であつた。彼れはこれに就いて先づ次の如く記してゐる。

『私は當時兵士であつて、敢へて政治を論じやうと思はなかつた、また實際にさうした暇もなかつた。私は今日でも尙ほ、最下級の荷馬車引きでさへも、最上級の人々例へば「議員人」よりも、常に祖國に對してヨリ多く價值ある貢獻を爲してゐると確く信じてゐるものである。然し私は、その言ふべきことを持つて凡て



の正直なる人々が、これをば戦場に出て敵の面前に叫ぶか、然らずんばその口をば家の中に適當に棄て去つて、到る處黙々としてその義務を果たした時代に於けるほど、政治家といふ饒舌家を憎んだことはなかつた。然り、私は當時これらの凡ての「政治家」<sup>ポリタイカー</sup>を憎んだ。當時若し私の自由に出来たならば、私は直ちにこれらの議會的饒舌指導者共を集めて、穴掘り大隊を組織したであらう。さうすれば彼等は、正直にして眞面目なる人々を苦しめることも憤激させることもなしに、彼等だけでその心行くまで且つ必要なだけ喋々することが出来たであらう。』(p. 123)

國民はその言ふべきことも言はずに、喰ふや喰はずで黙々として義務を果たしてゐる時に、己は不明にして常にフラ／＼し次から次へと過誤を犯し乍ら、而も口を開けば國民に説教のみをし、義務のみを要求する爲政者階級を持てるほど、國家國民にとつて禍ひなるはない。前大戰に於けるドイツは、ヒトラーに據れば、正にそれだつたのである。

【註】 前掲引用文の中にヒトラーが『最上級の人々例へば議會人』云々と言つてゐるのは『議會人』が餘り重きを置かれぬ我國の政治殊にその最近に於いては、或は一見奇異に思はれるかも知れない。が、ヒトラーが『マイン・カンフ』を綴つた戦後のドイツ(一九一九—一九三二年)に於いては、ウイルヘルム二世を中心とせるユンケル支配は既に倒れて存在せず、議會乃至議會人が最高の政治權威であつたので、『議會人』を以つてその代表者としてゐるのであつて、戦争當時に就いて言へば宰相ベートマン・ホルヴェーク以下の全爲政者階級を意味するものである。

## 五 自由主義・マルクス主義に對する誤れる處置

斯様にヒトラーは戰線に於いて、國內の政治家乃至爲政者に對して益々大なる不滿乃至憎惡を感じしめられたのであつたが、其處には殊に彼れをして憤慨せしめた所の二つの事柄があつた。

その一つは、戰勝に對する自由主義諸新聞及び當局の態度であり、他の一つは、マルクス主義に對する政府の態度乃至處置であつた。前者はこの場合大した問題ではなく、ヒトラーもこれに就いては簡單に止めてゐるが、後者は實に測り知るべからざる重大性を有するものである。何故ならば、ドイツは一つは明らかにこれが爲に前大戰に敗れたからである。

先づ第一の問題であるが、前大戰に際してはドイツに於いても、日頃國際主義平和主義的傾向を露骨にしてゐた自由主義諸新聞も勿論、一轉して、戰爭の贊成者となり鼓舞者となつて現れたのであつた。が、彼等は元來が元來であるので、その戰爭鼓舞も徒らに表面だけ尤もらしくして眞實がこもつて居ないのである。茲に問題とされる事柄もその一つの現れであつて、彼等は戰勝に對して國民の自重を要望したのであつた。それも眞のナシヨナリズムの考へから出たものであるならば問題はないのであるが、彼等に於いてはその反對であつて、斯かる名目の下に實は國民の戰意を抑へやうとする

ものであつたのである。而も當局は無自覺にしてこれを見抜くことも識別することも知らず、却つてこれに賛成して追隨したのであつた。ヒトラーはこれを憤慨してゐるのである。當時宰相はベートマン・ホルヴェークであつて、右翼からは『自由主義的』と見られ、左翼からは反動的と見られ、何んでも阿諛し來るものを好んだと傳へられる有名な人物（勿論貴族）であるが、これからヒトラーの言つてゐることはこのホルヴェークの性格を彷彿たらしむるものである。

『斯様に私は、當時、政治に就いて敢へて何を知らうとも思はなかつた。然し私は、一たび國民に關する・殊に我々兵士に關する若干の事柄に就いては、無關心の態度を採ることは出来なかつた。

當時私を心から憤慨させ且つ私の有害と考へた所の事柄が二つ有つた。

勝利の報道が來初めて間もなく既に、若干の新聞は徐々に、恐らく多くの人々には始めは分らないやうに、一般の戰勝の感激に苦汁をさし始めたのであつた。而もそれは、一種の好意乃至善意の假面の下に、實に一種の親心の假面の下にさへ、行はれたのであつた。人々は、餘りに大袈裟な戰勝祝ひに對して危惧を示した。人々は次の如く憂慮したのであつた。左様な大袈裟な戰勝祝ひなるものは、大國民に相應しくなく、従つて大國民の爲すべきことではない。ドイツ兵士の勇敢と剛強とは今更言ふまでもなく始めから分り切つたことであつて、従つてこれに就いて餘りにも夢中になつて喜び騒ぐことは、外國に對する手前からも既に

宜しくない。外國に對しては、靜かな威嚴ある慶祝こそ、無茶苦茶な祝勝騒ぎよりも適切なものである。最後に、我がドイツは、戦争は我等の望む所ではないことを現在と雖も忘れてはならない。従つてまた我々彼等の言ふことは大體右のやうなものであつた。

然るに人々は、こんな野郎共をばその長い耳を掴まへて長い棒に縛り付け、以つて斯かる文筆騎士共の美的感情なるものをして二度と祝勝の國民を侮辱する能はないやうにはせずして、反對に實際に謂はゆる「不相應」な祝勝に對して警告を行ひ始めたのであつた。

人々は、感激といふものは一度び打ち碎かれ、ば、最早必要に應じて再びこれと呼び起すことが出来ないといふことを少しも知らなかつた。感激は一つの興奮であり、その興奮状態に於いてこれを持続して行くことが出来るものである。人々は一體、斯かる感激の力なくして、如何にして、人間の考へ得る最大の國民の精神力を必要とする戦争に堪え得るであらうか。(S. 183—184)

然し戦場のヒトラーをしてヨリ憤慨せしめたものは、マルクス主義即ち社會民主黨一派に對する政府の態度であつた。

當時社會民主黨は、國民全體から見れば尙ほ三分の一を占むるにも及ばざる少數であつたが、然し

既に議會に於いて第一黨を成してゐた。従つて、舉國一致の建前よりすればこれを無視し得なかつたことは明らかである。殊にその背後には勞働大衆があつたのである。彼等は戦争の前夜までこれに反對し、戦争豫算の承認を拒否してゐた。が、戦争既に免れず、大勢またこれに賛成と見るや、彼等は慌てゝ例の『轉向』をなし、最早黨は問題に非ず、ドイツ國家國民が問題なりとして、殆んど舉黨これに賛成し、而も進んでその推進勢力たらんことを期したのであつた。この點は今次支那事變に於ける我國の『唯一の無産黨』こと社會大衆黨一派と全く同じものであつて、ただドイツに於いては社會民主黨がヨリ遙かに有力であつただけであるが、この轉向は全く周圍の形勢上已むなく行はれたものであつて、明らかに一種の擬裝轉向たるものであつた。イデオロギーといふものは、斷じて左様に簡單に轉向され得るものではないのである。假りにその時は本心であつたとしても、その後の結果から見れば全く詐欺としか言ひ得ないものであつた。

然るにウイルヘルム二世支配下の當時のドイツ政府は、この社會民主黨の態度を見て、社會民主主義即ちマルクス主義は戦争の勃發と共に最早死滅せるかの如く、これを喜び迎へたのであつた。後に同黨のシャイデマンその他が入閣したのもその表はれたるものである。斯くて社會民主黨は政府の有力な協力者となり、天つ晴れ戦争の鼓舞者となつたのであつた。

これは、ヒトラーに據れば、當時のドイツ爲政者階級には全くマルクス主義乃至思想といふものを

知る者が無かつたことに基づくものであつた。當時はドイツに於いても、マルクス主義や思想問題の研究は官吏たるには無用のものとされてゐた。斯かる問題はドイツに於いても矢張り、高等文官試験には出なかつたらしい。マルクス主義を眞に研究したこともなく、思想とは如何なるものかも知れぬ連中が、思想取締りだの思想對策だのと言つてゐたのであるから、牛を馬と見間違ひ、舟を山に上らしたのもまた、無理ならぬことであつた。宰相ベートマンの本性に從つて、何んでも迎合し來たる者を良しと考へたのであらう。ヒトラーはこれに就いて次の如く言つてゐる。

『第二に私を憤慨させたことは、人々（主として政府當局者）がマルクス主義に對して妥當なりとして採つた所の方法であつた。これは私から見れば、人々がこのマルクス主義といふベストに就いても、少しも知らないことを證明するものに外ならなかつた。人々は、政黨政派の考への如きは最早一切これを持じたかの如くに思はれた。』

この場合、一般に黨なるものが問題ではなくして、全人類を破滅に導かねば已まぬ所のマルクス主義といふ一の教説が問題であるといふことは、さうしたことがユダヤ化された大學では聞けないことであり、平素多くの人々殊に高級官僚達には、既成の馬鹿げた自負觀念よりして、斯かる書物を手にして、高等學校の教

村にも屬しないやうなことを勉強することは、全く努力に値ひしないことに考へられてゐただけに、それだけ理解されることが少なかつたのである。斯かる「頭腦共」には、最も大なる變革も完全に苦もなく看過されて了ふ。従つてまた諸々の國家施設も、多くの場合、私的施設に劣ることになるのである。彼等には、農夫は彼れの食はない物をば知らないといふ俚諺がよく當嵌まる。少數の例外はこの場合に於いてもただ原則を確證するだけである。

一九一四年八月の時に際して、ドイツ労働者をマルクス主義と同一視したことは愚劣も甚しいものであつた。ドイツ労働者は、あの時には、この有毒の疫病の抱擁から放たれてゐた。蓋し、さうでなかつたならば、ドイツ労働者は戦争に出るといふことも決して有り得なかつたであらう。然るに人々は愚かにも、このドイツ労働者の態度を見て、マルクス主義が今や「國民的」<sup>ナショナル</sup>になつたものと恐らく考へたのであつた。其處に示されたものはただ、この長い歲月の間にこの官僚國家指導者達の一人として、マルクス主義敎説の本質を研究することを以つて、努力に値ひするものと考へた者の無かつたことを證明するものであつた。さもなくば、あれほどの馬鹿げたことは容易に行はれやう筈はなかつたのだ。

非ユダヤ的國家の破壊を究極目的とするマルクス主義は一九一四年七月に、彼等のこれまで籠絡し來たれるドイツ労働者階級が目覺めて、刻一刻と益々祖國への奉公に赴き始めたのを見て、驚かざるを得なかつた。僅か數日の中に、その恥づべき國民瞞着の雲霧は吹き飛ばされて了つて、突如として、ユダヤ人指導者のみが其處に淋しく殘されてゐた。六十年の間大衆に注ぎ込んで來た謬想及び狂想は、最早跡方もなく消え

失せたかの如くに思はれた。それは、ドイツ労働者階級の欺瞞者たる彼等には全く當惑の瞬間であつた。そこで彼等指導者達は、自分達に危険の近づくと見るや、大急ぎで虚言の隠れ簀を眼深に被つて、厚顔にも、政府と共に國民の鼓舞と出たのである。』(S. 181—182)

斯くして舊ドイツは前大戰に際してマルクス主義にマンマとやられたのであるが、然らばこの場合如何にすべきであつたか？ これは重大問題でなければならぬ。その場合には、マルクス主義の溫床たり『朋友』たる自由主義も當然問題となつて來るのである。ところで、ヒトラーに據れば、この場合斷乎として武力を以つて、戦争開始前に或は戦争開始と共に、これらの分子を掃蕩すべきであつた。彼れはこれに就いて實に次の如く言つて居る。

『實に今や、國民を毒するこのユダヤ人共の全詐欺師團體をば掃蕩すべき時が來てゐたのだ。今や、起ること有るべき絶叫や悲鳴に少しも介意することなく、彼等をば迅速に片付けなければならなかつた。一九一四年八月には、國際的連帶の妄想は一舉にしてドイツ労働者の腦裡から消え失せ、これに代つてその數週後にはアメリカ製の榴散彈が進行中の我等の軍隊の兜の上に親睦の祝福を注ぎ始めてゐたのだ。ドイツ労働者が再び國民主義の道を見出した今や、この國民主義の攪亂者共をば容赦なく剿滅することは眞に國家國民を憂慮する國家政府の義務たるべきであつたのだ。』



戰線に最良の國民分子の斃れて行つてゐる時、國內では少くとも彼等毒蟲共が殲滅されて然るべきであつたのだ。

然るにドイツ皇帝陛下に於いては、彼等を掃蕩する代りに、自ら親しくこの宿年の犯罪者共に手を差し延べ、以つてこの狡猾なる國民暗殺者共にその内部活動の保護と可能性とを與へたのである。

斯様にして今や蛇は再びその活動を續けることが出来たのであつた。彼等の行動は以前よりも用心深くなり、それだけ實にヨリ危険となつた。臺閣のおエラ方が夢を見てゐる間に、この偽誓せる犯罪者共は革命を組織したのである。

人々が當時斯かる恐るべき中途半端な手段を採ることに決定したことは、私をして憤懣に堪えざらしめた。然し、斯かる生半可な手段を採つたことが後にあれほどまでに恐るべき結果にならうことは當時私も尙ほ考へ能はなかつた。

實に人々は當時如何にしなければならなかつたか？ その全運動の指導者をばこれを直ちに捕縛して裁判に附し、以つてこの國民の邪魔物をば一掃しなければならなかつた。人々はこのベストを掃蕩する爲には、徹底的に容赦なく全武力手段を動員すべきであつた。諸々の黨をばこれを解散し、國會は若し必要あらば銃劍を突き付けてもこれを正氣に立ち戻らしめ、また最善の處置としては直ちにこれを廢止すべきであつた。今日ドイツ共和國政府が政黨を解散することが出来るやうに、大戰當時に於いては尙ほ一層多くの理由を以つて斯かる手段が採られ得たのであつた。實に全國民の興亡がその如何に懸つてゐたのだ。』(S. 185—186)

## 六 權力に依つて思想を倒し得るか

ヒトラーに據れば、前掲に見るが如く、前大戰に際してドイツは、戰爭の勃發と共に直ちに『武力手段』を以つて、或は『起ることあるべき絶叫や悲鳴にも少しも介意することなく』、國內マルクス主義者を——次いでは自由主義者を——掃蕩すべきであつた。然るに當時ドイツは敢へてこれを爲さなかつたのみか、遂に彼等が既に『轉向』せるの故を以つてこれと提携して戰爭に臨んだのであるが、然らば若しこの場合實際に斯かる處置を斷行してゐたならば、果して前大戰にドイツは敗戦を免れたであらうか？

敗戦か勝戦かは單にマルクス主義者の反戰革命にのみ因るものではないが故に暫らくこれを別問題とするも、斯くすることに依つて果してマルクス主義を倒し得たであらうか？ 勿論その場合マルクス主義者を肉體的に『片付ける』ことは可能であつたであらう。が、マルクス主義は善かれ惡しかれの巨大な精神的思想的存在であり、謂はゆるヴェルトアンシャウング（世界觀乃至人生觀）である。斯かる存在を單に權力乃至暴力に依つて果して倒し得るものであらうか？ 多くの歴史的事實が示してゐるが如く、却つてこれをして盛んならしめはしないか？

これが茲で當然問題とならねばならぬ。苟くも思想家たり政治家たる者は茲まで問題を掘り下げて

考へなければならぬ。而してヒトラーは進んで正に徹底的にこれを考究してゐる。

彼れに據れば、善かれ悪しかれマルクス主義の如き一定の思想的根據を持つた運動なるものは、同じ様に一定の而もヨリ正しき思想的根據を持つた運動乃至權力に依つてのみ倒され得る。然らざる單なる權力に依つては決して倒され得ない。例へばマルクス主義は、謂はゆるプロレタリア階級の立場から資本主義の改廢を主眼とするものであり、而して資本主義なるものは確かにプロレタリア大衆乃至國民大衆の生存を阻害するものであるとすれば、同じ様に資本主義の改廢を期し、而もヨリ廣汎妥當なる立場——例へば階級的立場からではなく國民的民衆的立場——からこれを期する運動及びその權力に依つてのみ打倒され得る。然らずして資本主義を飽くまで維持し擁護せんとする謂はゆる現状維持の立場に立つ運動乃至權力に依つては、例へ如何に『神』を擔ぎ『天』を擔いでしやうとも、これを打倒し得ない。何故ならば、マルクス主義の如き存在の打倒には、何等かの宗教を打倒せんとすると同じく、上からの權力を以つてする場合に於いても、下からの運動を以つてする場合に於いても、積極的攻勢的な不撓不屈といふことが最大の要件たるものであるが、斯かる不撓不屈なるものはただ自己を正しとする信念からのみ生じ得る。然るに、資本主義が現實に國民大衆の生存を阻害してゐるものである場合に於いては、これを正當とする考へよりも、これを不當とする考への方がヨリ合理的であり得、ヨリ信念的であり得るからである。『神』や『天』との關係に於いて考へても、斯か

る不當な存在をば『神』も『天』も認め給ふ所に非ずとする考へが必然的に成立し、而もその方がヨリ合理的でありヨリ信念的であり得るのである。

而も尙ほこれを飽くまで單に權力を以つて彈壓し撲滅せんとする場合に於いては、ヒトラーに據れば實に、却つて逆效果を生じ、ヨリ重大な結果を招來するものである。第一に、斯かる場合には、正しき思考能力を持ち且つ正義感の強い『國民中の最良分子』をして却つて益々該運動に走らしめ、その勢力を擴大せしめる。従つてまたこれを掃蕩するには益々大なる力を以つてしなければならなくなる。第二に、その結果は、内部的に精力の非常な損耗を來たすのみならず、『國民中の最良分子』、『その眞の優秀なる分子』を殺すなり投獄なりして國家から失はねばならぬことになり、結局國家自體の衰頹化を來たす。残る者は精神的能力的に劣悪分子のみとなり、若き世代をして相率ゐて無志操無氣力ならしめ、國際生存競争に堪えざるものとなり、結局我れと自らを亡すの結果となる。

次に引用するヒトラーの論述は以上の意味のことを説いたものであるが、これは我々にとつても實に無限の示唆を含むものでなければならぬ。

『尤もその場合次のことが問題であつた。そも／＼精神的理念なるものは果して劍に依つて討滅され得るであらうか？ 純然たる權力の適用に依つて果して「世界觀」を克服し得るものであらうか？』

私はこの問題をば既に當時再三考へて見たのであつた。

殊に宗教に就いて歴史上見出される類似の場合を徹底的に考へることに依り、私は次の根本認識を獲た。諸々の觀念や理念なるもの、並びに一定の精神的根據を持つた運動なるものは、假令それが間違つたものであらうと或は眞實なものであらうと、ただ次の場合に於いてのみ、その生成の一定の時點に於いて權力手段の技術的方法に依つて打破し得る。即ち、その彈壓者自體が、同時にそれ自身一の新たな燃ゆるが如き思想、一の理念乃至世界觀の擔當者たる時に於いてである。

その前提に精神的根本觀念の衝動力を持つことなくして單に權力を用ひることに依つては、斷じて一の理念及びその傳播を絶滅し得ない。尤も、その理念の最後の抱懷者までも餘す所なく掃滅し、その最後の傳達者までも絶滅するならば、また別である。が、斯かることは多くの場合、その國家自體が政治的に有力な國家群から、屢々久しきに亘り或は往々にして永久に、脱落することを意味する。何故ならば、斯かる流血の犠牲となるものはその場合實に、從來の經驗に依れば、一國民中の最良分子であるからである。といふのは、精神的前提なくして行はれる所の迫害なるものは常に、道德的に正當ならざるものとして現はれ、従つてまた國民中の眞に優秀な分子をして却つて反抗に振ひ立たせ、而もその反抗をして不當に迫害せられたる運動たるの精神内容を獲得して更に自らを強化せしむるの結果に至るからである。斯うしたことは、多くの場合、暴力に依る一の理念彈壓の企圖に對する反對の感情よりして、簡單に行はれるのである。

而も斯くしてその内部的信奉者の數は、迫害が増大すればするほどそれに正比例して益々増大する。従つ

てその新たな教説の徹底的驅逐は、ただ益々強化する一大掃蕩の方法に依つてのみ行はれ得るものとなり、これが爲には遂には當該國民乃至國家から眞に優秀な凡ての分子が失はれるに至る。即ち、謂はゆる「内部的」淨化はただ、一般的無力化の費用に於いてのみ行はれることになり、斯くすることに依つて結局自らが罰を受けることになり自業自得の結果に陥る。而も、その倒すべき教説が既に一定の狭い範圍を超えて發展してゐる場合に於いては、斯かる彈壓過程も最初から無駄である。

即ち、凡ゆる生物に於けると同様にこの場合に於いてもまた、最初の幼少時代が最も撲滅の可能性に置かれて居り、年を加ふるに従つてその抵抗力を増して来る。そして老衰に近づくに至つて始めて、別の形態に於いて且つ別の理由からではあるが、再び新たな若き者に屈服するやうになる。

然し實際に於いては、精神的根據を有することなしに單に權力に依つて一の教説及びその組織的發展を掃滅せよといふ企圖は、殆んど凡て失敗に終る。否往々にして、その所期せる所と正反對の結果に終る。それは次の理由からである。

赤裸な權力の武器を以つてする闘争方法に最も必要なる前提は不撓不屈といふことである。即ち、この方法をばその對象とする教説其他の抑壓に絶えず變りなく適用して行く所にのみ、その企圖の成功の可能性が存する。その場合少しでも躊躇逡巡せる權力でも生じやうものなら、忽ちにしてその抑壓さるべき教説は再び勃興するのみならず、そは迫害を増す毎に新たな價值をさへ獲て来る。それといふのは、斯かる壓迫の波の環まつた後には、苦難に耐えたことに對する感激がその舊來の教説に更に新たな信奉者を齎らすと共に

に、既存の信奉者は以前よりもヨリ大なる反抗心及びヨリ大なる憎惡を以つて彼等の教説を益々固く守り、更に前に離反せる裏切者までが危險の去つた後には再び元の見解に復歸せんとするからである。従つて、ただ永久に變らざる同じやうな權力の適用の中にのみ、斯かる方法の成功の第一前提が存する。然るに、斯かる不撓不屈なるものは常にただ一定の精神的確信の產物に外ならぬものである。確乎たる精神的根據から出ない權力なるものは凡て浮動にして且つ不安定である。それは確固性といふものを缺いて居り、この確固性なるものはただ熱狂的に世界觀にのみ存し得るのである。それは各人のその時のエネルギーと斷乎たる決意との發露たるものであり、従つてその人物とその個性及びその強さの相違に依つてそれぞれ異なるものである。

これに更に次の如き事情が加はつて來る。

一切の世界觀なるものは、それがヨリ多く宗教的性質のものであらうと或はヨリ多く政治的性質のものであらうと——因にこの場合兩者の限界を調することは多くの場合極めて困難である——反對の理念世界の消極的な打倒の爲に戰ふよりも、寧ろ自己の理念の積極的實現の爲に戰ふものである。従つて世界觀の戰ひといふものは防衛たるよりも寧ろ攻撃たるものである。攻撃の場合に於いてはその世界觀は、既にその目標の設定といふことに於いて有利する。何故ならばこの目標は結局自己の理念の勝利を形成するからである。然るに反對に敵の教説の打倒といふ消極的目標の場合に於いては、何時それが達成され確實にされたと見做さるべきか、これを判定することさへも困難であるのだ。既に斯うした理由よりして世界觀の攻撃は、その防衛よりもヨリ計畫的で有りヨリ強力に有り得る。従つて實にこの場合に於いても、一般に於けると同様に、

勝利は攻撃の側にあつて防衛の側には存しない。而して權力の手段に係る『の精神的勢力との戦ひは、その權力自身が一の新たななる精神的教説の擔當者、宣布者、傳道者として登場しない限り、防禦的なものたり得るに過ぎない。

斯くて總括して次の如く言ひ得る。

一、の世界觀を權力手段を以つて打倒せんとする一切の企圖なるものは、その戦ひが一の新たななる精神的確立の爲の攻撃といふ形態を採らざる限り、その結局に於いて失敗する。ただ二つの世界觀の相互の戦ひたる時に於いてのみ、暴力といふ武器は不撓不屈に且つ斷乎として假借なく適用され、その支持する側の勝利を招來することが出来る。』(C. 126—127)

斯くしてヒトラーに據れば、從來ドイツに於いてマルクス主義に對する彈壓の失敗した理由もまた、この彈壓者自體が新たな積極的な社會思想を持ち合せなかつたことに在つた。時代は正に革新を必要とし新たな社會組織を必要としてゐたのに、單に現狀維持的見地から現狀維持的勢力に依つてマルクス主義を制壓しやうとした爲に結局失敗したのであつた。その好個の例はビスマルクの社會主義鎮壓法であつた。ビスマルクは周知の如く屢々一の『國家社會主義』の企圖者として傳へられてゐるのであるが、彼れ自身は『國家社會主義』を公唱したこともなく、またそれほどの積極的



も持たなかつた許りでなく、彼れはその企圖をばブルジョア・デモクラシーの勢力及び官僚に依つて行はんとした爲に、その折角の善意の理想も甚しく歪められたものとなつて、無殘な結果に終つたのである。ヒトラーはこれに就いて次の如く言つてゐる。

『斯うした點に於いて從來マルクス主義の打倒は常に失敗したのであつた。それはまた、何故にビスマルクの社會主義取締法もその凡ゆる努力にも拘はず遂に用をなさなかつたか、また現在でもそれは用をなさないかの理由である。この立法は、その高揚の爲に戦ひが戦はるべき一の新たなる世界觀といふ足場を缺いてゐた。謂はゆる「國家權威」だの「安寧秩序」だのといふタラ言が、一の生死の鬭争の適切な精神的推進基礎たり得ると考へるのは、ただ政府の高級官僚共の例に依つて例の如き知識のみが能くこれを爲し得る所である。』

この鬭争の眞の精神的擔當者が無かつたが爲にビスマルクは、彼れの社會主義取締法の施行をも、それ自體マルクス主義的の考へ方の產物であつた所の制度の判斷と意向とに委ねなければならなかつたのである。この鐵血宰相は、彼れのマルクス主義に對する戦ひの運命をばブルジョア・デモクラシーの好意に委託せることに依り、猫に鷹節の番をさせたのであつた。

實に斯うした凡ては、マルクス主義に對抗すべき、強烈な征服意志を有する所の一の根本的な新たなる世界觀を缺いてゐたことに基づく必然的結果に外ならぬものであつた。

その爲にビスマルクの戦ひも徒らに甚しき失望に終つたのである。』(Cf. 189—190)

## 七 不可避なりしマルクス主義の勝利

然らば、前大戦に於けるドイツの場合はどうであつたか？ 當時のドイツの支配權力は、前にも言及せるが如く、ウイルヘルム二世を中心とするエンケル一黨の單なる帝國主義的勢力と、議會に依つて代表される主としてブルジョア階級を代表する自由主義勢力とから成つてゐた。斯かる支配權力を以つて、ヒトラーの言ふが如く戦争勃發と共に一種のクーデターを以つてマルクス主義に臨んだとして、果して能くこれを倒し得たであらうか？ 一時は制壓し得たとしても、その敗戦の徴候の漸く明らかとなり、國內窮乏の極度化せる後に至るまで、果して能くマルクス主義の擡頭を制止し得たであらうか？

當時のプロシヤ・エンケルの政治思想殊にウイルヘルム二世のそれは、十八世紀の謂はゆる啓蒙專制主義思想家ライブニッツやウォルフを通じて、古支那の『天の政治』思想、儒教政治思想の影響を多分に受けてゐるものと謂はれ、天より選ばれたる君主及び民族の觀念即ち一種の選民思想の下に、明らかに武力を背景とせる『世界の平和的統一』を目指せるものであつて、單なる帝國主義と呼ぶよりも、寧ろ古支那に於けるこの政治思想本來の表現に従つて或は『皇道』主義とでも呼ぶ方がこの場

合ヨリ適切なものであるが、それは低きより高きに向つて進む歴史の一の發展段階としての近世社會組織といふものに就いて何等の正確な認識もなく、従つてまた必然的に資本主義的現狀維持的な點に於いて、謂はゆる自由主義と一致するものであつた。私は今茲にこの兩思想を立ち入つて究明するの自由を持たないが、斯かる皇道主義政治思想や自由主義思想を以つて、果してマルクス主義を終局的に打破し得たであらうか？ また打破し得るものであらうか？ 若しこの兩思想共にマルクス主義を終局的に止揚し得るに足らないものとすれば、かの場合ドイツにこれに代つてマルクス主義を克服すべき如何なる思想及び運動があつたか？

これに對するヒトラーの見解は、遺憾乍ら、甚しく否定的なものである。勿論彼れに據れば、恐らく事の成否の如何に拘はらず、かの場合斷乎としてマルクス主義者に對して飽くまで非常手段を採るべきであつたであらう。國家國民を誤り裏切るやうな存在は、假令國家國民が如何になる場合と雖も捨て置かるべきものではない。が、その結果に就いては彼れは、結局悲觀的見解に終つてゐる。假りにマルクス主義をば掃蕩し得たとしても、當時ドイツにはマルクス主義に代つて國家國民を指導すべき何物も無かつたのである。前掲のビスマルクの問題に言及した後、彼れは深刻な反省を以つて次の如く記してゐる。

『』ところで然らば世界大戦の時乃至その當初に當つて、事情は少しでも異つてゐたか？ 遺憾乍ら、否である。

私は當時マルクス主義の現前の權化としての社會民主主義に對する國家政府の態度の變更の必要を考へれば考へるほど、この教説に取つて代るべき必要な代用物の無いことを痛感したのであつた。假りに社會民主主義が倒されたとしても、人々はこれに代ふるに一體何を大衆に與へ得たであらうか？ その場合多かれ少なかれ指導者をつた勞働者の大群をその本來の道に導き得ると期待出来るやうな運動は、一つとして存在し忽ちにして一轉して、一のブルジョア黨即ち一の別の階級團體に入るものと考へるのはナンセンスのことであり馬鹿の甚しいものであつた。蓋し、斯く言へば色々の團體に喜ばれないであらうが、ブルジョア政治家共の大部分といふものは階級區別をば、彼等の政治家的立場に不利を來たさない限り、全く當然のことと思つてゐることは否定さるべくもないのである。

この事實を否認する者は、ただ虚言者の厚顔と無知とを證明するものである。

人々は、一般大衆をその實際以上に愚かなものと考へることを戒意すべきである。政治上の事柄に於いては、知性よりも感情の方がヨリ正しい決定をなすことが稀れでないものである。この大衆の感情の正しからぬことはその愚かな國際主義的態度がこれを充分語つてゐるとなす意見は、次の事實の簡單な指摘に依つて徹底的の反駁され得る。即ち、平和主義的デモクラシーもそれに劣らず狂氣の沙汰たるものであるが、而もそ

の信奉者は殆んど全くブルジョア階級より出てゐるといふことである。今日尙ほ何百萬人もブルジョア諸君が毎朝ユダヤ系新聞を待ち焦れて熱心に讀んでゐる限り、支配階級の諸君には「同胞」の愚かを云々する資格などは全くない。彼等も結局同じ不潔物を吞み込んでゐるに過ぎないのである。その兩者の場合共にその製造人は同じくユダヤ人であるのだ……。

然しこのことは暫らく全く別問題としても、我國の謂はゆる知識階級が次のことを理念しないといふことは、彼等自らの思考能力の貧弱さを示すものである。即ち、正に一のベストに外ならぬマルクス主義の如き存在の擡頭を阻止することの出来なかつた事情こそは、今やまた、その失へる者を再び最早取戻す能はざらしめてゐるのだといふことである。

「ブルジョア」諸黨——彼等は自らさう稱してゐるのであるが——は、最早決して「プロレタリア」大衆を彼等の陣營に繋ぎ得ないであらう。何故ならば、其處ではこの二つの世界は、半ば自然的に、半ば人爲的に、互ひに隔離されて對立して居り、その間の相互の關係としてはただ鬭争あり得るのみであるからである。そして其處では若い方が勝利するであらう。而してそれはマルクス主義である。

一九一四年には社會民主主義に對する鬭争は實際に確かに考へ得られた。が、これに代るべき何等の實際的代用物も無かつたことを思ふ時、この状態を何時まで維持し得たかは疑問であつた。』(S. 190—191)

然り、それは正に不可能であつたと言ふべきであらう。蓋し、その場合マルクス主義を眞に打倒し

得んが爲には、ヒトラーの謂はゆるマルクス主義を擡頭せしめてゐる所の事情、即ち不公正なる資本主義社會組織を同時に除去して掛らねばならない。然るにさうしたことは、單なる王朝的國家主義派（貴族・軍閥・官僚）と資本主義自由主義派（ブルジョア階級）とから成る當時のドイツ支配階級及びその權力には、到底望まざるべくもないことであつたのだ。彼等は勿論マルクス主義には反對であるが、マルクス主義を擡頭せしめてゐる所の事情には賛成であり、元來その維持擁護の元兇であつたのだ。彼等はマルクス主義に反對しつゝ、而もマルクス主義に對して絶えずその培養基を提供して來たものであり、謂はばマルクス主義と同じ地盤の上に立てるものであつて、彼等の支配する限り、ヒトラーの謂はゆる國家自らの衰亡の犠牲以外に於いてはマルクス主義は打倒さるべくもなかつたのだ。従つて、その場合マルクス主義を眞に打倒せんとすれば、同時に或ひは先づ第一に、斯かる爲政者階級を倒して掛らねばならなかつた。然るにさうしたことは戦争中に出来ることではなかつた許りでなく、命を起した時に於いても、直ちにこれにとつて代り得るものは無かつたのである。謂はゆる右翼運動乃至右翼政黨は當時に於いても多々有つたのであるが、いづれもブルジョア反動的なものであつて、到底マルクス主義に對抗し得るものではなかつたのである。

斯くてヒトラーも結局この問題をば思ひ諦め、新たな運動を考へざるを得なかつた。後に彼れ

が、戦争から歸つて、自ら運動「國民社會主義運動」を起すに至つた一つの動機は、この戦場に於ける考察に始まつてゐる。彼れはこの問題の最後に次の如く語つてゐる。

「この點に大なる缺陷があつた。

私は夙に大戰前から斯うした意見を有してゐた。それ故にまた既成黨派のいづれに加入する決心に至り得なかつた。が、私は、世界大戰に於ける諸事件の推移の中に、「議會」黨以上のものでなければならぬ所の運動が存在しない爲に、社會民主主義（マルクス主義）に對して假借なく戦ひを遂行することが明らかに不可能であつたのを見て、私の見解を益々強められたのであつた。

私はこれに就いて當時、私の少數の戦友に公然私の考へを披瀝してゐた。

その上に更に私には今や、後に何時かは政治に活動しやうといふ考へまでが始めて浮んで來たのであつた。

當時私の狭い範圍の友人達に對して、戦後には自分は自分の職業の傍ら演説家として活動して見たいものだと言言したのであつたが、それは實に斯うした動機からに外ならなかつた。

従つてまた私は當時これに就いて極めて眞剣に考へてゐたのであつた。『C. 191—193』

## 八 誤れるドイツの戦争宣傳——戦争目的の晦冥

ヒトラーが一兵士として戦場に在りて、當時のドイツ爲政者階級の所爲殊にそのマルクス主義に對する處置に對して、憤懣措く能はざるものがあつたこと、而も一兵士の身であればこれを如何とも爲す能はなかつたと共に、深く反省考察の結果、結局一の諦めに近い結論に到達しなければならなかつたことは、上述の如くである。それは如何に悲しきことであつたかは、ただ同じやうな考へを持つて來た如く、ヒトラーは夙にウイン時代に於いて *Nationalsozialismus* と成つて居り、マルクス主義に對しては元より反對たるのみならず、單なる『王朝的國家主義』及び『自由主義議會主義』に對しては反對であつたのである。而も彼れは今や戦争といふ祖國の危急存亡の時と言ひ乍ら、これらの勢力の苟合指導下に、而もその國家國民を破局に導くことの明らかなる誤れる指導下に一命を賭して黙々として戦はねばならなかつたのである。

このヒトラーが同じく戦場に於いて同じ様に長嘆措く能はざりしもの、而してその爲にまた深く彼の研究考察を促せるものに、戦争宣傳 (*Warpropaganda*) 即ち戦争に於ける宣傳の問題があつた。これは、見稍々もすれば大した問題に非ざるが如く思はれて實は然らず、前大戦にイギリスはこの宣



傳の爲に勝ち、ドイツはこの宣傳の爲に敗れたとまで言はれるほど重大なものである。ヒトラーはこれをば、緒論に於ける原本目次紹介の中に見るが如く、特に『戦争宣傳』と題する獨立せる一章を設けて論じてゐるが、原本十二頁にも充たざる比較的短い論述でもあり、同じく戦線に於ける經驗考察でもあるので、我々の研究に於いてはこれを本章に併せて研究紹介する。彼れは先づこの問題に就いて次の如く記してゐる。

『政治上の凡ゆる事象を注意深く研究せるに當つて、早くから絶えず私の大なる關心を促したものはプロバガンダ（宣傳）の活動であつた。私は其處に一の道具を見出したのであつたが、この道具は夙にマルクス社會主義の諸團體が、まことに堂に入つた巧妙さを以つて、これを驅使し適用することを心得てゐたものであつた……。

が、この宣傳プロバガンダなるものがその適切に適用された時は如何に恐ろしい結果を招來するものであるかは、人々は大戦に際して始めて知り得たのであつた。然しこの場合に於いてもまた遺憾乍ら、凡ては敵側から學ばねばならなかつた。何故ならば、この點に於ける我が方の活動たるや實に、消極的といふよりも寧ろ皆無に近いものであつたからである。然しまたこの我がドイツ側に於ける全啓蒙活動の完全な無能こそは——その無能の程は殊に我々兵士の眼には誰が見ても餘りにも明らかなものでなければならなかつたが——私をして

今やこのプロパガンダの問題を更に深く立ち入つて研究せしむるの動機となつたのであつた。』(7113)

斯くしてヒトラーは、戦場に於いて戦闘の間に、宣傳及びそれに依る啓蒙(Aufklärung)の問題を深く立ち入つて研究するに至つたのであつたが、此處でもまた彼れは自國爲政者階級の無自覺及び無能を痛見しなければならなかつた。當時ドイツ側に於いても勿論宣傳機關が存在し宣傳活動を行つたのであるが、それは敵側殊にイギリスに比して遙かに不十分なものであつた許りでなく、その根本に於いて誤れるものであり、却つて逆效果さへ來たしたのであつた。而もそれが戦争の最後まで改められなかつた。ヒトラーは前掲の如く述べた後に次の如く言つてゐる。

「この問題に就いて考へる時間は、我々には、往々にして有り餘るほどあつた。然し、その實際の教示といふものは我々は敵から與へられたのであつた。而もそれは殘念乍ら餘りにも優れたものであつた。

蓋しその場合我が方に於いては没却されてゐた所のものをば、敵は驚くべき巧妙さと眞に天才的な考慮とを以つて展開して來たのであつた。この敵の戦争宣傳には私もまた無限に教へられる所があつた。然るに我が方に於いては、これを最も早く採つて以つて自己の教訓とすべき筈の人々(當局者)に於いても、何等さうしたことなしに空しく時を過したのであつた。彼等はその場合、その或る者は斯うした他からの教訓

を受け容れるには餘りにも小柄巧であり、他の或る者はまた、これを受け容れるだけの眞面目な意志を缺いてゐたのであつた。

一體、我が方には果して宣傳なるものが一般に存在したであらうか？

遺憾乍らこれに對して私は唯だ否と答へ得るだけである。この方面に於いて我が方に實際に企てられた所の一切は、その最初から甚しく不充分であり誤つて居り、その爲に結局少しも役立たなかつた許りでなく、却つて屢々禍害さへも來たしたのであつた。

その形式に於いては不充分であり、その實質に於いては精神的に既に誤つてゐた。これがドイツの戰爭宣傳を注意深く吟味して獲られる結論でなければならなかつた。『S. 193—194』

然らば一體ドイツは戰爭宣傳として如何なることをしてゐたであらうか？ その詳しいことはヒトラーも述べて居らず、我々はただ彼れの批判論述の中にその大體を窺ひ得るだけであるが、彼れに據れば何よりも先づ第一に、前大戰に於けるドイツの戰爭宣傳なるものは、その目標の認識よりして既にハッキリしないものであつた。否、甚しく錯誤混迷せるものであつた。

そも、戰爭宣傳は何んの爲に行はれるものであるか？ 言ふまでもなく、それは戰爭の爲に行はれるものであり、その勝利を齎らさんが爲のものでなければならぬ。即ち、その場合に於いては、戰

争が目的であり、宣傳は手段である。従つてまた宣傳は、その目的に役立ち得るやうな形式及び内容に於いて行はなければならない。而して茲までは先づ何人も異存の無い所でなければならぬ。

が、然らば更に國家間の戦争は一體何んの爲に戦はれるものであり、また戦はるべきものであるか？ 戦争は戦争宣傳にとつては目的たり主人たり得るが、それ自身窮極の目的たり得ないことは明らかである。それは更に當事者の何等かの目的の爲のものでなければならぬ。その目的は何んであるか？ 國威發揚か、世界平和か、人道弘布か、或は更にその他のものか？ それともその凡てか？

これは戦争の運命に關する重大問題であると共に、戦争宣傳にとつて根本的的重大問題たるものである。何故ならば、それに依つて宣傳の内容が規定されると共に、その無効か有効かも決定されて來るのである。

ところでヒトラーに據れば、國家間の戦争なるものは、當該國民(Nation)の生存の確保、その自由・獨立・名譽の維持の爲に戦はれるものであり、戦はるべきものであつて、それ以外の何物たるものでもない。勿論、その場合、世界の正義とか人道とかいふやうなことも考慮されねばならない。然しそれは、その場合、第二義的な意義・補助的役割しか有しないものであつて、直接戦争の目的たり得るものではない。何故ならば、世界の正義とか人道とかいふことは、世界人類従つてまた民族が有つて始めてその間に成立する所の概念であつて、元來人類間の一の規制概念に過ぎないものであり、人類

の存在を離れて存在し得るものではない。換言すれば、それは人類の生存といふ目的に奉仕する所の手段たるものであつて、目的を離れて一切の手段はナンセンスであると同じく、人類の生存關係を離れて正義とか人道とかの主張は一切ナンセンスたるものである。それは空なるものであり虚偽なるものである。ところで戦争といふときは既に、問題の正義人道の基礎たる人類の生死、當該國民の興亡に關するものである。と共に、戦争の行はれる時は既に、從來の正義人道の概念を以つてしては規制し得ないものがあり、通用しないものがあるからであり、それ故に戦争が行はれるのである。その時に於いては單に正義とか人道とかを云々し、これを以つて戦争目的とするといふことは、ナンセンス以外の何物たるものでもない。既に戦ふ國民にあつては、その戦ふこと自體が既に最高の正義であり人道であるのである。何が正義であるか、何が人道であるか、單に斯かる概念を標榜するのみでは、少しく思考する者には何人にも——敵にも味方にも——理解されるものではない。これは單に『平和』とか『新秩序』とかいふ場合に於いても同じである。若し眞に斯かる概念をして生きたものたらしめ、従つて戦争に役立たしめんとすれば、先づハッキリと自らの國民の生存の確保といふことを以つて該戦争の目的となし、その上に立つて新たな共存共榮の關係に於いてこれらの概念も主張されなければならない。その時にこそ眞に自國民も奮起し、他國民もまたその了解せざるを得ないものを持つのである。その時にこそ神も天も嘉し給ふのである。何故ならば、神も天も人類の生存を望んで

居り、その生存の爲には死をも賭して戦ふ不屈にして剛強なる民族の生存を望んでゐると信ぜられるからである。

然るに、前大戦に於けるドイツの爲政者階級はどうしてもこのことを理解しなかつた。自國民の生存の確保といふことをば何か大國民の口にすべからざる卑しき罪惡でもあるかの如く考へ、單に頻りに世界平和とか人道とかいふことを強調してゐたのであつた。而もそれを以つて何か、自己の清淨森嚴を證明する『美しきもの』の如く考へ、獨り善がりに陷つてゐたのであつた。従つてまたその宣傳も種々の點に於いて矛盾したものであり、無效果なものであり、逆効果さへ見ざるを得なかつたのである。ヒトラーは次の如く言つてゐる。

『先づ最初にかかるべき問題に就いて既に、人々は充分明瞭にしてゐなかつたやうに見える。即ち、宣傳は手段であるか、目的であるか、といふことである。<sup>ミツデル ツグエツク</sup>』

宣傳は手段である。従つてそれは目的の觀點よりして判斷されなければならない。それ故にまた宣傳の形式は、それが奉仕する所の目標の達成を助けるに當然適合したものでなければならぬ……と。ところで、大戦を通じてその爲に戦はれた目標なるものは、凡そ人間にとつて考へられる最も崇高にして且つ最も巨大なものであつた。即ちそれは、我が國民の自由と獨立であり、その將來の扶養の確保であり、而して實に民族

ドイツ國民はその人間としての生存の爲にその戦ひに戦つたのだ。而してこの戦ひを助けることこそは戦争プロパガンダの目的たるものであり、これを助けて勝利を獲せしむることこそはその目標でならなければならなかつたのだ。

ところで、諸々の國民が、この地球上に於けるその生存の爲に戦ひ、その爲に生か死かの運命問題に會してゐる時に於いては、人道 (Humanität) とか審美 (Ästhetik) とかいふことの考慮は凡て一の空無の中へと消へ去つて了ふ。蓋し、これらの觀念なるものは凡て、それ自身この世のエーテルの中に動いてゐるものではなくして、人間の想像から生ずるものであり、人間に結び付いてゐるものであるからである。人間がこの世から去る時は、これらの概念もまた空無の中に消え去つて了ふ。何故ならば、自然は斯かる概念をば知らぬからである。のみならず、これらの概念なるものは實に、人間の間でも少數の國民、ヨリ適切に言へば種族 (ラツヒ) のみが所有してゐるに過ぎないものであり、而もそれは該種族そのものの感情から分派する程度に於いて所有されてゐるに過ぎないものである。従つて、これらの概念の創造者たり擔當者たる種族が失はれるや否や、

— 109 —

ある。これは實に常に見られる所の極めて明瞭な結果である。

それ故に、この人道問題に關してはモルトケも既に次の如く述べてゐる。即ち、戦争に於いては人道は常に急速に處置することに在り、従つて最も激しき戦争方法が最も人道的なものである、と。

然るに、人若し審美だの何んだのといふ空談を以つて斯かる問題に臨まんとするならば、それに對しては實に唯一言次の答へが有り得るのみである。一國民の生死問題たる生存闘争の重要性は、人間の美への義務の如きは一切吹き飛ばして了ふものである、と。人間生活の中に存在し得る最も不美なるものは、常に隷屬の羈絆たるものである。それともかのシュワーベンのデカタンの徒は、ドイツ國民の今日の運命の如きを以つて「審美的」と考へるであらうか！……。

ところで、この人道とか美とかいふ見地が戦争に對して一度び除去されるものとすれば、それはまたその宣傳の規準としても適用され得ない。

大戰に於いては宣傳は目的の爲の一の手段であつた。而してその目的は實にドイツ民族の生存の爲の戦ひといふことであつた。従つてまた宣傳は専らこの目的に妥當する諸原則から考察さるべきであつた。如何に殘酷な方法と雖も、それが勝利を迅速ならしむるものである時には、人道的なものであつた。また、その方法が該國民をして自由の尊嚴を確保せしむるものであるならば、それこそ唯に美なるものであつた。

これこそは、斯かる生死の戦ひに於いて、戦争宣傳の問題に對して採らるべき唯一の妥當な態度であつた。



若しこのことが謂はゆる權力當局者達に明らかになつてゐたならば、彼等はこの武器〔宣傳〕の形式及び適用に於いて、決してあのやうな醜態に陥るやうなことは有り得なかつたであらう……』(S. 194—196)

## 九 逆效果宣傳の模範——宣傳對象への認識不足

ドイツの戦争宣傳は既にその出發點に於いて、即ち戦争目的の把握及び闡明に於いて、不充分であり誤つてゐたことは以上の如くである。それもこれも、眞に思想を知り時代を知る者がその衝に居らず、徒らに恰好のみ尤もらしく祿ばかり喰ひ潰す木偶の坊共が揃つてゐたことに原因するものであるが、ヒトラーに據れば、第二に、其處には更に宣傳對象の把握の間違ひといふことがあつた。既に宣傳目的がハッキリせず、混迷してゐたのであるから、宣傳對象がハッキリせず、これを見誤つたのも當然であらう。ヒトラーはこれに就いて次の如く論じてゐる。

『宣傳に就いて直接決定的な重要性を持つ第二の問題は次の如くであつた。そも／＼宣傳は如何なる人間に向けて行はるべきか？ 學識あるインテリ層か、それとも教養の少い大衆か？』

宣傳は常に専ら大衆に向けて行はれなければならぬ！  
今日遺憾乍ら屢々インテリゲンツ〔知識人〕の名を以つて呼ばれてゐる所の人々に對しては、プロバガン

ダといふものは無くして、學問的教化といふものが有る。ところが宣傳はその内容上より見て決して學問でないことは、恰かも廣告ビラの表現そのものが美術でないと同じである……。

我等が今日プロパガンダといふ語を以つて呼んでゐる所のものに於いても、事情は正に同じものがある。

プロパガンダ

宣傳の使命は、各人を學問的に教化するといふやうなことに在るのではなくして、大衆に或る一定の事實や経緯やその他の必要事項を指示し、以つてそれらのものゝ重要性が大衆の視界に入り初めて来るやうにする所にある。

従つて宣傳のコツは専ら、これを巧みな方法に於いて行ひ、以つて或る事實の現實性や、或る過程の必然性や、何等かの必要事項の妥當性に就いて一般的確信を生ぜしむるに在る。だが然し、宣傳はそれだからと言つて必然性そのものを事とするものではなく、また事とするものではあり得ないのであるから、而してまた宣傳の使命は廣告ビラに於けると全く同様に大衆の注意を喚起する點に主として存するものであり、既に學問的に經驗が有つたり或ひは教養識見を更に獲んと努めてゐる人々を教化するに在るのではないのであるから、その活動もまた常に主として感情の方面に向けらるべきであつて、謂はゆる理性の方面に對しては極めて制約されたものでなければならない。

更に、宣傳は凡て民衆的でなければならず、その精神的標準は、該宣傳がその向はんと考へる所の集團の中でも、その最も無學なる人々の感受力に適合して定められなければならない。従つて、その捉ふべき人間大衆の量が大なれば大なるほど、宣傳の純精神的高度は低められなければならない。それ故にまた、一の

戰爭を遂行せんが爲の宣傳の場合の如く、全國民をその影響範圍に引入れることが肝腎とされる場合には、その精神的前提の高過ぎるのを避けるの用心は、如何に大きくあつてもその大き過ぎるといふことは有り得ない。

宣傳は斯くしてその學問的な荷厄介が少なければ少ないほど、而して専ら大衆の感情に配慮すれば配慮するほど、その効果は益々適確なものとなつて来る。而してこの大衆に對する効果こそは實に、或る宣傳がその宜しきを得てゐるか得てゐないかを示す最上の證明たるものであつて、決して少數の學者や若い審美家などの満足を得ることがその證明となるものではない。

宣傳の奥儀は實に、大衆の感情的觀念世界を理解して、その心理に適合せる形態で廣汎な大衆の注意並びにその心情まで捉へるの方法を發見するに在る。我等の幾層倍もの智者とされる人々がこのことを理解しなかつたといふことは、畢竟するに彼等の愚昧か自惚れを證明するものに外ならない。

廣汎な大衆層にその宣傳の收攬技術を集中するの必要が理解されるならば、其處から更に次の如き教訓が生れて来る。

即ち、宣傳に該博な知識的教訓などを加へやうとするのは全く誤つてゐるといふことである。

大衆の感受力といふものは甚しく制限されたものである。覺えるのは僅かであり乍ら、而もその割に忘れる方は大きい。斯かる事實よりしても、效果的ならんとする宣傳は凡て極く僅かの要點にのみ局限されねばならない。また、この要點を文章に表はすにも、僅少の言葉で以つて而も其處に言はんと欲してゐることが

最後の一人にまでも明確に推察し得られるやうに、寸鐵的にこれを表現するといふ風にしなければならぬ。この原則を忘れて多方面に亙らんとする時には、忽ちにして宣傳の效力は飛散して了ふであらう。何故ならば、大衆は其處に提供された材料をば消化することも保持することも出来ないからである。従つてその結果もまた大いに弱められ、結局無効となつて了ふのである。』(G. 106—108)

このヒトラーの宣傳對象に關する論述は、前節に紹介せる宣傳目的に關する論述及び後節に紹介せる宣傳態度に關する論述と共に、言はば彼れの宣傳概論を構成するものであつて、彼れ及びナチスの優れたる一つに數へられるものであり、私はこれをば人々の何かの『お役』に立つかも知れないと思つて比較的立ち入つて紹介する次第であるが、前掲にヒトラーの言つてゐることは要するに、宣傳はその對象を常に嚴に大衆に求めねばならぬといふこと、従つて大衆の本質及び心理といふものをヨク理解して適切周到に行はれねばならないといふにある。

然るに前大戰に於けるドイツの宣傳はこの點に於いてどうであつたか？ 何處に向けて誰れを啓蒙する積りであつたか知らないが、甚だ大衆の心理に添はない、後から後からとそのウソの皮の暴露するやうな宣傳許りをしてゐたのであつた。これが爲にその宣傳は、國內では尙ほ信じられてゐたのであつたが、戰線では終ひには『氣違ひ』だの『發作』だのと言つて相手にされなくなつたのであつた。

これに反して敵側の宣傳は巧妙なものであつた。ヒトラーは次の如く語つてゐる。

『従つて、その宣傳の向くべき範圍が必然的に大であれば大であるほど、その方略(「プラン」)の確立は、心理的に益々その宜しきを得なければならない。』

例へば、オーストリア及びドイツの漫畫宣傳が先づ第一に事とせるが如き所の・敵を徒らに滑稽化して見せるが如きことは、根本的に誤りであつた。何故根本的に誤つてゐたかといふに、敵兵と實際に遭遇した時に、兵士達は敵から全く違つた心證を與へられなければならず、而してそれはやがて恐ろしい禍ひを生ずる結果となつたからである。といふのは、ドイツの兵士達は今や敵の抵抗を直接經驗して見て、これまで味方の宣傳に依つて欺かれてゐたことが分り、其處には闘志の強化どころか、その維持さへも出来なくなり、却つて反對の效果を生じたのであつた。兵士達は士氣沮喪したのであつた。

これに反して、イギリス及びアメリカの戰爭宣傳は心理的に適切なるものであつた。彼等の宣傳は、ドイツ人を野蠻人乃至匈奴人の如きものとして自國民の前に提示し、以つてその各兵士達にも戰爭の恐ろしきことを豫め覺悟させ、後に彼等の豫想の裏切られることのないやうに警戒したのであつた。従つて、今や敵が彼等に對して如何に恐ろしい手段を用ひて來ようとも、それは唯だ、彼等の既に與へられてゐた宣傳の正しさを確證するものに過ぎなく思はれた。従つてまたそれは、彼等をして自國政府の主張の正しさに對する信心を益々強からしむると共に、他方に於いては、謂はゆる無道なる敵に對する憤怒と憎惡の念を愈々高まら

しめたのであつた。蓋し彼等は、今や敵に直面して敵の武器の怖ろしき作用を知つて、而も自分達の武器も或ひは否恐らくヨリ以上怖ろしき作用を敵に與へるであらうことには一瞬の反省を加へる暇もなく、益々豫め聞いてゐた野蠻なる敵の「匈奴的」殘虐性が其處に示されてゐるとのみ思ひ込んだのであつた。

斯くして殊にイギリスの兵士達は、その本國に於いて虚偽を教へられたなどといふことは少しも考へることが出来なかつた。然るに我がドイツの方に於いては、遺憾乍らその反對の場合が頗る多かつた。これが爲に遂には、味方から尙ほも發せられた宣傳の凡ては、一般に「氣違ひ」だとか「發作」だとか言つて忌避されるに至つたのであつた。それは明らかに、宣傳には最も天才的な精神的能力家を任じてこそ用を爲すものであることを理解せずして、第二流の人物を——或ひは「普通並」に賢い人間を——任命すれば宜いものと考へられてゐた結果に外ならなかつた。

ドイツの戦争宣傳は斯様に心理上の正しい反省を全く缺いてゐた爲に、その結果に於いて正に逆の效果を來たした宣傳の最上の教訓の實例を示したのであつた。(S. 128—129)

## 十 宣傳態度の不徹底——宣傳に既に敗る

第三に、其處には更に宣傳態度の問題があつた。ヒトラーに據れば、前述の如く、宣傳を進めるに當つては人間の心理作用を充分考慮して進むべきであり、徒らに敵を滑稽化したり弱いものと思はせ

たりするやうなことは嚴に避くべきであつて、寧ろ敵の強さを充分認識せしめ、而もこれをば如何にも暴逆のものとして知らしめなければならぬものであり、その時に於いて始めて人々は眞に勇を振つて眞剣に效果的に戦ひ得るものである。が、これに關聯して、その自己の立場を主張するに於いては『原則的に主觀的・一方的』でなければならず、徹底的に自方の正當性のみを強調しなければならぬ。その間少しでも、敵にも理窟があり正しいものがあるといふやうな態度を採つてはならない。それには、最初から實際に我れにとつてその生存の爲に已むに已まれぬ正當な戦ひたるものが肝腎たるものであるが、若し少しでも敵にも正しいものがあるといふやうな宣傳態度を採らんか、味方はそれだけ敵に對する憤激を失ひ、従つてまた鬭争心及び鬭争力を失つて了ふものである。

これはヒトラーの言を俟つまでもなく分りきつたことであり、分りきつたことのやうに思はれる。然るに實際には、ヒトラーに據れば、前大戰に當つてドイツの宣傳はこの點に於いて致命的な過誤を犯してゐた。『ドイツ許りが戦争勃發の罪を負はさるべきではない』といふやうなことを言ひ、暗に自己にも罪あることを世界の前に承認してゐたのであつた。それもこれも、戦争目的もハッキリせずしてウカ／＼と戦争に入つて行つた爲であり、徹底的に戦ひ通す覺悟なく、宜い加減の所で和平せんとする下心の爲であつたのだが、これが爲に自國民の戦意を毀損し喪失せしめたこと甚しいものであつた。ヒトラーは次の如く語つてゐる。

「然るに人々は、そも／＼一切の宣傳活動の第一前提たる次の事柄に對して、最も甚しくその理解を缺いてゐた。即ち、宣傳を事とする者は、その取扱ふべき一切の問題に對して、原則的に主觀的・一方的な態度 (die grundsätzlich subjektiv einseitige Stellungnahme) を採らねばならないといふこと、これである。この點に於いてドイツの宣傳は甚しく過誤を犯して居り、而もそれが戰爭の劈頭から最後まで改められなかつたものであつて、その爲に人々は、果して斯程までのナンセンス沙汰は單に純粹な愚かに基づくものであるかどうかを、當然疑はせられた程であつた。

例へば、或る一の新しい石鹼を賣り出さうとする場合、その廣告に、同時に他の諸石鹼をも「優良」なものとして記載したならば、人々はそれを見て何んと考へるであらうか？

人々はそれを見て唯だ頭を横に振るだけであらう。

政治上の廣告に於いても事情は全く同じものである。

宣傳の使命なるものは、例へば、幾多の相異なる正當性を比較考量するに在るのではなくして、該宣傳がその爲に宣傳せんとする所の或る一つの物を専ら強調するに在る。宣傳は、假令眞理であらうとも、それが他に幸ひするものである限り、これを客觀的に追究して以つて大衆にその論理的公明性を知らせようなどすべきものではなくして、常に唯だ自方に奉仕するものでなければならぬ。

戰爭の責任を論ずるに當つて、ドイツのみがこの破局（戰爭）の發生に對して責任を歸せらるべきではな



くして、寧ろ、假令それが實際の經緯に眞に一致しないものであつたとしても、その責任をば餘す所なく敵に負はせるが宜い、といふが如き不徹底な見地よりしてこれを論ずることは——斯うした見地からの所論は當時實際に行はれたのであつたが——根本的に誤れるものであつた。

果してこの中途半端の態度の結果はどうであつたか？

一國家の大衆といふものは何處でも、外交家や國法學者などからのみ、或ひは換言すれば、純粹に理性的に判斷し得る人々からのみ出來てゐるものではない。それは寧ろ、常に動搖的にして疑惑や不安に陥り易い人の子達から出來てゐるものである。自方の宣傳に依つて一度び、敵方にも理由が無きにしも非ずといふやうなことが容認されんか、それは忽ちにして自方の正當性に對する疑惑の基となる。大衆はその場合、他國の不正が何處に終り、自國のそれが何處に始まるかなどは、識別することが出來ない。斯かる場合には彼等は動搖し昏迷するを免れず、殊に敵が同様のヘマなどはせずして、その有りと凡ゆる責任を對敵に負はせて來る時に於いて然りである……。

民衆の壓倒的多數といふものは、その素質に於いても態度に於いても元來女性的なものであり、冷靜なる思慮に依つてよりも、感情的感覺に依つてヨリ多くその思想及び行動を決定されるものである。

その感覺は決して複雑なものではなくして、寧ろ甚だ簡單にして且つ頑固なものである。其處には多くの見分けなどは無くして、ただ肯定か否定か、愛か憎しみか、正か不正か、眞實かウソか、その孰れかが有るのみである。決して半ばはこれで半ばはあれとか、或ひは部分的にあれこれといふことは無いのである。

この點に於いても殊にイギリスの宣傳は、眞に天才的にその一切を理解し、且つこれを考慮してゐた。其處には、自方の疑惑を惹起するやうな中途半端ハーフ・ハイトといふものは全く見られなかつた。

イギリスが右の大衆の感覺の素朴性をヨク知つてゐたことの證據は、この大衆の狀態に應じて、容赦なく且つ巧みにも、敵の暴逆を宣傳し、以つてその事實上大敗北せる時に於いても尙ほ能く、その戦線の道德的抵抗を保ち得るの用意をしてゐたことの中に見られたと共に、更にその敵ドイツを以つて戦争發生の唯一の責任者となし、これを飽くまで徹底的に糾弾せる所に見られた。それは一の虚偽たるものであつた。而もイギリスはこれをば、無條件に・鐵面皮に・一方的に、飽くまで強引に、ひたすら強調することに依つて、感情的にして絶えず極端に走り易い大衆の傾向に投じ、且つその爲にまた遂に信用を獲ち得たのである。

斯うした敵の宣傳が如何に有効であつたかは、それが四年の後にも尙ほ彼等をして頑強に戦はしむることが出来た許りでなく、更にそれが我が國民までも侵蝕するに至つたといふ事實が、最も顯著にこれを示してゐる。

これに反して我方の宣傳が斯かる効果を擧げ得なかつたといふことは、全く人々の怪しむを要しない所であつた。我方の宣傳は、既にその内部的二重性の中に、その無效果の胚種が孕まれてゐたのである。それが大衆の上に必要な影響を喚び起すであらうなどといふことは、既にその不徹底な内容よりして、所詮、期待さるべくもなかつたのである。斯かる陳腐な平和主義の流し水を以つて、人々を死にまで振ひ立たせ得やうなどと考へるのは、魂ひ無き我が「官僚政治家達」のみの可能とするものである。

斯くて我方の宣傳結果は憐れにも無効であつた計りでなく、實に有害でさへあつた。』(S. 200—202)

右のヒトラーの所論を以つて、敵を倒す爲乃至戰爭宣傳に於いては、如何なるウツを言つても構はないといふが如き意味に解するならば、それは少からず誤りたるであらう。この種の『マイン・カンブ』解釋は從來可成り廣く實に世界的に行はれて居り、ナチス把權前には、ドイツ自體に於いてもその反對派に依つて盛んに行はれたものであるが、我國に於いても今日尙ほその傾向なしとしない。例へば、我國の或る『權威』ある官廳の譯出せる『マイン・カンブ』翻譯の中の如きも、前掲の私の譯出に據れば、『政治上の廣告に於いても事情は全く同じである。宣傳の使命なるものは、例へば、幾多の相異なる正當性を比較考量するにあるのではなくして、該宣傳がその爲に宣傳せんとする所の或る一つの物を専ら強調するにある。宣傳は、假令眞理であらうとも、それが他に幸ひするものである限り、これを客觀的に追求して以つて大衆にその論理的公明性を知らせやうなどとするべきものではなくして、常に唯だ自方に奉仕するものでなければならぬ。』といふ個所をば、『政治の宣傳だつて同じことだ。それ故に宣傳は本當のことでなく、嘘であつても良いのだ。要は相手をわるくして、こちらを良いものにさへすれば、宣傳の目的は達せられるのだ。それがわからぬやうでは宣傳でない。』と、如何にも『嘘であつても良い』流に譯出紹介してゐる。

が、正直に丹念に読んで見れば恐らく何人にも分るであらう如く、ヒトラーは問題の個所に於いて左様なことを言つてゐるのではなく、戦争宣傳に於いて一の主張をなすに當つては専ら自方の正當のみを強調すべきであつて、假令眞理であつても、相手方の正當を思はせるやうなことは斷じて云々すべきではないといふことを言つてゐるのである。『原則的に主觀的・一方的な態度』と言つてゐるのも、私に據れば、要するにその意味に外ならないものである。若しそれが、單に或ひは専ら、相手を悪く印象付ける爲には如何なるウツを宣傳しても構はないといふ意味のものに解するならば、ヒトラーが直ぐその前に述べてゐる前節に紹介せる『敵を徒らに滑稽化して見せ』た所の『オーストリア及びドイツの漫畫新聞』に對する彼れの反對論と直ちに背反し、解くべからざる矛盾に陥るであらう。と共に、斯かる宣傳は實際に、多くの場合、ヒトラーの言つてゐるオーストリアの新聞漫畫と同様に逆効果を來すであらう。

これは、この場合我々の篤と注意を要する所でなければならぬ。私が敢へて斯く言ふのは、ヒトラー乃至『マイン・カンフ』を辯解せんが爲などではない。左様な義理は私には何等無い。斯かる淺薄な『マイン・カンフ』解釋の我國に及ぼす影響を恐れるからである。世の中は、私に據れば、如何なる場合に於いても、如何なるウツを言つても宜いといふやうな性質のものではないのだ。

ヒトラーは、この宣傳態度の問題に關聯して最後に、例に依つて例の如く、『不撓不屈』といふこ

とをその根本要件として強調してゐる。ヒトラーに據れば、宣傳は極めて理解の鈍いをしてまたその暇もない大衆の爲に存在するものであつて、次から次へと新奇を求めて走る小才子や道樂者などの爲に存在するものではない。従つてそれは、絶えず倦まざる反覆の後に始めてその効果を奏し得るものである。従つてまた宣傳には、昨日までは自由主義やマルクス主義を唱へ乍ら今日は全體主義だの皇道主義だのと言つてゐるやうな思想的乃至志操的浮氣者共を用ひることは禁物たるものである。宣傳には、終始一貫變らざる態度及び人物を以つて臨まなければならぬ。彼れはこれに就いて次の如く記してゐる。

「然し乍ら、如何なる宣傳構成の才能も、その根本原則といふものが常に嚴に考慮されなかつたならば、決してその効果を達し得ないであらう。宣傳はその自らを僅かに制限し（餘り多岐に互らずにの意）、而もこれをば永久に反覆して行かなければならない。不撓不屈といふことは、世上多くの事柄に於いて然りであるが如く、此處でも、成功を獲ち得る爲の最初にして且つ最も重要な前提である。

宣傳の領域に於いては實に、審美屋や道樂者に支配されることは禁物たるものである。蓋し、前者の場合に於いては、その宣傳内容の表現形式や言葉使ひよりして、忽ちにして、大衆に適應するものならずして、寧ろただ文學的茶會の爲に興味あるやうなものとなつて了ふ。また後者の場合に於いては、彼等自身既に清

純な感覺を缺いてゐて、而も常に新奇な刺激を求めてゐるものである爲に、危險を憂慮されるのである。これらの連中は忽ちにして凡てのことに倦きて了ふ。彼等は變化を望む。彼等は、尚ほ彼等のやうに破廉恥になつてゐない同時代の人々の要求を我が身に移して考へることを知らず、またこれを全然理解しようと思はない。彼等は常に、宣傳の或ひはヨリ適切に言へばその内容の第一の批評家であり、その内容は彼等には餘りに古臭いもの、餘りに常套的なもの、従つてまた餘りにも流行遅れなもの等々に思はれる。彼等は常に新奇を欲し、變化を求め、その爲に遂に全く一切の有効なる政治的大衆獲得の死活的仇敵とまでなつて了ふ。蓋し、一の宣傳の組織及び内容が斯かる連中の要求に適應され始めんか、該宣傳は忽ちにしてその統合性を失ひ、遂に完全に飛散して了ふのである。

宣傳といふものは、然し、斯かる荒んだ小紳士共に絶えず興味ある變化を與へる爲になど存在するものではなくして、説得する爲に、而も大衆を説得する爲に、存在するものである。然るに大衆なるものは元來遲鈍にして、或る一つのことでもこれを知り得るまでには、常に一定の時間を必要とする。彼等は、極めて簡単な概念でもこれをば幾度となく繰り返して教へられて、始めてこれを覺え込むやうになる。

従つて宣傳はその幾度び繰り返される場合に於いても、それに依つて傳へらるべき内容をば斷じて變へてはならない。それは常に、その結局に於いて同じことを語つてゐなければならぬ。勿論、その標語は種々の方面から説明されなければならない。が、その場合に於いても、その一切の考察は常に改めて標語そのものに向けられるやうにしなければならない。斯くして始めて宣傳は、統一的に且つ強乎に影響し得るもの

となり、且つ影響するであらう。

この大方針は決して忘れられてはならないものであつて、これが終始一貫變らず屈せず推し進められる時に於いて始めて、宣傳はその最後の成果を達し得るのである。斯くして始めて人々は、斯うした不撓不屈なもの、如何に殆んど想像に絶するやうな大なる成果に達するかを、驚異を以つて確認し得るであらう。

一切の廣告宣傳は、その商賣の世界に於いてであらうとも政治の世界に於いてであらうとも、絶えず變らず同じやうにこれを續けて行ふことに依つて、その成功を獲ち得るものである。』(p. 203—205)

然るにこの點に於いてもドイツの戰爭宣傳は、イギリスのそれに比して全くお話しにならないものであつた。斯くてヒトラーに據れば、イギリスの戰爭宣傳はその四年半の後にはドイツに革命まで呼び起したのであつたが、ドイツのそれは『その一切合切集めて結局ゼロに等しいもの』であつた。斯かる意味に於いてドイツは宣傳に敗れたと言はれるのであり、事實またその宣傳に關する限り最初から敗れてゐたのであつた。ヒトラーは最後に次の如く記してゐる。

『この點に於いても、敵の戰爭宣傳の行り方は模範的なものであつた。……其處では、その一度び正しと認められた根本思想と實行方式とは、戰爭の全期間を通じて、その間些少の變更をも企てられることなし

に、終始一貫適用されてゐた。その宣傳は最初は、その言ふことの餘りの鐵面皮なる爲に、明らかに狂氣染みて見えた。が、その後漸次不快を呼び起すやうになり、そして最後には遂に信ぜられるに至つたのであつた。斯くて四ヶ年半の後にはドイツに革命が起つたのであるが、その革命の標語はこの敵の戦争宣傳から出たものであつた。

イギリスに於いては人々は更に次の事を心得てゐた。即ち、この精神的武器なるものは、これを多量に使用する時に於いてのみその効果の有り得るものであるが、然しその効果はその凡ゆる費用を充分償ふものであるといふこと、これである。

宣傳はイギリスに於いては、最高級の武器として取扱はれてゐた。然るに我國に於いてはそれは、職無き政治家達の最後の飯喰ひ種とされ、小心な先生達の僅か許りの原稿料の稼ぎ口とされてゐたのであつた。

斯くて我が宣傳の効果なるものは、その一切合計集めて結局ゼロに等しいものであつた。』(S. 203—204)



## 第六章 革命・敗戦・崩壊

### 一 敵の宣傳漸次奏功す

ヒトラーに據れば、前大戰に於けるドイツの爲政者階級は餘りにも無自覺にして、或ひは餘りにも低級に『賢明』にして、既に久しき以前よりその根本國策『國家國民生存の大方針を誤つてゐたのみならず、愈々戰爭に當つてはその内外對策殊にマルクス主義及び自由主義に對する措置を誤り、更にその戰爭宣傳に於いて拙惡無能を極めしことは、前章及び前々章に紹介せし所に見るが如くである。斯くてドイツは前大戰に周知の如き敗戦・崩壊を見るに至つたのであるが、ヒトラーは彼れの經驗せるこの敗戦・崩壊の過程をば、『革命』と題する章（原著第一卷第七章）の中にこれを敘述してゐる。彼れに據れば、このドイツの敗戦・崩壊には元より種々の深き原因が存せるものであり、これをば彼れは別に『崩壊の原因』と題する龐大な一章（原著第一卷第十章）を設けて論じてゐるが（次章に紹介）、然しそれは直接的には何よりも先づ革命『マルクス主義者及び自由主義者の反戰陰謀に依つて齎されたものであつたのだ。而してこれに關するヒトラーの敘述こそは、その悲壯深刻を極むる點に於い

て、正に『マイン・キャンプ』全二巻全二十七章中の壓巻個所を成すものである。私は曾つてこれを幾度か讀み、幾度か涙無き能はなかつたものであるが、この個所は原著に於いては、その比較的短きにも拘はらず、色々の意味に於いて重大なものである。ヒトラーは茲で『政治家たらん』と志してゐるのである。讀者諸氏に於いてもその積りで讀んで頂き度い。それは元より他人事であるが、然し必らずしも他人事ならず、其處には我々の採つて以つて深く考慮すべき幾多のものが存するのである。

ヒトラーに據れば、ドイツは前大戰に先づ戰爭宣傳に於いて敗れたことは既に見たるが如くである。彼れに據れば、戰爭は國民的民族的生存の爲に戰はれるものであり、従つてまた國民的民族的見地から、國民的民族的熱情を以つて、推し進めらるべきものであつた。然るにドイツ側に於いてはそのユンケル爲政者達は、一方に於いてはその國民乃至兵士に訓ふるに、單に専ら『カイザー（皇帝）』の爲に戰ふべきものかの如くなし、而も他方に於いて外に對するには、そのカイザー乃至カイザー・ドイツは『世界の平和』以外に何等望む所なしとしてゐたのである。この態度なるものはウイルヘルム二世もその影響を蒙つてゐたと言はれる古支那の『天の政治』思想及び中世歐洲の『神の政治』思想に深く由來するものであるが、斯かる戰爭態度が近世國民的民族的人類の見地に立てる敵の宣傳の前に如何に無力なものであつたか、如何に乘じられ易いものであるかは、少しく考ふる者には容易に察知し得られる所でなければならぬ。一體、カイザーは何んの爲に戰爭を求むるのであるか？ その

謂ふが如く單に世界平和の爲であり、諸國民をしてその安住を得せしむる爲ならば、寧ろ戦争などは爲さざるに如くはないではないか？ これは當然起つて來る心理的必然的論理でなければならぬ。この心理的及び論理的矛盾に乗じて、これを逆用して入つて來たのが、取りも直さず敵の戦争宣傳であつたのだ。

ヒトラーは先づこの敵の宣傳のドイツ軍戰線への侵入及び影響に就いて語つてゐる。敵の宣傳はドイツ軍兵士の間に、最初は勿論相手にされなかつたが、これに對して、ドイツ側からは何等の適切な反撃も行はれず、前記の如き獨善的なことのみ繰り返してゐた爲に、戦争三年目頃から漸次奏功して來たのであつた。敵の宣傳と言つても主としてイギリスの宣傳であつて、イギリスに於いてはこの時民間より例のノースクリフ（新聞王の一人）等を拔擢して、費用を惜しまずに對敵宣傳に全力を注いでゐたのである。而してこの敵の宣傳に意識せずして或ひは意識して、呼應し迎應したものは、先づ第一に自由主義諸新聞であつた。彼等は、前章に紹介せる所に見る如く、謂はゆる『大國民』の態度を採つて、ドイツの望む所は唯だ世界平和に在りとなし、戰勝祝ひの如きも成るだけこれを控ふべしとなし、寧ろ國民の戰意の抑制に努めてゐたのである。而してそれがまた結局ユンケル政府の方針でもあつたのだ。畢竟するに彼等はいづれも、階級的・貴族軍閥官僚的・ブルジョア的であつて、國民的民族的ではなかつたのである。それが結局敵の宣傳をして成功せしめたのである。ヒトラーは痛憤を

以つて次の如く記してゐる。

「敵の宣傳は既に一九一五年〔戦争第二年目〕から我々の間に現れて來たのであつたが、それが一九一六年〔第三年目〕から益々激しくなり、一九一八年〔第五年目〕の初めには遂に全く一大氾濫を成して押し寄せて來た。斯くて今やその眼に見えざる畏の効果も一歩々々現れて來たのであつた。ドイツ軍隊は次第に、敵の望んだ如くに考へるやうになつて來た。

然るにこれに對してドイツ側の反撃は全然行はれなかつた。

當時のドイツ軍の精神的及び意志的指導部としては、恐らくこの戦争分野に於いても敢然戦ひに應ずるの意圖と決意とを有してゐたであらう。が、軍隊にはそれに必要とされる所の手段が無かつた。且つまた、これが啓蒙 (Aufklärung) — この語の適譯は一寸見出し得ないが、この場合には「解明」乃至「開明」と言つた意味に近いものと解して欲しい) を軍隊自身で行ふといふことは、心理的にも間違ひであつた。啓蒙は、その眞に效果的ならんが爲には、故國から起つて來なければならなかつた。斯くしてのみ兵士達の間に效果が見られたのだ。實に兵士達は結局ただこの故國の爲に、既に大方四年も前から英雄的勇氣と忍苦の不滅の行動を續けて來てゐたのだ。

然るに我が故國からは何が起つたか？ あの無爲は一體、馬鹿といふべきか、犯罪といふべきか？

殊に、一九一八年の盛夏、マルヌ南岸の撤退の後に、ドイツ諸新聞の採つた態度なるものは、實に情けな

いほど拙惡にして、馬鹿も正に犯罪的なものであつた。私はこれが爲に、日々に募る怒りに燃えつゝ、この軍隊の勇士達の精神的壊滅を止める人間は故國には果して眞に一人も居ないのかと、疑問を發せしめられたほどであつた。

一九一四年、我々が未曾有の大勝を以つて嵐の如くフランスに突入した時、フランスに於いてはどうであつたか？ イタリーがイゾンゾ戦線に敗れた時、イタリーではどうであつたか？ 更に一九一八年の春再び、我がドイツ諸軍が一齊に攻撃に移らんとする態勢を示し、長距離重砲の長い腕がパリを叩き始めた時、フランスではどうであつたか？

如何に其處では常に、國民的熱情の沸き立つ熱誠がその退却せんとする諸聯隊に親しく浴せられたことであつたか！ 如何にその時敗れたる戦線の兵士達の胸に却つて益々終局的勝利の確信を叩き込む爲に、宣傳と獨創的な大衆的激勵とが行はれたことであつたか！

それに引きかへて我が方ではどうであつたか？

何も行<sup>な</sup>かなかつたのだ、否、何も行<sup>な</sup>らないよりもモット悪いことを行<sup>な</sup>つたのだ。

當時私は幾度か、當時の最も新しい新聞を手にして、其處に斯かる心理的大虐殺の犯されてゐるのを眼のあたりに見、怒りと昂奮とに燃えたのであつた。(C. 205—206)

國內爲政者階級の『馬鹿といふべきか犯罪といふべきか』は暫らく別として、然らば敵は當時ドイツ軍兵士に對して如何なる宣傳をしてゐたか？ 宣傳は假令その結果に於いては全く相手を欺くものであつても、其處にまで至る過程乃至手段に於いては寧ろ逆に、出来るだけ嚴に、事實に即し眞實を得たものでなければならぬ。斯くして始めてその所期の效果も達せられるのである。然るにその點に於いて敵の宣傳は巧妙を極めたものであつて、正にユンケル・ドイツの弱點の根本を突いたものでつた。ヒトラーは次の如く記してゐる。

『一九一五年の夏に始めて敵の宣傳ビラが我々の手に入つた。

その表現の形式には若干の相違はあつたが、その内容は殆んど常に同一であつて、次の如きものであつた。ドイツの國內窮乏は益々増大して來てゐる、戦争は何時果てるやら分らない、而もドイツが戦争に勝つ見込は益々無くなつて來てゐる。だから故國に於いては既に國民は平和を渴望してゐる。が、『軍國主義』と「カイザー」とがこれを許さない。全世界はこの事をヨク知つてゐるので、彼等はドイツ國民と戦争してゐると思つてゐない。唯だ一人の責任者「カイザー」と戰つてゐるものとのみ考へてゐる。従つてまた、この人類平和の敵が除去されるまでは戦争は終止しないであらう。然し、世界の自由主義的民主主義的諸國民は、戦争終結の曉には、ドイツ國民をも永久の世界平和の結合に加へるであらう。而してこの結合は「プロ

シア軍國主義」の打破の瞬間より確立されるものである、と。

そして、以上に述べられたことをヨリ良く例證する爲に、「故國からの手紙」なるものが附録されてゐることが珍らしくなかつた。而してその内容は、右の宣傳ビラに言つてゐることを確證すると思はれるものであつた。

當時人々は一般に斯うした敵の一切の試みをば一笑に附して居た。ビラは讀まれた。そして後方の本部へと送られ、空から風が再びビラ束を墮落の中へ運び込むまでは大抵忘れられてゐた。といふのは、ビラを撒布して廻るのは大抵飛行機だつたのである。

が、間もなく、この種の宣傳の中に次の一事が注目されなければならなかつた。それは、バワリア兵の居た戦線地區の到る處に對して異常な徹底さを以つて、反プロシア宣傳の絶えず行はれたことであつた。而してそれには、一方に於いて専らプロシアが全戦争のそも／＼の發頭人であり責任者であることを力説すると共に、更に他方に於いては、特にバワリアに對しては聯合國は毫も敵意を有するものではないことを力説し、然しバワリアがプロシア軍國主義の爲に火中の栗を拾ふべくこれと協力する限り、バワリアもまた當然救はれないであらうと力説してゐた。

斯うした働き掛けは、既に一九一五年に於いて、實際に一定の効果を奏し始めてゐた。反プロシアの空氣は、バワリア諸軍隊の間に眼に見えて擴つて行つた。而もこれに對して、上から唯だの一度も何等の對策も行はれなかつた。これは既に單なる怠慢以上の罪であつた。而してこの罪は、遅かれ早かれ遂に最も禍ひ

深く報ひられなければならなかつたのだ。而も「プロシア」のみに對してではなく、全ドイツ國民に對してである。而してバウリアそのものもまた結局それから洩れるものではなかつたのだ。

斯くの如くして敵の宣傳は、既に一九一六年から無限の成功を示して來てゐた。』(p. 306—308)

この敵の宣傳を破る爲にはドイツは、その國內國民生活を實際に於いて出来るだけ公正化すると共に、その國民的民族的立場を彌が上にも内外に強調しなければならなかつた。斯くしてのみ、プロレタリアもブルジョアも、プロシアもバウリアも無く、一致して戦ひ得るものであつたのだ。然るに當時のドイツ爲政者達は、さうしたことを殆んど何等考へずして、一方に於いては、國民殊に兵士に求むるに唯だ『カイザー』の爲を以つてし、他方に於いては新聞をして國民的要求として『世界平和』を云々せしめてゐたのである。これは、意識せずして、戦争の責任を唯だ一人『カイザー』に歸せしむるものであつたと共に、ドイツ國民は平和を渴望してゐるが、『カイザー』乃至『プロシア軍國主義』がこれを許さないといふ、敵の宣傳を裏書きするものでなければならなかつた。

斯くしてドイツは、見す／＼敵の宣傳の手中に我れと自ら陷つて行つたのである。ヒトラーはこれを戦場に見て焦慮措く能はないものがあつた。然し彼れは名も無き一兵士に過ぎなかつた。この『馬鹿か犯罪か』も、ただ首を垂れて見送る外はなかつた。彼れはこれに就いて次の如く語つてゐる。



「若し天の摂理にして私を、この我々の宣傳の何等爲すなく何等考ふるなき無能な乃至犯罪的な當局者共に代らしめたならば、戦争はモット異つた運命に進んでゐたであらうといふ考へに、私は一再ならず苦しめられた。

斯うした懊惱の幾月か、私は始めて運命の完全な悲戯を痛感した。運命は私をして前線に立たしめ、而もネグロ兵でも何時でもこれを射倒すことの出来る場所に置いてゐたのである。私は、祖國の爲に、他の場所に於いてモット異つた任務を盡すことが出来たのにだ！

蓋し私は、その任務（宣傳の任務）に成功してゐたであらうことは、當時私の既に充分自信する所であつたのだ。然し私は一介の名もなき人間であり、八百萬の兵士の中の一人に過ぎなかつた。

だから、私などは、口を緘して、その興へられたる場所に出来るだけその義務を盡して居るの外はなかつたのだ。』（S. 206）

## 二 國內窮乏の増大とその戦線への影響

石が流れて木の葉が沈み、馬鹿や犯罪的人物が支配して、眞の識者や愛國者は忌避される。——ヒ  
トラーに據れば、要するに、前大戦に於けるドイツは正にそれであつたのだ。その爲にまた敵の宣傳

にも敗れたのである。

然し、敵の宣傳だけの影響の間は未だ宜かつた。國內の窮乏が増大し、貧富の懸隔が甚しくなり、それが必然的に内地からの家族の手紙その他に依つて戦地にも知られるに及んで、戦線兵士の士氣の動搖は加速度化し、敵の宣傳の効果は決定的なものとなつて行つた。戦線は罵詈に充ち、屢々『反抗騒ぎ』さへも起つた。それには、故郷の女達『妻や母達からの銃後の困苦を傳へた』『無思慮な手紙』が與かつて力あつた。が、ヒトラーに據れば、兵士達が憤慨したのも無理がなかつた。『彼等は戰場に飢ゑ苦しむ、その家族は家郷に在つて窮乏の中に坐してゐたのに、他の場所には飽滿と淫逸とが有つたのだ。』一方には、正直なる多くの人々はその家族を抱いて凡ゆる困苦犠牲を餘儀なくされ、その食ふべき物も食はず、榮養不良でフラ／＼してゐたのに、他方には、金力有り權力有る者は戦争に依つて却つて利益し、未曾有の致富及び出世を見、その金力權力に依つて時局の名の下に却つて奢侈逸樂を恣にしてゐたのであつた。而もそれは必ずしも國內のみに限らなかつた。多かれ少かれ同じやうなことは戦線にも見られた。『戦地自體に於いてもその點に於いては全くダラシが無かつた。』前線第一線に於いては兵士達は、幾日ともなく食も攝らずに敵の砲火の前に曝され、血と泥とに塗れて戦つてゐたのに、後方『兵站部に於いては、殊にその將校共は、稍々もすれば女を側らに酒食に興じてゐたのであつた。斯かる情況の下に於いて、前線の兵士達が憤激し騒いだのも、ヒトラーに據れば、

全く無理もないことであつたのである。彼れは次の如く語つてゐる。

『同時に、直接故郷から來る悲嘆の手紙も早くからその影響を及ぼしてゐた。今や敵は、この手紙をばその宣傳ビラやその他の方法に依つて特に戦線に傳達する必要は、最早全然なかつた。而もこれに對しても「その筋」からは、少しもピンとしない型の如き「訓示」以外には何も行はれなかつた。戦線は、無考へな婦人達が家庭で製造する所の毒素を以つて絶えず充滿された。勿論彼女達は、それが敵をして勝利の確信を此の上もなく強めしめる手段となり、従つてまた戦場にある彼女達の關係者の苦難を長くし強くするものであるとは、氣付かう筈もなかつた。が、このドイツ婦人達の無思慮な手紙は、それから間もなく數百千の下イツ男兒の生命を奪つたのである。』

斯くて一九一六年には既に種々の憂ふべき現象が現れた。戦線は罵詈雑言に充ち、「ゴツタ返し」た。既に多くの事で不満であり、屢々また憤激し反抗したのも無理はなかつた。彼等は戦場に飢ゑ苦しむ、その家族は故郷に在つて窮乏の中に坐してゐたのに、他の場所には飽滿と淫逸とが有つたのだ。然り、戦線自體に於いても、その點に於いては、全くダラシがなかつた。』(S. 208)

ヒトラーは、夙に紹介せる所に見る如く、バウリア軍に所屬し、先づベルギーのフランダール戦線へと出陣し、次いで北フランス戦線に轉戦したのであるが、右は恐らく彼れの所屬せるバウリア軍隊の

間にのみではなく、全戦線に全ドイツ軍隊に互つて多かれ少かれ見られた現象であつたであらう、然し、それでも尙ほ敵の前には勇敢な軍隊であつた。今まで種々と不平を言ひ、『ゴツタ返し』、『反抗』騒ぎさへ演じてゐた兵士達も、一度敵が襲來するや、國民的民族的本能よりして、『恰かもドイツの運命は彼等の守る數百米の泥穴に懸つてゐるかの如くに』、その陣地に飛び付いて行つた。不平も罵詈も反抗も尙ほ、祖國の崩壊を望むものではなくて、祖國の健全化を望むものであり、その『馬鹿』や『犯罪者』共の驅逐を望む現れに外ならなかつた。『それは尙ほ元のまゝの立派な精軍』であつた。

『斯くて當時稍々もすれば不穩の形勢にあつた。然しそれは尙ほ「内部的」事件たるに止つた。今まで罵倒し不平を言つてゐた者も、數分の後には、恰かもそれが自明のことであるかの如く、黙々としてその義務を盡した。最初は不平不満であつた中隊も、恰かもドイツの運命は彼等の守る數百米の泥穴に懸つてゐるかの如く、彼等の守るべき戦壕にしがみ付いた。それは尙ほ元のまゝの立派な精軍であつた。』(S. 226—227)

一九一六年と言へば戦争第三年目であり、軍事的にはドイツが例の有名なヴェルダン攻撃に十有餘萬の屍を築いて遂に失敗した年であるが、右に見るが如くヒトラーに據れば、それでも尙ほ戦線に於

けるドイツ軍隊は立派なドイツ軍隊であつた。が、此時には國內は既に收拾し難き動搖に陥り、一路崩壊へと向つてゐた。

若し茲でドイツが、何等かの適切な方策に依つて、その國內の人心の動搖を阻止し得たならば、ドイツは前大戰にあのやうな敗戦・崩壊を見ずに済んだであらう。その窮乏は多かれ少かれ免れたかつたとしても、これが負擔をば均等化し公正化することに依つて、換言すればその戰時體制をば思ひ切つて國家主義的社會主義的に更に一段と進めることに依つて、この事は可能であつたのだ。然るに戰線に於ける兵士の士氣の高揚の爲に『型の如き訓示』以外には何等の企圖も行はれなかつたと同様、茲でもまた何等のさうした企圖も行はれなかつたのである。カイザーの當時の最高經濟顧問は豫ねて彼れの『友人』たりしユダヤ人大資本家某であつたといふ説は——これは可なり廣く後世にまで傳へられてゐる説であるが——その何處まで眞實であるか茲には保證の限りではないが、兎に角事實は斯くして益々、後のヒトラーの敘述の中に見るが如く、一部階級殊にユダヤ人大資本家の手に富を集中せしめ、一般大衆の窮乏を増大して行つたのである。スチンネスなどといふ戰爭大資金の現れたのも此頃である。生半可な資本主義的な戰時體制といふものは結局さういふことになるものであるのだ。斯くてドイツは國內人心の動搖を阻止する能はず、従つてまたその戰線兵士への影響も抑へることが出来なかつたのである。

### 三 ソンムの戦ひと負傷歸還

ヒトラーはこの窮乏と動搖の國內をば、その負傷歸還に依つて眼のあたりに見ねばならなかつた。一九一六年十月、彼れはソンムの戦ひに重傷を負ふて——確か左大腿部だと記憶するが——國內に送還されたのであつた。

一九一六年といふ年はドイツにとつては一の厄年であつた。嘗に此年に國內マルクス主義者及び自由主義者の公然の反戦の叫びが擧げられた許りでなく、軍事的にも正に一の危機に立つてゐた。此年春早々二月、戦局の一大展開を期して、西部戦線に於いて始められたヴェルダン攻撃が、遂に慘憺たる失敗を見てゐた許りでなく、東部戦線に於いてはロシアが一大攻勢に出で、更にルーマニアが將に敵側に参戦せんとしてゐた。これが同年半ば六月、ソンムの大戰の開始される直前の状態であつた。

此時ドイツ側の参謀總長はカイザー及びその周圍の軍事顧問官達の信用厚かりしフアルケンハインなる人物であつたが——因に、最初の参謀總長モルトケは、既に戦争の始まつた一九一四年のうちに、バリ攻略失敗、エーマ河畔撤退直後、病弱の故を以つて引責辭職してゐた——彼れは、或ひは彼れもまた、『無能』の譽れ高く、前年（一九一五年）に於けるイタリアの参戦の経験にも懲りず、今度もまたルーマニアの参戦よりして既に信ぜず、この東部戦線の新たなる危機を見ても、これを別にどうし

ようともしなかつた。當時のドイツ側東部戦線の指揮官はヒンデンブルグであり、その下にルーテン  
ドルフが參謀長を務めてゐたが、彼等は敗れたるオーストリア軍を援ける爲にその指揮下から數個師  
團を割かれ、當時ヒンデンブルグ自身の言に據れば、『全く見え透く許りの薄布を前に』して敵に對  
してゐた。彼等が一九一四年にタンネンベルグに獲ち得、その後また諸所に獲ち得た大勝も、何等ド  
イツを救ふことにならず、今はその前に獲ち得た所のものも再び敵の蹂躪する所となつてゐた。これ  
は西部戦線に於いても多かれ少かれ同じであつたのだが、これが爲に有名な『短氣』で憤慨家の快男  
兒であつた例のルーテンドルフは——彼等は當時大佐か少將だつたらしいが——憤慨して、ヒンデン

ブルグには無斷で、大本營に宛て辭表を送つたり引つ込めたりしてゐた。

斯かる情勢の下に、西部戦線に於いて新たに敵聯合軍に依つて開始されたのが、一九一六年七月  
から其後約五ヶ月に亘れるソンムの激戦であつたのである。(因に、この戦ひの途中から、ヒンデン  
ブルグとルーテンドルフとは、ファルケンハインに代つて、全軍の參謀總長及び次長に起用された。)  
敵は東部戦線に於けるロシアの攻勢及びルーマニアの新たな參戰に呼應して、西部戦線はこのソン  
ム河の戦線に於いてドイツ軍を撃破し、以つて戦争を終局に導かんとしたものであつて、ドイツにと  
つては正に死ぬか生きるかの戦ひであつた。ドイツ軍は寡兵善く大軍を引受け、一步步退きつつ、  
而も遂に敗れなかつたのであるが、ヒトラー達はフランダールからこのソンムの戦ひに廻されたのであ

る。そして其處で彼れは負傷して國內に送還され、變り果てた國內を見ねばならなかつたのである。彼れは前節に引用せる所に續いて次の如く言つてゐる。

『この戦線と國內の相違をば私は、その著しい對照の中に如實に知らねばならなかつた。

一九一六年九月の末、私の師團はソナムの戦ひに廻された。この戦ひは、我々にとつては、それから引續いて行はれた大白兵戦の最初であり、その印象は到底筆紙に盡し得ないものであつた。——それは戦争といふよりも寧ろ地獄であつた。

ドイツ軍は數週間に互る砲火の凄しい旋風の中に曝された。幾度となく撃退されてはまた突進し、いつかな怯まなかつた。

一九一六年十月七日、私は負傷した。

私は幸ひにも後方に送られ、輸送列車でドイツへ送還されることになつた。』(S. 309)

彼れは更に、そのドイツへ送還される途次及びベルリン近郊の衛戍病院に落付いた時の思ひ出を次の如く記してゐる。

『今や私は、故國を出てから二年の歳月が流れてゐた。それは斯かる事情の下に於いては、殆んど無限の



月日の如く思はれた。私は、制服に包まれないドイツ人がどんな風をしてゐるかをば、最早想像することが出来なくなつてゐた。私は、尙ほヘルミースの負傷者假收容所に横はつてゐた時、看護婦としての一人のドイツ婦人が私の側に横はつてゐた男に突然聲を掛けた時には、殆んど驚かん許りであつた。斯かる聲は二年振りで始めて聞いたのだ！

それから我々は、我々を故國に送る列車の人となりその國境に近づくにつれて、その誰れも彼れも一樣に益々胸の轟きを覺えた。曾つて二年前に我々が若き兵士として通過した所の凡ての場所、ブリュッセル、レーメン、リュツテツヒを通り過ぎた。そして遂に、高い風窓の頑丈な鎧戸の間に、最初の故國の家屋と思はれるものを見出したのであつた。

あゝ祖國！

一九一四年十月、我々がこの國境を通過した時には、我々は嵐の如き熱狂に燃え立つてゐた。が、今はただ静寂と感動とのみが支配した。我々は皆幸福であつた。運命は我々が生命を以つて斯くも困難に守らねばならなかつた所のものをば、いま一度見せて呉れたのだ。何人も凡そその他のことを見せられることを恥ぢた。

出征の日と殆んど同じ日に、私はベルリン近郊のペーリッツッ衛戍病院に入つた。何んといふ變化であらうか！ ソンムの戦ひの泥の中から、この立派な建物の白いベッドの中へ！ 最初のほどは我々は、殆んど誰も落付いてベッドの中へ入つて居ようとしなかつた。久しく経つて始めて、我々

は漸やくこの新しい世界に慣れることが出来た。』(S. 209—216)

#### 四 變り果てた祖國——漲る反戰氣分

『ソナムの戦ひの泥の中から』、ベルリン郊外ベリッツ衛戍病院の『立派な建物の白いベッドの中へ!』斯くてヒトラーは、戦争第三年目に滿二ヶ年振りで圖らずも再び故國を見たのであつたが、その故國・その國內は、悲しい哉、餘りにも變り果てゐた。尤も、何事にも限らず、その變化の渦中にある者は往々にして案外無感覺なものであるから、この場合に於いても、最初から國內に在つた者にはそれ程の變化にも思はれなかつたかも知れない。が、その變化の經驗なくして出征し圖らずも九死に一生を得て還つた兵士、少くともヒトラーの眼には、それは餘りにも甚しい變化であり、而もそれは戦場で知つた敵の宣傳『よもやと思つてゐた敵の宣傳を正に立證する悲しいものであつた。然らば、その國內は如何に變つてゐたか?』

何よりも先づ、反戰思想、厭戰思想の瀰滿であり、而もそれが軍隊までも冒してゐたことであつた。成程、前に紹介せる所に見る如く、戦場に於いても屢々『反抗騒ぎ』はあつた。然しそれは、馬鹿な指揮官や無自覺な上官に對する忌避を意味するものであつて、國家國民の爲の戦ひそのものに反對するものではなかつた。否、戦場に於いて程、如何に金筋が多く如何に『闇下』であらうとも、馬

鹿は馬鹿、卑怯者は卑怯者として、『正確』に輕蔑され排撃されたのであつた。然るに、此處『衛戍病院の兵士の間では、この關係は殆んど逆であつた。其處では、戰爭忌避の卑怯者が幅を利かし、公然反戰的言動をなしてゐた。而も人々はこれに敢へて反對しないのみか、賛成さへしてゐた。ヒトラは、『ソナムの戦ひの泥の中から立派な建物の白いベッドの中へ』の甚しい變化に就いて語つた後に、次の如く記してゐる。

『然し、遺憾乍ら、この世界は他の點に於いてもまた新しいものがあつた。私は戰場に於いて尙ほ知ら

戰線に於ける軍隊の精神は、此處では最早何等の尊敬をも與へられなかつた。私は戰場に於いてもなかつた所のものを、此處で始めて聞かされた。自己の卑怯の誇示、これであつた。成程、戰場に於いても罵詈や「ゴツタ返し」は見られた。然しそれは決して義務の違背を求むるものでもなければ、また怯懦者を良しとするものでもなかつた。否！卑怯者は矢張り卑怯者とされ、それ以上の他の何者にも通用しなかつた。卑怯者に對する輕蔑は、眞の勇士に寄せられる嘆稱と共に、何處でも尙ほ常に正確に通用してゐた。然るに此處『衛戍病院に於いては、事態は既に或る程度まで殆んど逆であつた。恥も外聞もない下劣な野郎共が大きな口を利き、そのあさましき能辯の限りを盡して、眞面目な軍人の觀念を嘲笑し、卑怯者の節操を以つて模範的なものとなしてゐた、就中二・三人の下劣な奴等がその音頭をとつてゐた。その中の一人は、故

意に自ら鐵條網に手を入れて負傷し、以つてこの病院に來るに至つたことを自慢してゐた。彼れはその嘖ふべき負傷にも拘はらず、既にモウ長い間この病院に居る風であつた。それは全く、何か輸送上の間違ひでドイツに送られたものとしか思はれないものであつた。而もこの卑劣漢は、厚顔無恥にも、その己れの卑怯を以つて、忠實な兵士の壯烈な死にも勝る勇敢の發露とまで主張して敢へて憚らなかつた。多くの者は黙つて聽いてゐた。或る者は去つた。が、他の若干の者は合榧までも打つてゐた。

私は嘔吐を催はすやうな嫌惡を感じた。が、この煽動者は病院では何事も無く済まされてゐた。人々は一體どういふ積りであつたらうか？ その指導當局の任に在つた者は、彼れが一體何者であるかをヨク知つてゐなければならず、また知つてゐた。而も其處には何も行はれなかつたのだ。(C. 210—211)

右はベルリン近郊の戰傷軍人の病院に於ける状態であつたのだが、戰傷兵士の間には、マルクス主義の煽動がなくても、兎角反戰思想の最も早く擡頭し易いものである。蓋し戰爭の慘禍を直接最も身に泌みて感ずる者は彼等であるからである。殊にこれは、爲政者の無自覺にして、戰爭目的の國民的にハッキリしない場合に於いて不可避のものである。が、斯かる反戰傾向も、戰傷兵士の間だけならば、尙ほ悲觀するに當らぬものである。それは大戰爭には何處にも有り勝ちのものであつて、其處には尙ほ幾多の救済手段が有り得るのである。

然るに前大戰第三年目に於けるドイツに於いては、この状態は單に衛戍病院に於いてのみならず、一般家庭に於いて既に同じであつた。或ひは一般家庭に於いて既に然りであつたから、戦傷兵士の間に於いても然りであつたとも言ひ得るであらう。支那事變といふ少くとも我れにとつては未曾有の大戦五年目にして尙ほ『微動』だにせぬ我國に於いては、戦争三年目にして早くも斯くなるといふことは、多くの人々には或ひは不可解に感じられるかも知れない。それは『國情の相違』でもあらう。因が、前大戰に於けるドイツの打撃の甚大さは、その戦死者だけで二百萬を算した程であつて——因にその動員兵數は、戦後に發表された統計に據れば一千三百萬と註されてゐる（當時のドイツ人口は約六千五百萬）——到底、今日の我國の支那事變の比ではなかつたのである。

ヒトラーは病院で歩けるまでに快癒してから、許可を得てベルリンへ出て見、更にその後ミュンヘンのパウリアの補充大隊へと廻され、親しくこの南北兩ドイツの代表的都市の状態、その一般家庭の有様を見たのであつたが、その至る處、窮乏が甚しく、不平不満に充ちてゐた。『不平と不満と罵詈、我々は唯だその中に歸つて來たのであつた！』と言つてゐる。曰く、

『再びまともに歩けるやうになつた時、私は許しを得てベルリンへと行つて見た。困苦は到る處眼に見えてひどかつた。この數百萬の人口の都市は飢餓に悩んでゐた。不満は大きかつた。』

兵士達の訪ねた家といふ家は、どこもかしこも、病院と同じ調子であつた。それは全く、彼等反戦的同僚達は彼等の見解（反戦の見解）を更に一層強める爲に殊更にさうした場所を選んで訪ねたかの如き、印象を與へるものであつた。

ところが、ミュンヘン自體の状態に至つては、ヨリ遙かに、遙かに、ひどいものであつた。

私は全治して病院から解放され、ミュンヘンの補充大隊へと廻された時、私はこの町に最早見覚えのない氣がした。不平と不満と罵詈、我々は唯だその中に歸つて來たのであつた！』（G. 211）

一般家庭既に然りとすれば、新たに出征すべく徵集された兵士また然らざる筈はない。この反戦空氣は、彼れの新たに配屬された補充大隊に於いても、同じものがあつた。『逃避は恰かもヨリ大なる賢明の象徴の如くに考へられ、忠實な辛抱は實に小心と馬鹿のシルシの如く考へられてゐた』のであつた。

而してそれもこれも、結局は、當時のドイツはその根本指導思想に於いて誤つて居り、従つてまた斯かる大戦争を遂行するに適切なる國內體制を缺いてゐた爲に外ならなかつたのであるが、然しこの國內兵士の惡化に就いては、更に軍隊直接の或る特殊の事情が與かつて原因してゐた。それは、これらの兵士の『教官』として當時古くから國內原隊に留まつてゐた將校乃至下士達——謂はゆる職業軍人

達の無自覺な態度、『拙惡極まる出征兵士の取扱ひ』であつた。

ヒトラーに據れば、出征兵士には出征兵士特有の性質があつた。而してこれは戦場に出て見ればよく分るものであつた。既に前に引用せる記述の中に窺はれるが如く、戦場では、如何に上官であらうと、愚劣な奴と、無暗に威張るやうなことは許されなかつた。如何に將校であらうと部隊長であらうと、愚劣な奴は愚劣な奴、卑怯者は卑怯者として取扱はれ、無暗な命令や身勝手な行動は許されなかつた。さればこそ其處には『反抗騒ぎ』もあり、『ゴツタ返し』もあつたのであつた。兵士達は國家國民の爲に戦つてゐるのであつて、彼等ユンケル將校達の爲に戦つてゐるものではなかつたのだ。將校は單に軍隊の指導者たるものであり、指導者たる者はその指導される者よりも眞に有識有能でなければならぬと共に、率先してヨリ以上に多くの苦難に當る者でなければならなかつた。斯かる時に於いてのみ彼等は、その部下の尊敬及び服従も得、果敢な戦ひも爲し得るものであつた。

然るに、古くから國內軍隊に『教官』として留まつてゐた將校達は、未だ一度も戦場に出たことがない爲に、この事をどうしても理解しなかつた。如何に主としてユンケル出身の彼等職業軍人と雖も、國家國民の興亡に關する戦争を以つて單に彼等の功名の場所や立身出世の機會などとは、勿論考へてゐなかつたであらう。また、兵士をば何か自分達とは種類の異つた存在の如く考へても居なかつたであらう。が、彼等は育ちが育ちであり境遇が境遇である爲に、彼等とは異つて後に残された家族

の生活の保證も何もなく、唯一つ國家國民の爲に一切を擲つて應召出征した兵士達とは、種々の點に於いて自づから異なるものがあつたであらう。これが爲に兩者の間には互ひに割り切れぬものがあり、シツクリ行かないものがあつたのである。ヒトラーはこれに就いて、簡單であるが然し極めて示唆深く、次の如く語つてゐる。

『補充大隊そのものに於いても空氣は全くお話にならないものであつた。其處では尙ほ、古い教官連中に依つて、拙惡極まる出征兵士の取扱ひが行はれてゐた。彼等古い教官連中は未だ一度も戰場に出たことはなく、既にそれだけの理由からしても、古い出征兵士達とは充分シツクリ行き得ないものがあつた。實際、これらの古い出征兵士達は一種獨特の性質を持つてゐた。それは戰線に勤務して見れば分るものがあつたが、その經驗のない補充部隊の幹部達には全く不可解なものであつた。これに反して、同じく將校でも戰場から歸つて來た者は、少くともこれを理解することを知つてゐた。従つて、戰線歸りの將校そのものは自然また、兵士一般から兵站部の指揮官達などとは全く異つて尊敬されてゐた。が、斯うしたことを別にすれば一般の空氣は全くみじめなものであつた。逃避は既に恰かもヨリ大なる賢明の象徴かの如く考へられ、忠實なる辛抱は小心と馬鹿のシルシの如く考へられてゐた。諸々の官房 (Kantinen) はユダヤ人に依つて占められてゐた。書記と言へば殆んど凡てユダヤ人であり、ユダヤ人と言へば書記といふ有様であつた。私はこの選



はれたる戦士の多いのに驚いた。そして、戦線には彼等の代表者の極めて少なかつたことを思ひ合せて見ざるを得なかつた。』(S. 211)

右の最後に言つてゐる『諸々の官房(或ひは事務所)』といふのは、軍隊内のそのことなのか、それとも一般官廳や會社のそのことなのか、茲には明らかでない。若し軍隊内のそれだとすれば、ユダヤ人は大體マルクス主義者と讀まるべきであるから、マルクス主義者が既に軍隊にまで入つてゐたことになるわけであるが、いづれにしても、新たに補充部隊として出陣すべき國內軍隊が既に斯くのことであつたとすれば、事態は既に最惡に入りつゝあつたものと言ふべきであらう。戦傷兵士の反戦気分だけならば、何處にも有り勝ちのことであつて、尙ほそれほど憂ふるに足らぬものであるが、一般家庭既に然るのみならず肝腎のこれから新たに或ひは再び出陣すべき補充軍隊が斯かる有様では、その國、その戦ひは先づお終ひと言はねばならないのである。

## 五 全生産早くもユダヤ人の支配下に歸す

戦争三年目にして早くも國內が上述のやうに軍隊に至るまで反戦気分になつたに就いては、元より種々の原因があり、戦争目的が不明であつたといふことも與かつて原因してゐた。夙に述べたやう

に、ドイツはオーストリアとの同盟に引かれてウカウカと戦争に入つて行つたのであつて、最初から積極的具體的な戦争目的といふものはなく、その何處に求むるかは迂濶極まる話であるが、最後までやかましい問題であつたのである。戦争が長引き、何んとか妥協點を見出さんとすればする程、それはやかましい問題となり、遂には收拾し難き内争問題とまでなり、その内部破綻の有力な一原因とまで成つたのであつた。

が、それもこれも國內窮乏の爲と言ふべく、國內反戦化の主たる原因は、その餘りにも深刻にして且つ不公平なりし大衆の窮乏にあつたことは疑ひない。マルクス主義、自由主義は、これに乗じてその反戦目的を達したのである。然らば、當時ドイツは一體如何なる經濟状態にあつたであらうか？これに就いてはヒトラーはホンの少ししか語つてゐない。これは恐らく經濟問題は彼れの餘り得意

としない問題たるからであらう。が、彼れは、その短い論述の中にも、當時のドイツ戦時經濟の根本的缺陷、致命的弊害を遺憾なく認識指摘し、而も無限の悲憤を以つてこれを論告してゐる。資本主義の基礎の上に立てる俄か作りの統制經濟なるものは、近世資本主義國家に約十年目毎に周期的に襲來する所の經濟恐慌と同様に、必然的に群小獨立資本の破綻、大資本へのその急速なる集中を來し、却つて益々國民大衆の窮乏を促進するものであるが、ヒトラーがこのことを見落さなかつたこと、却これらをば早くも致命的災厄として認識してゐることは、流石に彼れと言ふべきであらう。當時のドイ

ツに於いては大資本家は取りも直さずユダヤ人であり、ヒトラーの負傷歸還せる戦争第三年目—四年目には、殆んど全生産、全經濟がユダヤ人の支配下に歸してゐたのであつた。而も、斯くも『ユダヤ人が全國民を搾取し、その支配下に全國民を抑壓してゐるのに、人々は「プロシア」を憎惡し』、戰爭を呪咀してゐたのであつた。彼れはこれを見て、『この時私は、既に避くるに間に合はずして遂に破滅にまで至らねばならぬ所の運命の近付けるを知り、慄然とした。』と言つてゐる。斯かる認識は、天性の *Nationalsozialist* ヒトラーにして出来ることであつて、誰れにも出来ることではないのである。彼れは、前節に紹介せる國內反戰狀態に就いて語つた後に、これに就いて次の如く語つてゐる。

『經濟に於いては事態は一層惡かつた。此處ではユダヤ人共は「無くてはならぬもの」となつてゐた。彼等吸血鬼共は國民の血をばその毛穴からゆつくりと吸ひ初めてゐた。彼等は、諸々の軍需會社を通じて、國民的自由經濟を漸次破滅せしむるの手段を見出してゐた。

其處では、無制限の「資本」集中の必要が力説されてゐた。  
斯くて一九一六年—一七年には既に、殆んど全生産がユダヤ人金融資本家階級 (*Finanzjudentum*) の支配下に在つた。

然るに、國民の反感は誰に向けられたか？

この時私は、既に避くるに間に合はずして遂に破滅にまで至らねばならぬ所の運命の近付けるを知り、慄然とした。

ユダヤ人が全國民を擡取し、その支配下に全國民を抑壓してゐるのに、人々は「プロシア」を憎惡したのであつた。戰線に於けると全く同様に、國內に於いても、この惡宣傳に對して上からは何も行はれなかつた。人々は、プロシアの崩壊は決してパウリアの興隆を齎らすものではないといふこと、否、寧ろ反對に、そのいづれでも一度倒れれば、他方もまたそれと共に奈落の底に沈まねばならぬといふことを、全く氣付かぬ如くであつた。

このことは私には限りなく悲しいものであつた。私はその中にただ、ユダヤ人の天才的なトリックを見出し得るのみであつた。それは、一般の注意を己れから外らして他に向けしむる策略であつたのだ。パウリア人とプロシア人とが争つてゐる間に、ユダヤ人は兩者の鼻の下の存在（ヒゲ）を引抜いたのであつた。パウリアに於いてプロシアを罵倒してゐる間に、ユダヤ人は革命を組織し、プロシアもパウリアも共に倒したのだ（S. 211—212）

殆んど全生産、全經濟のユダヤ人金融資本支配下への集中——これが戦争第三年目にヒトラーの圖らずも負傷歸還して見たる故國の經濟狀態であつた。然らば、前大戰にドイツは、一體、如何なる戰時經濟政策を追求して、斯かる結果に陥つたのであらうか？ その根本に於いて資本主義的なもので

あつたこと、斯かる結果も結局その爲であつたことは、私の前にも言及せる所であり改めて説くまでもない所であるが、具體的には一體どんなことをしてゐたのであらうか？これに就いてヒトラーは何等立ち入つて記してゐない。斯かることは、『マイン・カンフ』の對象とするドイツ人には自明のことゝされてゐるのであらう。が、我國に於いてはそれは人々の知らんと欲する所でなければならず、また謂はゆる他山の石として我々の顧みる必要のあることである。一言にして言へば、當時ドイツは丁度今日の我國に於けるが如き戰時統制經濟を事としてゐたのであつた。そして遂にダメだつたのである。私は今これを詳しく研究紹介するの暇も自由も有しないが、参考の爲にその大略を紹介すれば次の如くである。

ドイツは、前にも言へるが如く豫期することなくして戰爭に入つたのであつたが、それにも拘はらず、軍事的に極めて迅速且つ圓滑に動員し行動したと同様に、經濟的にも直ちに必要な統制に着手し、パン及びパン用穀物の最高價格を公定し、且つその消費乃至使用を制限したのを始めとして（一九一四年）、次から次へとその經濟統制を擴張且つ強化し、戰爭勃發の約一年後には、その國民經濟の殆んど全分野に統制を及ぼしてゐた。重要生活必需品、重要工業原料品の殆んど凡てに互つて公定價格を施行し、その消費乃至使用の割當制限を行ふ一方、帝國穀物管理局、帝國原料配給局等の特設して、その政策實行の萬全を期した（一九一五年）。穀物管理はそれだけでは間に合はずして、更に殆ん

と全食糧の管理にまで發展し、更に後には帝國被服局なるものが設置されて被服類の管理配給まで行つた。その間に種々の必要物資の徵發乃至強制買上げの行はれたことは言ふまでもない。ただ住宅だけは國家の管理にも配給にも附せられず、宏壯な貴族や富豪の邸宅に對しても最後まで徵發も動員も行はれなかつたらしい。

兎に角斯様にドイツは、衣食住の中の住を除く殆んど全分野に互つて戰時統制を行ひ、常に戰爭能力の確保のみならず戰爭下國民生活の確保に努めたのであつた。この前大戰に於けるドイツの企圖は、屢々『戰時社會主義 (Kriegssozialismus)』とまで稱せられるものである。それは畢竟するに一つの『社會主義』が始めて提唱した所のものであるのである。が、この『社會主義』、この統制經濟は、何等かの眞實の社會主義例へば今日のナチズムの如く、善かれ悪しかれ、非統制的『非計畫的』も甚しく『經濟無政府主義』とまで稱せられる所の資本主義を豫め非とし、本來國家國民は斯くあらざるべからずといふ一定の信念や指導思想が有つて、其上に行はれたものではなくして、全く一時の便宜主義に出づるものであつた。即ち、戰爭勃發と共にパンが暴騰せんとしたので慌て、パン價格を公定し、パンを公定しただけでは間に合はずして次から次へと殆んど全商品・全資材の價格を公定し、價格を公定しただけでは『祕密なる取引』その他の矛盾弊害が百出し、何處にも間に合はぬので、更

にその配結・消費・生産までも統制するに至つたのであつて、全く戦争遂行上の必要に迫られて已むなく行はれたものであつた。如何に當時ドイツが單に必要に迫られて已むなく斯かる政策を追求したかは、戦争當初同國藏相にしてその後内相兼副宰相とまでなりし、この政策の最も輝やける指導者カール・ヘルフェリヒ自身が、後にその回顧録の中に明らかにしてゐる所である。彼れは前記の穀物管理局や有名な國立窒素工場の創設者であつたのだが、彼れ自身は内心では矢張り自由主義經濟、資本主義經濟を善しとしてゐたのである。

斯様に前大戰に於けるドイツの統制經濟は、既にその出發點に於いて單なる便宜主義を出でないものであつたので、その遂行に於いてもまた全く便宜主義たらざるを得なかつた。而して單なる便宜主義よりすれば、ヒトラーの言つてゐるが如く『ユダヤ人が無くてはならぬもの』となるのは當然であり、これに謂はゆる重點が置かれなければならなかつた。何故ならば、當時のドイツの大經營は殆んどユダヤ資本の支配する所であり、これに依存することなしには謂はゆる戦争の完遂は期し得られなかつたからである。斯くて諸企業諸資本の合同統一即ち『集中』は、ユダヤ資本への合同統一集中となり、『一九一六年—一七年には殆んど全生産はユダヤ人金融資本家階級の支配下』に置かれることになつたのである。『重點主義』にも種々あり得るが、單なる便宜主義からする重點主義よりすれば、その場合、小企業や小資本はどうならうが棄てゝ顧みられず、それが如何に多くの人々を困惑に

陥れ恐ろしい結果を來すかも知慮されないのである。前大戰に於けるドイツは正にそれであつて、その結果は益々大なる大衆の窮乏を招來し、遂に敗戦・崩壊といふ最惡の結果を以つて酬ひられねばならなかつたのだ。

## 六 再度の出陣と一九一七年のドイツ内外情勢

ヒトラーはこの國內のぶざまを見るに忍びなかつた。殊に、『ユダヤ人が全國民を搾取し抑壓し』てゐたのに、人々はプロシア軍國主義を呪ひ戦争を呪つてゐたことは、彼れには耐へられざるものであつた。そこで彼れは、再び故國を見ざるの悲痛な覺悟で戦線への歸還を志願し、翌一九一七年三月再び戦線の原隊へと歸つたのであつた。恐らく彼れにあつては、斯かる故國を見るよりは、死んだ方が勝しであつたのであらう。彼れは次の如く語つてゐる。

『私は、この同じドイツ種族間の呪はれたる争ひを見るに耐へなかつた。私は再び戦線に歸ることを欲した。そこで私は、ミュンヘンに着くや否や、早速改めて戦線への歸還を志願して出た。

一九一七年三月の始め、斯くて私は再び戦場の私の聯隊に歸つた。』(S. 212)



斯様にしてヒトラーは、國內滞在半年足らずで一九一七年即ち戰爭第四年目の三月再び戰場へと歸つたのであつたが、この時はドイツは國內的にも國外的にも益々困難を加へて來てゐた。

ドイツは前年一九一六年末、東部戰線に於いて約三ヶ月の戰鬪の後に、西部戰線より廻送せる四個軍團の來援に依つて、新たに參戰せるルーマニアを破り、その首都ブカレストを占領したるを機會として、中立國を経て聯合國側に和平を提起し百方媾和に努めたのであつたが、聯合國側は頑として應じなかつた。敵はドイツをば徹底的に倒さずんば已まざるの意志なることは今や明らかであつた。そこで一九一七年早々ドイツ側も意を決して、これまで種々の事情の爲に、殊にアメリカの憤激を恐れて、決しかねてゐた例の無制限潜水艦戰を遂行するに決定し、同年二月一日これを各國に通告した。無制限潜水艦戰といふのは、敵國に出入する船舶は武裝すると否とに拘はらず悉くこれを撃沈するといふのであつて、これに依つて何よりも先づイギリスを逆封鎖し、以つてその死命を制せんとせるものであつた。當時のドイツ參謀本部の見解に據れば、敵が夙に國際法に反してドイツに對して商業封鎖、飢餓封鎖を以つて臨んでゐる今日、ドイツのみがこれを躊躇すべき理由はなく、且つそのみが能くイギリスに對して有效な打撃を與へ得るといふのであつた。が、この無制限潜水艦戰の開始の結果は、その憂慮された通り、アメリカをして急速に參戰に至らしめたのであつた。同年四月、アメリカは遂にドイツに對して宣戰し、その全能力を擧げてドイツ征服戰爭に現れて來た。そのヨーロ

ツバ戰場に送れる陸上兵力だけでも、前後及び各地を合せて二百萬と註されてゐる。これがドイツ側にとつて一大脅威であつたことは言ふまでもなからう。さらでだに、豫想に反して長期戦を餘儀なくされてゐたドイツは、これに依つて近く戦争を解決するの見込みを全く失つたかの如くであつた。

ヒトラーは、右の當時の情勢に就いては何等書いてゐないが、丁度この騒ぎの眞つ際に、故國に裏切られた氣持ちを以つて再び戦線に歸つたのである。

この時は尙ほベートマン・ホルヴェーク内閣がその任にあつたが、ヒトラーが戦線に歸り、アメリカが参戦してから（一九一七年三月・四月）國內は殊に急速に暗影を増して行つた。尙ほ小規模なものではあつたが、諸所に勞働罷業や食糧暴動を見るに至つた。最初から戦争に反對であつたカール・リプクネヒトやローザ・ルクセンブルグ等の最左翼マルクス主義の一團は、後にドイツ共產黨にまで發展しその前身を成した所のスバルタクス團を結成し、ゼネラルストライキに依る戦争の即時中止、勞働者・農民・兵士に依る政權の掌握等を主張宣傳してゐた。戦争勃發と共に『轉向』し、愛國の『隠れ義』をまつて『戦争鼓舞』と出掛けてゐた轉向マルクス主義者まで——因に一旦マルクス主義者たりし者には絶対に油斷してはならない——何時の間にか再轉向して、公然街頭に出て勞働者の反戦煽動に努めてゐた。勞働過重と榮養不良とに悩まされてゐた生産大衆が、如何にこの煽動に乗り易かつたかは容易に想像されるであらう。政府はこの情勢に驚き、同年四月、『戦時狀態の許す限

りに於いて國內の政治的經濟的社會的生活を調整する』の勅令を發布し、階級選舉法の改正を約束したり戒嚴狀態を緩和したりしたのであつたが、斯かる事では最早何處にも間に合はなかつた。

純軍事的にも重大な困難に當面してゐた。ドイツは、全く長期戰を豫想せずウカ／＼と戰爭に入つた爲に、戰爭の途次幾度か武器殊に彈藥の不足を來し、既に一九一四年の最初の總攻撃の直後にも重大な彈藥危機に當面したのであつたが、一九一六年のヴェルダン戰に次ぐソンム戰、ルーマニア戰の頃から、再び彈藥の大缺乏を來し、西部戰線に於いても東部戰線に於いてもドイツ軍は動きがとれなくなつてゐた。同年八月ソンム戰の際中、東部戰線指揮官より拔擢されて全軍の參謀總長及び次長に就任したヒンデンブルグとルーデンドルフとは、この狀態に慌てゝ、國內軍需生産能力及び軍需生産と全生産との關係をも顧みず、ただこの作戰上の危機を匡正せんとして、政府及び産業に對してその生産能力を超えた彈藥の緊急生産補充を要求し、これが爲に『滿十五歳より六十歳に至る全ドイツ男子及び女子に勞役義務を課する』所の『補助勤務法案』なるものを提案しその實施を要求した。これは『ヒンデンブルグ案』と稱され、一名又『絶望案』と稱されるものであり、これが爲にさらでだに圓滿を缺いてゐた政府と軍部とは益々深刻な對立に陥るに至つたのであつたが、彈藥不足はそれ程にまで深刻に達してゐたのである。この案は同年十二月、軍部の壓力に依つて、遂に承認され施行された。が、その結果は、一九一七年中頃に至つても、所期の如く彈藥の増産を來すことにならなかつた。

計りでなく、他の生産部門に破壊的な影響を及ぼし、益々國民大衆の窮乏を來し、軍はただ軍の都合のみを考へるものとして、國民怨嗟の對象とされたのであつた。實際この時は、種々の配給の點に於いては、戦線よりも國內一般家庭の方が窮乏が甚しく、負傷歸還や賜暇歸休の兵士達は逆に戦線から卯の入つたビスケットやソーセージを持ち歸つて、却つてその家庭を喜び驚かすといふ有様であつたのである。

斯くて一九一七年の中頃に及んだのであつたが、斯かる内外情勢の下に、同年七月、ドイツ内外に一大衝動を與へたのは、當時のドイツ政界の惑星的要人『中央黨代議士エルツベルガー』の議會に於ける講和要求演説であつた。彼れは元來熱烈な戦争主張者であり、獨逸兩國政府要人の間に立つて重要な役割を演じてゐた人物であつたが、上述の如き内外情勢を見るに至つて、戦争は最早勝利の見込みなく、今は最早講和するの外なしとなし、その意味の演説を公然議會に於いて爲したのであつた。この演説は不穩なものとして議會に於いては直ちに處罰訂正された。が、その國內人心に及ぼした影響は甚大なものであつた。さらでなに戦争の長期化に勝利の自信を失つてゐたドイツ上下は、これが爲に名狀すべからざる混亂動搖に陥つた。ドイツに於いては、謂はゆるシリーフエン作戦で有名な大戦前のドイツ參謀總長シリーフエンよりして既に、近代戦には長期化は有り得ないものと公言して居り、多くの人々また左様に信じてゐたので、それだけ大戦の長期化の影響、その失望は甚大なものが

あつた。然るに其處へ以つて來て、眞向からこれを表明したエルツベルガーの演説が行はれたのであらう。エルツベルガーが最初から戦争反對者であつたならば、それ程の大した影響はなかつたであらう。が、彼れはその逆の人物であり、而も獨逸兩國要人の間に在つてその機密に與つてゐると思はれてゐた重要人物であつたのである。

このエルツベルガーの演説は、後にその眞相として傳へられる一説に據れば、ドイツに和平機運を促進して共に和平に至らんとせる當時のオーストリア政府の意向及び依頼に基づくものであつたと言はれるが、その眞偽の程は保證の限りではない。いづれにしても、このエルツベルガーの演説だけなら未だ宜かつた。然るにこれをキツカケに、ベートマン政府と軍部との對立が表面化し、同じく同年七月、ベートマン政府の辭職を見るに至つたのであつた。ヒンデンブルグとルーデンドルフとは、それもこれもベートマン政府の自由主義的な不徹底な方針の爲なりとし、斯かることでは軍は戦争の完遂を期し難しとして、強硬にその責任を追求したのである。そしてミヒャエリスなる毒にも藥にもならぬ人物が、代つて宰相の任に就いたのであつた。而してこれは僅か四ヶ月にして退き、新たにまたヘルトリング伯なる人物が任命されて内閣を組織したのであつたが、斯かる頻繁なる政府の更迭は國內民心をして益々不安動搖に陥れ、勝利の希望を失はしめ、敵をして益々戰意を強うせしめるのみであつた。

これが、ヒトラーが再び戦線に歸還せる一九一七年の春から秋にかけてのドイツの状態であつた。その状態たるや内外共に正にただ暗澹の一語に盡きるものであつた。然るに茲に、一九一七年の末、秋から冬に掛けて、ドイツにとつて正に回天の幸運が到来したのであつた。それは東部に於けるロシアの崩壊であり、西南部に於けるイタリーの敗退であつた。

## 七 ロシアの崩壊——ドイツの最後の總攻撃準備

ロシアに於いては、これよりさき問題の一九一七年の三月、既に帝政の崩壊を見てゐた。ニコラス二世は、彼れの宮廷に多年『複雑怪奇』なる勢力を振つてゐた愛臣ラスプーチンの暗殺されしを機として急速に發展せる國內騷擾化の爲に、退位を餘儀なくされたのであつた。然しこの帝政の崩壊は、何等ロシアの戦争からの離脱を意味するものではなく、寧ろ反對に、自由主義的民主主義的英佛を始めとする聯合諸國と飽くまで歩調を一にして、ヨリ強力・ヨリ效果的に戦はんが爲であつた。斯かる爲には、『封建的専制の標本』の如くであり、種々の『複雑怪奇』な内部事情を有せるロマノフ王朝は、最早國民結合の中心、國家の統率者として不適當とされたのである。帝政崩壊後も戦争は依然として續けられてゐた。

が、この帝政の崩壊を端緒としてロシアは、内部的に、收拾すべからざる混亂と動搖に陥つて行

つた。茲にはその詳述の暇を有しないが、幾多の急速な變轉を経た後、最後には、完全に自由主義的民主主義的な『社會革命黨』のケレンスキー一派の政府が成立し、辛うじてその戦争を維持するに至つた。が、ロシアの内部事情、その歴代支配階級の罪惡と戦争に因る當時の彌や益す國內窮乏とは、この國をしてケレンスキー一派の單なる自由主義的民主主義的革命的革命に止まるを許さなかつた。同年十一月、この混亂動搖の中に、即時無併合無賠償媾和を標榜せる同國マルクス主義左派『レーニン一派』の謂はゆるボルシェヴィキが、『勞働者・農民・兵士』を味方として、遂にケレンスキー政府を倒し、新政權を樹立した。そして國內反對派に對して掃蕩戰を遂行する一方、直ちにドイツとの間に單獨媾和の交渉に入つたのであつた。ロシアは今や對外戰から轉じて國內戰へと入つたのである。レーニン一派からすれば、それもこれも、彼等のマルクス主義の理想、世界革命の理想を實現の爲の『戰略戰術』に過ぎなかつたであらう。が、ドイツ側からすればそれは、ロシアは正に力竭きてドイツの軍門に降れるものであつた。この時東部戰線は、既にルーマニアは潰えて、北はバルチック海リガ灣からロシア領深く經て南は黒海にまで達してゐたのであつたが、ドイツは今やその東部戰線から解放されたのであつた。これが全戰局に如何なる意義を有するかは何人も想像に難くはないであらう。聯合諸國は色を失ひ、ドイツ側陣營には期せずして凱歌が轟き上つた。

右は一九一七年末に於けるロシアの崩壞の意義及び影響であるが、ヒトラーに據れば、このロシア

の崩壊に勝るとも劣らざる影響をドイツ側に齎らせるものに、更に、殆んど時を同じうして起れるイタリアの一大敗退があつた。イタリアはその一九一五年五月の参戦以來、聯合國側の有力な一環として、西部戦線の最南端、南部バルカン戦線の最西端を形成し、執拗にオーストリア領に向けて攻撃を加へてゐた。舊奥伊國境イブンツ河を繞る戦ひは謂はゆるイブンツ戦線が即ちそれであつた。然るに一九一七年十月末、獨逸同盟軍はこれに對して一大反撃を加へ、忽ちにしてイタリア領深イタリ平原にまで攻め入つた。イタリア軍は算を亂して敗走し、再び起ち能はざるかと思はれる打撃を受けた。この時にはバルカン戦線は、セルビア、モンテネグロは既に潰えて、ドイツ側はそのアが残るのみであつた。従つてこの時に於ける新たなイタリアの敗退は——それは全的崩壊にまで至らずして喰ひ止められたのであつたが——獨逸包圍陣の重要な一角の破綻として正に重大な影響を持つものでなければならなかつた。一般大戦史書はこれをば餘り重要視してゐないやうであるが、ヒトラーはこれを極めて重大視して、『この勝利の中に今や、ロシア戦線の如何を離れても、敵をば撃破し得る可能性の證左が見出されたのであつた。』と語つてゐる。

これを要するにドイツは、その四年に亙る苦戦の後に、一九一七年末に至つて、圖らずもその苦闘酬ひられ、ロシアの崩壊及びイタリアの敗退といふ一の二重の幸運に恵まれたのである。而もそれ



は、内に於いては窮乏その極に達し、反戦運動の熾烈化し、外に於いては遂にアメリカまでも参戦し、殆んど全世界を完全に敵とするに至つた最悪の時であつた。その時に於いてロシアとイタリーが挫折し、二大敵陣が遂に崩壊したのである。今や残るは殆んど對英佛西部戦線のみとなつた。これが四ヶ年に亙る苦闘を續けて來てゐたドイツ軍隊に如何に重大な影響を齎したかは、敢へて説明を要しないであらう。全軍は新たな期待と勇氣に振ひ立ち、戦線には再び歌が流れ出した。兵士達は、『今度こそは戦争はドイツの勝利を以つて終るであらうといふ確信』を以つて、一九一八年の春『當然來るべき最後の總攻撃の春を待つたのであつた。ヒトラーは次の如く記してゐる。

『一九一七年の終り頃に至つて、ドイツ軍の士氣の沮喪はその根本から克服されたやうに思はれた。ロシアの崩壊後、全軍は再び新たな期待と新たな勇氣に振ひ立つた。今度こそは戦争はドイツの勝利を以つて終るであらうといふ確信が、益々軍隊を風靡し出した。再び歌が聞えるやうになつた。不吉な噂は殆んど聞かれなくなつた。人々は再び祖國を信ずるに至つた。

殊に一九一七年秋のイタリーの崩壊は、驚くべき絶大な影響を及ぼした。實にこの勝利の中に今や、ロシア戦線の如何を離れても、敵を撃破し得る可能性の證左が見出されたのであつた。大なる信念が今や再び幾百萬の人々の心の中に流れ出した。そして彼等をして、安心した確信を以つて、一九一八年の春を待たしめ

たのであつた。これに反して敵は、眼に見えて意氣沮喪して行つた。この冬はいつもより静かなるものがつた。それは嵐の前の静けさであつた。』(C. 213)

然り、それは正に『嵐の前の静けさ』であつた。此時ドイツ軍は、その『久しきに互る戦ひを決定的に終止せしむべく最後の準備』最後の總攻撃の準備に掛つてゐたのである。

當時ドイツは、内部的には、右の輝やく勝利の絶好の機会にも拘はらず、政府と軍部と議會とが、彌や益す國民大衆の窮乏の上に、依然として、否益々、三つ巴になつて争つてゐた。ミヒヤエリス内閣はヘルトリング内閣に變つてゐた。軍隊に於いても、海軍には既に水兵の反戦罷業陰謀まで現れて來てゐた。が、『沈着』なヒンデンブルグと『短氣』なルーデンドルフの參謀本部は、その凡てを押し切つて最後の決戦を準備し、既に敵の崩壊せる東部戦線その他から西部戦線に向けて、兵士と武器とを續々輸送してゐたのであつた。蓋し、これまで東部・南部・西部の三方に敵を受けて、尙ほ能くこれを諸所に撃破して來たのに、既にその二方の敵の殆んど崩壊せる時に於いて、その残れる一方の敵を倒し得ない理由は何處にあらうか！これが、ヒンデンブルグ、ルーデンドルフを始めとするドイツ軍部及び全ドイツ・ナシヨナリストの考へであつたのだ。ロシア・ボルシエヴィキ革命に依つて、ロシアの對獨戦陣は崩壊したが、然し同時にそれに依つて國內の敵マルクス主義革命勢力は却つて

飛躍的に強化されたことをば、エライとか言つても元來がユンケル出身の單なる謂はゆる將軍に過ぎなかつたヒンデンブルグには元より、後にミューンヘンの『ヒトラー革命』（一九二三年）にまで参加した『革新家』ルーデンドルフにも、元より思ひ及ばう筈はなかつたのである。事實また、右の國內事情さへ別とすれば、此處でドイツは勝てない筈はなかつたのだ。つい先頃まで『勝利の絶望』を説き媾和を要求してゐた者も、その善意なる者は、この新たな情勢の出現にその敗戦の確信を失ひ、今や沈黙を餘儀なくされてゐた。

これに反して、敵聯合國側の周章狼狽・士氣沮喪は眼に見えて甚しいものであつた。彼等には、東部戦線に於いてドイツは如何に果敢且つ巧妙に戦はうとも、『巨人ロシア』の前には結局『血を吐いて倒れる』ものと考へられてゐた。事實はまたこれを立證するやうに思はれた。タンネンベルグに於けるヒンデンブルグ否ルーデンドルフ作戦の輝やける勝利も、それはただ巧妙な作戦の一例となつただけで、少しも巨人ロシアをへこますことにはならなかつた。世界は、西部に於いても東部に於いても、ドイツの敗北はただ時期の問題と考へてゐた。然るにそのドイツが今や、東部に於いてその巨

敵を倒して、西部にその力を集中して來たのである。

ロンドン及びパリには慌しく會議に會議が續けられ、西部戦線の敵は北はフランダースから南は南チ

ロールにまで掛けて恐怖におびえてゐた。ヒトラーはこの時の情勢を敘して次の如く記してゐる。

『一九一七年から一八八年に掛けての冬、聯合國側の室には俄かに暗雲が高まつて來た。約四年の久しきに亘つて彼等はドイツ軍を攻めて掛つたが、これを破ることが出来なかつた。ドイツは、或ひは東に於いて、或ひは南に於いて、攻撃の劍を振はねばならなかつた間は、彼れの西部に於いて取り得たものは唯だ防禦の楯のみであつた。然るに今や、その後方の巨敵は空しくなつたのである。血は河と流れて、ドイツは遂にその敵の一方を決定的に倒すことが出来たのである。斯くて今や西方に於いて、楯に劍が來たり加はらねばならなかつた。敵は、これまでもドイツの防衛を破ることが出来なかつたのに、今やそれ自身攻撃に曝されねばならなかつた。

人々〔敵〕は攻撃を恐れ、勝利を憂へた。

ロンドン及びパリでは會議に會議が續いた。敵はその宣傳さへも困難とされて來た。ドイツの勝利の見込みなきことを立證することは最早容易のことではなかつた。

同じことは實に、假睡の沈黙に襲はれてゐた戦線に於ける聯合軍そのものにも見られた。これまで威張つてゐた連中は俄かにその横柄さを失つて行つた。彼等にも今や次第に無氣味な影が射し始めた。ドイツ兵士に對する彼等の内心の考へは今や變つて來た。これ迄は彼等にとつてはドイツ兵士は、所詮負けるものに定まつてゐる一の全くの馬鹿者にしか見えなかつた。然るにそのドイツ兵士は今や、ロシアといふ彼等の友軍の撃滅者として彼等の前に立つに至つたのである。必要に餘儀なくされたものであつた東部に於ける曾つて

のドイツの攻撃の制限も、今や、その巧妙なる戦略と思はれた。過去三年の間この東部のドイツ軍はロシアを攻めて掛つたのであつたが、始めの間は少しもその効果が見えなかつた。人々はこれを殆んど無益の業として笑つた。蓋し、その人間に於いて壓倒的多數を占むる巨人ロシアは、必ずや結局勝利者たるに相違なく、ドイツは血を吐いて倒れるであらうといふのであつた。而して事實はまたこの期待を立證するやうに見えた。

一九一四年九月、タンネンベルグの戦ひから無數のロシアの捕虜が、道路や鐵道を通じて、ドイツに向つて送り込まれて以來、ロシアの捕虜の行列は殆んどその止まる所を知らなかつた。然しロシア側では、その敗北し撃滅されたる軍隊に代つて、次から次へとまた絶えず新しい軍隊を繰り出して來た。この巨人國は、無盡藏にツアーに絶えず新たな兵士を與へ、戰爭に新たな犠牲を與へたのであつた。ドイツは何處まで能くその競争を續け得るか？ ドイツがその最後の力を傾けた勝利の後に、ロシアには尙ほその取つて置ききの軍隊が残つて居て最後の決戦に出るであらう日が、他日必然的に來はしないか？ その時にはどうなるか？ 一般の考へに據れば、ロシアの勝利は成るほど永引くではあらうが、然し必ずや來るであらうといふのであつた。

然るに今やその一切の期待は終つたのだ。共同の利害の祭壇に最大の犠牲を捧げた所のこの聯合國の一つは、遂にその力盡きて、その峻嚴なる攻撃者の前に倒れたのである。これまで盲信して來た聯合軍の兵士達の心の中には、今や恐怖と戰慄とが忍び込んで來た。人々は來るべき春を怖れた。蓋し、西部戰線にはその

兵力の一部しか向けることの出来なかつた所のドイツ軍を、今までさへも破ることの出来なかつたのに、今やその無氣味な強勇國の全力を擧げてその西部に攻撃を集中せんとしてゐると思はれる時に於いて、如何にして能くこれに勝利を期待し得やうか？

南ナロル（イタリ―戦線）の山々の影は幻想におびえてゐた。敗れたカドルナの軍隊（聯合國側軍隊）はフランダー（西部戦線最北端）の霧の奥深くにその憂鬱な顔を隠してゐた。敵の勝利の確信は來るべき敗北の恐怖の前に消え失せてゐた。（S. 215—216）

## 八 總罷業の勃發——ドイツは革命の前に在り！

右が一九一七年から一八年即ち戦争第四年から最後の第五年に掛けての冬、ドイツの最後の總攻撃開始直前の状態であつた。畢竟するに、この時ドイツは正に必勝の氣に燃え且つその機運に恵まれ、聯合國側は少くとも戦線に關する限り正に決定的敗戦の危機に在つたのであつた。世界は無氣味な沈黙の中に片唾を呑んでゐた。

然るにその時、正にその時、ドイツにはマルクス主義者の指導に依る一大總罷業、聯合國側宣傳の謂はゆる『革命』が勃發したのであつた。ルーデンドルフの言葉を以つてすれば、ドイツはその外敵に對して最後の打撃を與へんとした瞬間に、その國內の敵に依つて『背後から七首を以つて刺され

た』のであつた。これに就いてヒトラーは次の如く記してゐる。

『その時——冷い夜々の中からドイツ軍突撃軍の近づく規則正しい歩調が聞えるやうに思はれ、人々〔敵〕は居堪らぬ憂慮の中に愈々來るべき審判に直面せしめられた時、その時、突如としてドイツ國內から眞紅の光が燃え上つて、敵陣の最後の榴彈砲の砲口深くまでも照したのであつた。ドイツ軍諸師團が大攻撃の最後の訓練を受けたその瞬間に、我がドイツにはゼネラルストライキ〔總罷業〕が勃發したので。』(Z. 216)

『戦線では實に、その久しきに互る戦ひを決定的に終止せしむべく最後の準備に掛り、西部戦線に對して兵士と武器とが續々輸送され、軍隊は大攻撃の訓練にいそしんでゐた時に、ドイツには、この全戦争の最大の反逆が起つたのだ。

ドイツは勝たう筈はなかつた。將に勝利はドイツの手に歸すべく迫つた瞬間に、そのドイツの春の攻撃を萌芽の中に一擧に窒息せしめ、ドイツの勝利を不可能ならしむべく、適切と思はれる手段が行はれたのだ。

軍需品ストライキ (Munitionstreik) が行はれたのだ。

このストライキが成功した時には、ドイツの戦線は崩壊しなければならなかつた。そして、今度は最早勝利はドイツの手に歸し得ないであらうと言へる「フオルグエルツ」紙(ドイツ社會民主黨の中央機關紙)の希望が達せられねばならなかつた。ドイツの戦線は、彈藥の不足の爲に、數週の間で破綻せねばならなかつ

た。斯くてドイツの攻撃は阻止され、聯合國は救はれ、而してそれと共に實に、國際資本がドイツの支配者となり、マルクス主義の國民欺瞞の内部目的は達せらるべきであつた。』(S. 213—214)

右にヒトラーの言つてゐる『ゼネラルストライキ』、『軍需品ストライキ』といふのは、ドイツの最後の總攻撃企圖の直前であつたと言ふから——因に、ドイツの最後の總攻撃は一九一八年三月に開始されたのであつた——恐らく一九一八年一月のそれを指してゐるものと思はれる。この時の罷業は殆んど全國主要都市、全軍需工場に亘り、その參加人員は百萬を超えたと思はれる。この時の罷業は殆どとしては正に前古未有のものであつた。而もそれは、社會民主黨及びドイツ労働組合總同盟内の左翼マルクス主義者の指導の下に行はれ、公然戦争に反對してその中止を要求し、その爲に先づ武器彈藥を缺乏せしむるを以つて直接目的としたものであつて、ストライキと言ふよりも、革命乃至反亂に近いものであつたのである。

尤も、このストライキは完全に成功したのではなかつた。これが完全に成功すれば、ドイツは茲で直ちに休戦に入ると共に内部革命を見てゐなければならなかつたのであるが、その首謀者は直ちに檢舉され、ストライキは間もなく鎮壓されたのであつた。が、戦争下に於いてその參加人員百萬にも上る軍需工場のストライキと言へば、當時のドイツ人口關係から言つて殆ど全ドイツ國民大衆の意志表



示と言つて宜く、場合が場合、性質が性質だけに、その影響は殆んど止まる所を知らなかつた。

第一に、戦線のドイツ軍隊はこれが爲にすつかり、士氣沮喪したのであつた。軍隊は國家國民の爲に戦ふものであり、既に四年も前から唯だその爲に凡ゆる艱苦を冒して戦つてゐたのであつた。然るに今やその國內國民は、戦争に反對してストライキを起したのである。軍隊は一體何んの爲に戦ふか、彼等は今やその闘争の目的を失つたのであつた。

第二に、敵はこれに依つて急に生氣付けられ、その闘争力を無限に増大すると共に、戰略的に完全に有利な立場に立つたのであつた。聯合國側は今やただ、その得意の宣傳に依つて、ドイツのこの崩壊情勢を促進さへすれば宜く、聯合軍は戦線に於いて唯だドイツの攻撃を適當に支へてさへ居れば宜かつた。實際、この總罷業をキツカケとして、その後ドイツは急速に革命的狀態に入つて行き、遂に

同年十一月には正式の革命とまでなつたのである。

ヒトラーはこの時の關係を叙して次の如く言つてゐる。

『尤もこの軍需品ストライキは、戦線に武器を缺乏せしむるといふ點に於いては、その所期の最後の効果を達しなかつた。ストライキは機を逸せすして鎮壓された。これが爲に、軍需品の缺乏そのものは、その計畫してゐたやうに、軍隊を破滅にまで至らせはしなかつた。然し、これが爲に來たされた精神的打撃たる

や、如何に恐ろしいものであつたか！

第一に、故國でさへも何等勝利を欲してゐないのに、軍隊は一體何んの爲に尙ほも戦ふのであるか？ この絶大なる犠牲と忍苦とはそも／＼誰れの爲か？ 兵士は勝利の爲に戦つてゐるのに、故國ではこれに對してストライキを行つてゐるのだ！

第二に、敵に對する影響はどうであつたか？……

最初の程は世界は無言であつた。が、それから十二時間の間に、敵の宣傳は息を吹き返してこの佑けに飛び付いて來た。今や一舉にして、聯合軍兵士の無くなり掛けてゐた確信を再び振起し、勝利の見込みを新たに確實なものに信ぜしめ、來たるべき災厄に對する居堪らぬ憂慮を斷乎たる自信にまで變化せしむべき手段が見出されたのであつた。今や人々〔敵〕は、凡ゆる時代中の最大の戦闘に於いて、ドイツの攻撃を待つてゐる諸聯隊に對して次の確信を傳へれば宜かつた。この戦争の最後を決定するものは、ドイツ軍の嵐の如き突撃の果敢ではなくして、聯合軍の防衛の忍耐であるといふこと、これである。實際今や、ドイツ軍はその欲するがまゝに勝利を獲たとしても、その故國に凱歌を擧げるものは革命であつて、勝利の軍隊ではなかつたのである。

イギリス、フランス、アメリカの諸新聞は、この考へをその讀者の心の中に植え付け始めた。と共に、斯かる一方、限りなく巧妙なる宣傳を以つて戦線の軍隊を奮起せしめた。

「ドイツは革命の前に在り！ 聯合國の勝利は必至なり！」と。これは、よろめいてゐたボール（佛兵

の仇名」やトンミイ〔英兵の仇名〕を奮ひ立たせるには最良の藥であつた。小銃と機關銃とは今や再び發射されることが出來た。お先眞暗の恐怖からする逃走に代つて、希望に充ちた抵抗が現れて來た。

これが軍需品ストライキの結果であつた。それは敵國民の勝利の確信を強め、戦線の聯合軍の絶望的萎縮を取除いたのであつた。而してその後間もなく、幾多のドイツの兵士はこれをばその血を以つて購はねはななかつたのである。而もこの惡逆極まる兇行の張本人共は、革命ドイツの最高の地位者を以つて期待されたのであつた。

ドイツ側に於いては、この事件の顯著な影響をば差し當り能く抑へ得たかの風であつた。が、敵の側に於いては、その效果は停止する所を知らなかつた。敵の抗戦は、その萬事休せる軍隊の絶望狀態を去つて、代りに勝利を期する戦ひの果敢さを示して來た。

斯くて人々の推測に據れば、西部戦線はドイツの攻撃に僅か數ヶ月耐へさへすれば、勝利は必然的に聯合國のものたるべきであつた。聯合國の諸議會は、この將來の可能性を認めて、そのドイツ粉碎のプロバガンダを續ける爲に未曾有の資金を可決したのであつた。『(デヒター・ギト)』

『ドイツは革命の前に在り！ 聯合國の勝利は必至なり！』——これが問題の總罷業の與へた結論であつた。事實戦争はその通りに行つたのである。ドイツは罷業をば兎にも角にも直ちに鎮壓し得たのであつたが、然し國民大衆の不滿をば最早抑ふことは出來なかつた。當時ドイツ議會は、自由主

義的諸黨及びマルクス主義黨が——因に、當時ドイツ社會民主黨＝マルクス主義黨は、多數社會民主黨と獨立社會民主黨の二つに分裂してゐたが——多數を占め、それが一の聯携を成して『議會多數派』を形成し、國家主義諸黨の結合から成る少數派の汎ドイツ派＝主派戰に對して『和平派』を結成してゐたのであつたが、ヘルトリング内閣はこの『議會多數派』＝『和平派』の要求を容れて、急速に『議會中心制度』へと移行してゐた。そして遂に革命とまでなつたのである。

## 九 總攻撃の失敗と社會民主黨の有力化

『ドイツは革命の前に在り！ 聯合國の勝利は必至なり！』——最早『ドイツ軍はその欲するまゝに勝利を獲たとしても、その故國に凱歌を擧げるものは革命であつて、勝利の軍隊ではなかつた。』が、それにも拘はらず、戰線のドイツ軍隊は戰はねばならなかつた。ドイツ軍は、斯かる情勢にも拘はらず、一九一八年三月二十一日、必勝を期して、約二百個師團を以つて、その豫定の總攻撃に入つたのであつた。敵は飽くまでもドイツの粉碎を期してゐる時、ドイツ軍としては善くも悪しくも、それより外に途は無かつたのである。この時の戰線のドイツ兵士の情景は可なり悲壯なものであつたらしい。ヒトラーは次の如く記してゐる。

『私は、幸ひにも、最初の攻撃とこの最後の攻撃の兩方に參加することが出来た。

これは私の生涯に於ける最も偉大なる印象となつた。その偉大なるといふのは、戦ひは今や遂に、一九一四年に於けると同様に防衛の性質を去つて、攻撃の性質を取つたからである。敵の砲火の下に三年有餘もの辛抱の後に遂にその報復の日が來た時には、ドイツ軍の軋壕の中には流石に活氣が盛り上つた。勝利の諸大隊は再び歡聲を擧げた。そしてその勝利に輝やく旗に不滅の榮譽を示す最後の花環（月桂冠の意味か）を掲げた。祖國を讃へる歌は再び果てしなき行進縦隊の到る處に、天にも轟けと許り歌はれた。そして最後に父なる神はその忘恩の子達に恩寵の微笑みを垂れ給ふたのであつた。（S. 217-218）

斯くてドイツ軍は、西部戦線に於いて、一九一四年の最初の總攻撃以來『敵の砲火の下に三年有餘も辛抱の後に』、一九一八年三月末再び攻撃に出で、その最後の決戦へと入つたのであるが、この戦ひはドイツ軍としては正にその最後の能力を傾けたものであつて、種々の點に於いて全く從來に見られなかつた凄壯を極めたものであつた。私は本書を綴るに當つては勿論、單に『マイン・カンフ』のみではなく、他にも若干の關係書類を参考とし、出来るだけ考察の正確を期してゐるものであり、斯く言ふ今も、ドイツ側及びイギリス側の兩方の記録書及び地圖を前に孤り當時の情況を按じつゝあるのであるが、如何にヨクこれを適切に傳ふべきかに全く苦しむものである。

先づ當時の情況を略述するに、ドイツ軍は前にバリを指呼の間にまで迫つた一九一四年九月―十月の總攻撃に失敗後大退却をなして――と言つても尙ほ敵地深く入つてゐたのであるが――西北端はベルギー・フランダ―海岸から東南端はスキエス國境寄りアルサス、ローレーンに掛けて、大體に於いてバリとドイツ・フランス國境の約中間を経て輕い孤線を成して、聯合軍と對峙して來てゐた。今やドイツ軍はこの狀態から出て、先づバリ北方正面にアラスよりラ・フェールに至る線に於いて大進出を企て、忽ちにしてソナム河上流の敵陣の突破し、再び一九一四年の進出地帯近く―バリを距る十五、六里の地帯にまで進出した。次いでバリ東北方にラ・フェールよりランスに至る線に於いて進出を圖り、これまた忽ちにしてエーヌ河岸の敵陣を突破し、再び一九一四年の進出地帯近く―マルヌ河岸―と同じくバリを距る十五、六里の地帯にまで進出した。全體として一九一四年の進出には及ばなかつたが、然しバリは今やまた再びドイツ軍の砲聲下に曝され、重大な危機に置かれたのであつた。この時如何にフランスが危機に立つたかは、當時フランスの宰相たりしクレマンソーがこの戰況を視察に出掛け、危ふくドイツ騎兵斥候に捕へられんとして逃げ歸り、『今はただアメリカの増援を待つのみである』と議會に語つたと傳へられてゐることに依つても、凡そ窺はれるであらう。

が、ドイツは、既にその國民の大多數が戰意を失つた戦ひであつた。國民の大多數は戦争に反對してストライキを起すにまで至つてゐた時であつた。『ドイツ軍はその欲するまゝに勝利を獲たとし

ても、その故國に凱歌を擧げるものは革命であつて、勝利の軍隊ではなかつた。』時であつた。軍隊は何を目當てに、何を力に、何を頼りに、飽くまで戦ひ得ようか！ 國內からの彈藥の補給は續かず、兵士は徒らに疲勞のみが甚しかつた。それもこれも誤れる政治の恐ろしき結果に他ならなかつたのであるが、斯かる情況の下に永く勝利の進軍を續け得よう筈はない。ドイツ軍は、前記の如く再びバリ近く『六〇軒』まで迫つたのであるが、それから前が一步も進まなかつた。ルーデンドルフはこの情勢を打開せんとして、七月十五日、マルヌ戦線のドイツ軍に文字通り最後の總進撃を命じ、その一部はマルヌ南岸にまで達したのであつた。が、續いて敵陣を突破することは出来なかつた。これが一九一八年のドイツ軍の最後の攻撃の最後の進撃であつた。

敵聯合軍は斯かる間に、アメリカその他から續々増援を得て、各所は逆襲に轉じたのであつた。當時兩軍の兵力は勿論嚴秘に附されて居り、今日でも餘り明らかでないのであるが、ドイツ側の記録に據れば、この時アメリカの援軍だけで既に約百萬に達してゐたといふ。ドイツ軍は疲勞甚しく彈藥の補給續かざる上に、數に於いて既に聯合軍の比ではなかつた。斯くて戦ひは到る處亂戦となり、混戦となり、討ちつ討たれつ、漸次ドイツ軍の不利となつて行つた。

斯かる間乃至この時、ドイツ國內はどうしてゐたか？

戦線では軍隊が討ちつ討たれつ敵と死闘を演じてゐる間も、國內では人々は上を下へと争つてゐ

た。或ひは、好意に解すれば、戦線では夫や父や子が刻々と死んで行つてゐたから、國內では人々はその死を最も意義あらしむるものと信ずることの爲に、争はねばならなかつたのであらう。社會民主黨及び急進自由主義諸黨は、戦争の當初は無條件に戦争に賛成し、絶對に『國內平和』を誓約してゐたにも拘はらず、今や、明らかにロシア革命の影響の下に、『新見地』乃至新たな戦争目的といふことを言ひ出し、陰に陽に即時無條件媾和を要求すると共に、ロシア三級階級選舉法の廢止、普通選舉法の施行を始めとする種々の内政改革（戒嚴令の緩和、組合法の改正、聯邦選舉區の改正等）を強硬に要求してゐた。この内政改革殊にその最も問題とされし階級選舉法の改正には政府も夙にベートマン内閣の時より大體賛成であり、さうした改革を約束して復活祭勅令（一九一七年）なるもので出してゐた程であつたが、ただその實施の時期の問題に於いて一致しなかつた。が、單なる國家主義保守派乃至ブルジョア派は、これに對して——敢へて『戸主選舉法』などは主張しなかつたやうであるが——ドイツ固有の神聖な秩序を紊すものとして斷乎として反對してゐた。

斯かる情勢の下に、政府は徒らに舊見地と新見地、戦争と和平との間を彷徨してゐた。國內自由主義勢力をバックとして、ベートマン内閣の時よりミヒャエリス、ヘルトリングの三代戦時内閣に互つて外相たりしキュールマンは、ドイツ軍最後の總攻撃の停滯した直後の六月末、議會に於いて、『純軍事行動に依つて勝利を獲ることは最早不可能である』といふ意味の演説をなし、軍部の強硬な排撃



を受け辭職を餘儀なくされてゐた。が、この時には、ヒンデンブルグ、ルーデンドルフを始めとする軍部も、軍事行動に依る勝利に全く自信を失ひ、政治的折衝に依つて戦争を解決せんことを政府に求めてゐたのであつた。人々は最早『勝利』よりも『平和』を望むかの如くであつた。社會民主黨は、斯かる國民大衆の大多數を占める無産大衆を背景として、今や確實且つ急速に支配的地位に上つて來てゐた。今や政府も軍部も、社會民主黨の賛成を得ることなしには、議會の『多數』を獲る能はず、戦争を繼續することは出来なかつた。

ヒトラーはこの國內の有様を戦線に見て、殊に社會民主黨の態度に對して、悲憤措く能はざるものがあつた。彼れは、夙に我々の見たる如く、普通選舉法そのものなどに對して反對なものはなかつた。斯かる點に於いて彼れは寧ろ、社會民主黨によりも、右翼國粹派に反對であつた。が、國家そのものがどうなるか分らぬといふ時、而して問題の普通選舉權を與へられるといふ青壯年の大部分は、それどころでなく、戦線に在つて敵を前に死に直面してゐる時、社會民主黨一派が殊更に斯かることを問題とし、その爲に軍事豫算の審議を拒否遷延したり内閣の改造を要求したりするといふことは、ヒトラーに據れば、ただ、彼等はそれに依つて戦争に倦きた民心を收續し、日頃の政權獲得の野望を此際達成せんとするものであつて、正に『死せる勇士達の戦争目的をその墓場からまで盗む』ものであつた。何故ならば、戦場の兵士達は普通選舉權の獲得の爲になど戦つてゐるのではなく、ただ祖國

を敵から護る爲に戦つてゐるのであり、その爲に死んだのだ。ヒトラーは當時、ベルギー國境寄りの北フランス戦線の最北端に戦つてゐたのであつたが、當時の有様に就いて次の如く記してゐる。

『一九一八年の眞夏、戦線はヒドイ蒸し暑さであつた。故國では争つてゐた。何んの爲か？ 戦線の軍隊の各部隊の間では色々と噂された。戦争はもう見込みはない、唯だ馬鹿だけが尙ほ勝利を信じ得る、國民は最早戦争の繼續に何等の關心も持つてゐない、唯だ資本と君主制のみが尙ほこれに關心を持つてゐるに過ぎない——斯うしたことが故國から傳へられて來、戦線でも論じられた。

戦線では最初これに對して餘り反響を示さなかつた。普通選舉權が我々にとつて一體何んの關係があつたらうか？ 我々はそんなことの爲に四年も戦つて來たのであらうか？ そんなことを言つて、死せる勇士達の戦争目的をその墓場からまで盗むとは、正に卑劣な盜賊行爲たるものであつた。曾つて我が若き諸聯隊がフランダースに於いて始めて死の中へと入つて行つた時、彼等は「一般無記名選舉權」萬歳などを叫んでこれに入つて行つたのではなかつた。「ドイツは世界に比類なし」を叫んで入つて行つたのだ。これは些細の事の如くして實は重大な相違たるものである。實際、その選舉權を與へられるといふ者（青壯年）の大部分は、その時、彼等がそれを獲んと欲する所（國內）には居なかつたのだ。戦線では政黨屋共のことなどは全然與り知らなかつた。當時、適齡のドイツ人は、苟くもその満足な手足を有する限り、戦場に出てゐたのであるが、其處には議會人諸君などはホンの少ししか居なかつた。

従つて、戦線では、その古くから出て居た者は、エーベルトやシヤイデマンやバルトやリーブクネヒト（いづれも當時のドイツ社會民主黨の領袖で「革命」の元兇共）その他の斯うした新たな戦争目的なるものに對して、先づ殆んど感心しなかつた。彼等は、第一に、何故にこの逃避者共が、軍隊を差し置いてそれ

以上にまで國家を支配するの權利を俄かに有し得たかを理解しなかつた。私個人の考へは初めから定つてゐた。私は、この國民を欺く淺ましい政黨ルンベ、共の凡てを極度に憎んだ。私には前から、此奴等は實に國民の幸福が問題なのではなくして、その空の懷ろを充たすことが目的であることが、ハッキリ分つてゐた。而して今や彼等は、その爲には國民を犠牲にし、場合に依つてはドイツを崩壊せしめんとまで掛つてゐたものであつて、私から見れば、彼等は既に充分繩目（捕縛）に値ひするものであつた。彼等の希望に斟酌することは、勤勉なる國民の利益を掬摸の一團の爲に犠牲にするものであつた。而して、斯かることは、唯だ人々がドイツを放棄せんとする場合に於いてのみ許され得ることであつたのだ。』（S. 218—219）

ヒトラー乃至ヒトラーと同じやうに古くから戦線に出てゐた者は、右のやうに、多かれ少かれ悲憤を以つて國內の有様を見てゐた。が、新たに國內から送られて來た補充兵達は最早必ずしもさうではなく、また種々の點に於いて劣質化してゐた。曰く、

「實際に戦つてゐた軍隊の壓倒の大部分は尙ほ右の如く考へてゐた。ただ、故國から送られて來る補充兵だけは、次から次へと急速に悪くなつて行つた。その爲に、彼等の参加は何等戦闘力を強化することにならず、寧ろこれを弱めるに至つた。殊に若い補充兵の大部分は無益であつた。これが曾つてイーベルンの戦ひにその子弟を送つたと同じドイツ國民の子弟であるとは、最早往々にして、容易に考へられないものであつた。」(S. 219)

## 十 北佛轉戰退却——再度の負傷送還

これを要するに、其處には心を喜ばす何物も無かつた。國內は革命状態に入り、戦線は負け戦となつてゐた。右を向いても左を向いても、其處には唯だ『破滅現象の増大』が見られるのみであつた。ドイツ軍は今や、これまで敵地深くバリ近くまで入つてゐた戦線を、漸次、自國國境近くに向けて全的に縮小して行かねばならなかつた。それは、一九一八年の最後の總攻撃に最終的に失敗せる七月からのことであつた。

斯かる状態の下に、北フランス戦線最西北端ベルギー國境近くに戦つてゐたヒトラー達Ⅱバワリア『志願聯隊』もまた、曾つて彼等が突きつ突かれつ惡戦苦闘の中に攻略した地帯を次から次へと、退

却し轉戦して行かねばならなかつた。それは正に斷腸の思ひのするものであつた。其處には、前にその攻略乃至防守に際して斃れた幾多の戦友達が、『死にまで至る忠實と從順』とを以つて永しへに眠つてゐた。その思ひ出の地をば彼等は、全體との關係に於いてこれを適度に支へつゝ、敵の砲火を浴び乍ら、次から次へと退却して行かねばならなかつたのである。この時の状態をヒトラーは次の如く記してゐる。

『八月、九月に至つて、破滅現象は急速に増大して行つた。敵の攻撃の影嚮は、曾つての我々の防戦の脅威にも比較にならないものであつたにも拘はらずである。これに比すれば、曩のソナムの戦ひやフランダー戦ひは、思ひ出すだに身の毛の寄立つ恐ろしいものであつた。

九月の末、我々の師團は、三度び、曾つて我々が若き志願聯隊として突撃攻略した地點に立つた。

あゝ、何んたる思ひ出ぞ！

一九一四年十月から十一月に掛けて、我々は其處で始めて砲火の洗禮を受けたのであつた。胸に祖國愛を、口に歌を奏で乍ら、我が若き聯隊は恰かもダンスにでも入つて行くが如くに、戰國に入つて行つたのであつた。そして、祖國の爲にその獨立と自由とを守るの信念の下に、其處に喜んで尊き血潮が流されたのであつた。

更にその後、一九一七年七月、我々は再び、この我々にとつて神聖限りなき地を踏んだのであつた。其處には、その唯一の信賴する祖國の爲に、尙ほ殆んど子供にして、眼を輝やかしつゝ死んで行つた所の幾多の最良の戦友達が眠つてゐた！

聯隊と共に早くから出征してゐた我々古兵達は、唯だ敬畏の感動を以つて、この「死にまで至る忠實と従順」の誓ひの地に立つたのであつた。

その時には我々は、曾つてその三年前に我が聯隊が攻略したこの地をば、苦戦の中にこれを守らねばならなかつた。

イギリス軍は、フランダール大攻撃の手始めとして、約三週間に亘つてこの地に砲火を浴せて來たのであつた。その時には、死せる戦友達の靈も生き返つたかの如くであつた。我々の聯隊は、汚い泥の中を這ひ、穴といふ穴に嚙り付いて、一步も引かなかつた。そして、この前のこの地に於けると同様に、次第に益々その人數が減り少くなつて行つた。その結果遂に、一九一七年七月三十一日に至つて、イギリスの攻撃は漸やく途絶へたのであつた。

斯くて八月の始め、我々は交代させられたのであつた。

聯隊は今や二・三個中隊と化してゐた。全身泥に覆はれてよろめいて歸つた時には、人間といふよりも寧ろ怪物に近いものであつた。が、諸々の砲彈穴の數百米彼方にはイギリス兵は空しく死んでゐた。

この思ひ出の一九一四年の攻略地——〔而して一九一七年の守備地〕に、今や、一九一八年秋、我々は三

度び立つたのである。我々の曾つての小さな憩ひの町コミネスも今や戰場となつてゐた。戰場は同じであつたが、勿論、人間は變つてゐた。今は軍隊に於いても既に「政治化」されるやうになつてゐた。故國の毒素は、その到る所に於けると同様に、此處にも今や作用し始めてゐた。若い補充兵達は實際全く役に立たなかつた。彼等は家から直ちに「訓練も受けずに」來たのであつた。『G. 219—220』

斯うした北フランス最西北端の轉戰退却の間に、ヒトラーは、當時の幾度かの激戰地イーベルン附近に於いて、敵の毒ガスにあたり再度重傷したのであつた。それは、ドイツが完全な革命及び敗戰降伏に入れる約一ヶ月前の十月十四日のことであつた。この時は、國內では既に政府も軍部も戰意を失ひ、ヘルトリング内閣は辭職して、ヨリ民主的なマックス大公内閣となり（十月三日）、社會民主黨からシャイデマン、パウエル、ダヴィド等が入閣し、米國大統領ウィルソンに頻りに打電して百万講和に努めてゐたのであつた。が、聯合國側は『プロシア軍國主義の廢止』即ちドイツ國體の變革を以つて和平の第一條件となし、容易にドイツの休戰要請に應ぜず、その間戰線に於いては、既に彈藥の殆んど缺乏してゐたドイツ兵士に對して、後世史家の間に有名な謂はゆる『無益なる殺傷』が、恰かもこの時ぞと許り、これまで見なかつた果敢さを以つて進められてゐたのである。ヒトラーの毒ガス負傷も畢竟するにその現れの小さな一つであつて、彼れはこれに依つて一時盲目及び全身不隨とな

り、再び國內に送られ、ボンメルン州バゼヴァルク衛戍病院に收容されたのであつた。彼れはその負傷當時に就いて次の如く記してゐる。

『十月十三日から十四日にかけての夜、イーベルン（ベルギー國境近くの地）前面の南方戦線で、イギリス軍の毒ガス發射が行はれた。彼等はその時黄色十字ガスを使用したのであつたが、我々は尙ほこれを直接身を以て経験したことはなく、従つてその效果の程も尙ほ知らなかつた。然るに私は、その夜の中に、これを知らねばならなかつた。十月十三日の夕方、我々はヴェルヴィツク南方の一丘陵に於いて、數時間に亘る毒ガス榴彈の連續砲火に遭遇した。それは更に夜通し多かれ少かれ激しく繼續した。夜半頃には既に我々の一部は斃れてゐた。その中には最早永久に息切れた戦友もあつた。朝方になつて私も刻一刻苦痛がひどくなつて來た。朝七時早々頃、私は、戦争に於ける私の最後の報告を尙ほも齎らして（因にヒトラーはこの時傳令を勤めてゐたのである）、燃ゆる眼をして、よるめき倒れ乍ら歸つて來た。

それから數時間後には既に、私の眼は灼熱した炭火のやうに變つてゐた。周圍は眞つ暗になつて行つた。斯くて私は、ボンメルン州バゼヴァルクの衛戍病院に送られた。そして其處で私は——革命を知らねばならなかつた。』（S. 220—221）

ボンメルン州といふのはベルリン北方バルチック海沿岸の州であり、バゼヴァルクといふのは、そ



のオーデル河河口入江の一土地であつて、假りにベルリンを東京に例へるならば、バゼヴァルクは差し當り——これは全く私の想像であるが——湖南の茅ヶ崎か房州の木更津と言つたやうな土地ではないかと思はれる。いづれにしても、革命には寧ろ縁遠い土地であつたらしい。ヒトラーは、このバゼヴァルク衛戍病院に收容された時日に就いては何等記してゐない。が、前後の事情から推して、それは恐らく十月二十日前後の頃であつたらうと思はれる。従つて彼れは其處で、間もなく、『革命』

『十一月革命』を公然知らねばならなかつたのである。

## 十一 盲目となりて病院に知る革命

一九一八年十一月九日、左右社會民主黨の合同革命委員會に依つて世界的に宣言されたドイツ大戦革命が實際にいつ頃から始まつたか、嚴密にその發端を劃することは不可能である。普通には、同年十月末のキール軍港に於ける艦隊水兵の叛亂を以つてその發端とされてゐるのであるが、この水兵の叛亂も最初は、當時各所に起つた數多の叛亂現象の唯だ顯著な一つに過ぎず、この時には既に左派マルクス主義者の煽動に依つて各所にロシア革命に倣つた『勞兵會』が組織されて居り、マックス大公戰時内閣の内部に於いても、その媾和達成への必須前提として、『皇帝退位問題』が密かに議されて居たのであつて、『革命』は既に深く進行してゐたとも言ひ得るのである。私は寧ろ、媾和を達成す

べくマックス大公内閣が出現して（十月三日）、ウイルソン米國大統領に媾和を要請した時、而してウイルソン大統領がこれに對して、ドイツ國內の『一切の專制權力の廢止』『民主的政權の成立を以つてその『平和交渉の基礎條件』となし來れる時を以つて、ドイツ大戰革命は既に決定的になれるものと見做さんと欲するものである。この聯合國の要求は、ドイツ國民をして、謂はゆる『プロシア軍國主義』を廢止し『軍部支配者と帝國獨裁者』から離反さへすれば、『名譽ある和平』を達成し得るものと考へしめ、一路マックス主義者の用意してゐた革命へと走らしたのである。實際、ドイツ大戰革命はこの時から、最早絶対に不可避なものとして急速に進行したのである。

【註】

ウイルソンの平和交渉回答通牒には、ドイツは國內的に先づ『自己の爲に祕密に且つ任意に世界平和を破壊することあるべき一切の專制權力を倒す』べきことを指示し、『ドイツ國民は今やこれを變革するの自由を有してゐる、ドイツ國民は進んで平和を求めるならば、これは當然その媾和以前に實現せねばならぬ條件である』と記されてゐたといふ。

最後の戰時内閣『マックス大公内閣』に於いて、その媾和達成の先決條件として帝政の廢止が問題とされた時、革命の元兇『社會民主黨』は、前にも言へるが如く既に同内閣に参加しその支配的勢力を成してゐたのであるが、この帝政廢止『國體變更の問題』に就いては用意周到に構へて尙ほその態度を正式に表明しなかつた。が、單なる『民主黨』及び『フランクフルター・ツァイツング』、『ベルリーナ・

ターゲブラット』等の自由主義民主主義大新聞が却つてこれを率先問題とし、その集會や論說に於いて公然皇帝の退位を要求してゐた。此處でも自由主義は正に『マルクス主義の前驅』をなしてゐたのであつた。

斯かる一方、スバルタクス團及び獨立社會民主黨一派の左翼マルクス主義者の勞働者及び兵士に對する革命煽動は益々奏功し、到る處に不穩な情勢を示してゐた。キール軍港の水兵の叛亂騒ぎはその代表的な一つで、同軍港を根據地としてゐたドイツ艦隊の兵士の間には早くからマルクス主義の細胞が持たれて居り、既に一九一六年頃から再三不穩な形勢を示し議會の問題とまでされてゐたのであつたが、問題の一九一八年十月末、同艦隊水兵の一團はその上からの出航命令を拒否し、機關の火を消してストライキに入り、政府側がこれを鎮壓せんとするに及んで同市勞働者の一團と合併して遂に公然の叛亂に入つたのであつた。これが、多かれ少かれ同じ不穩状態にあつた各地に直ちに影響したことは言ふまでもない。政府はウィルソンの回答に對してその爲す所を知らず、半ば自失してゐた所へ以つて來て、この全國的不穩に全く茫然自失したかの如くであつた（因にこの時皇帝は戦線にゐた）。それは正に文字通り『革命の前夜』であつた。而してヒトラーは丁度この『革命の前夜』に、盲目及び半身不隨となつてボンメルンの衛戍病院へと送られ來り、その一室に横つてゐたのである。が、彼れは、尙ほ新聞を讀むことも出來ず、且つ長く國內を離れて戦線にゐたので、斯うした國內の不穩

状態を聞いても、これをヨク理解することが出来なかつた。従来の『ストライキ』位ひに考へ、大したことはあるまいと考へてゐた。彼れは次の如く記してゐる。

『既に長い間、何となく落付きのない不穩な空氣が漂つてゐた。人々は、近い中に「始まるであらう」と話してゐた。が、私はそれが何を意味するか、殆んど想像することさへ出来なかつた。先づ第一に、春のそれの如き一のストライキを考へた。騒いでゐた海軍からは絶えず不吉な流言が傳へられて來た。然しこれも私には、多數の大衆の事件たるよりも、少數の小僧共の妄想の所産に過ぎぬものと思はれた。衛戍病院でも、成るだけ早く戦争が済んで呉れ、ば宜いといふことは皆話してゐたが、何人もそれを「直ちに」とは考へなかつた。因に、私は當時新聞を読むことは出来なかつた。』(デヒン)

が、ヒトラーに依つて、局部的なものに思はれ、大したものではあるまいと思はれてゐた騒動は、正に全國的な恐るべき『革命』であつた。キールの叛亂は直ちに全國に波及し、同じく海港都市ハンブルグ、ブレーメン、リユーベツク等に飛火したのを始めとして、十一月に入るや、國內各地に革命状態が現出したのであつた。マルクス主義者は今や時機熟せりとなし、各地に労働者・農民・兵士の會々勞兵會を率ゐて一齊に公然鋒起したのであつた。マルクス主義革命に狂つた叛亂水兵達は、ヒト

ラーのバゼヴァルク衛戍病院にまで来て、『革命』を觸れて歩いた。叛亂はハノーヴァ、マゲデブルグ、ハルレ、ライプチヒ、ドレスデン、ケルン、デュッセルドルフ、フランクフルト等の各州首都に相次いで起り、十一月七日には、ヒトラーの唯一の故郷として信愛し、『革命』などはよもやと思つてゐたバワリア州ミュンヘンに於いても、『激烈な破壊運動』が起り、勞兵會に依つて『國王の廢止

と民主主義的社會主義的共和國の建設』が宣言されたのであつた。十一月九日、ベルリンにも今や社會民主黨が公然その態度を表明するに何等の差支へもなかつた。十一月九日、ベルリンにも勞働者及び兵士の暴動が起るや、社會民主黨は宰相マックス大公に迫つて宰相の地位を同黨の首領エーベルトに譲らしめ、エーベルトを首班として多數社會民主黨・獨立社會民主黨代表各三人から成る『國民代表委員會』なる臨時革命政府を組織した。そして直ちに『帝政の廢止、共和制の樹立、革命の完成』を世界に向つて宣言したのであつた。シャイデマンは同日午後二時議會入口の大階段から、叛亂民衆の萬歳裡に、その歴史的宣言をしたのであつた。斯くしてドイツ大戦革命は全國的に、否世界的に成就したのであつた。皇帝は當時戰線の大本營に在り、一度ベルリンに歸還せんことを欲してゐたが、この革命の出現を見て意を決し、同日晚大本營より直ちにオランダへ蒙塵された。皇太子も戰線に在り、革命政府に對して、同政府と協力して善後處置に當るべく部下の軍隊を率ゐて國內に歸還せんことを申出たのであつたが、革命政府の拒絶を受け、父君の後を追ふて同じくオランダに

亡命したのであつた。それと共に、ドイツ軍隊は全く崩壊し、徒らに敵の手に身を委ねることになつたのであつた。

ヒトラーは斯うした慌しい變化を病院のベッドの上で耳にしてゐた。多分、病院にも噂は櫛の齒を引くが如く傳つてゐたのであらう。が、ヒトラーは、始めこれを容易に信じようとしなかつた。『そんな馬鹿なことがあるものか』といふ氣持ちであつたらしい。が、十一月十日、病院の牧師が來てお祈りと共に這般の經過を彼等に傳へるに及んで、今やその恐ろしき事實を確認し、一切の事情を了解しなければならなかつた。彼れはその時如何に愕き、如何に悲しんだことであつたか！ 彼れは、曾つて十五歳か十六歳にして母の死に會しその墓前に立つて泣いて以來、未だ曾つて泣いたことはなかつた。が、今や彼れは泣かねばならなかつた。彼れは十一月革命を知るに至つた時の有様を次の如く記してゐる。

『十一月に入つて一般に緊張が増して來た。

そして或る一日先づ突然而も直接不幸がやつて來た。マドロス達（船乗り）水兵達の意）はトリックでやつて來て、革命を絶叫して歩いた。このドイツ國民の「自由と高潔と尊嚴」の爲の戦ひの「指導者」は一連の若いユダヤ人共であつた。彼等の中には一人として戦線に出た者は無かつた。三人のユダヤ人は謂はゆる

「淋病病院」を廻つて兵站部から郷里に歸されたものであつた。その彼等が今や赤い布切れを付けて練り歩いてゐたのであつた。

その頃私は稍々快方に向つてゐた。兩眼窩の錐<sup>はり</sup>で刺すやうな痛みは和らいで來てゐた。私は次第に、私の周圍をボンヤリと識別し得るやうになつてゐた。私は少くとも、後に何か職業に従事することが出来る程度にまで再び見えるやうになれるといふ希望を起すことが出来た。と言つても勿論、再び繪を描くことが出来るやうにならうとは、最早期待することが出来なかつた。然し兎に角私は、大不祥事（革命）が起きた時には斯様に快復の途上に在つた。私は先づ第一に、この叛逆が多かれ少かれ地方的事件に過ぎないものであつて呉れることを希つた。私は若干の戰友達にもこの考へを強調した。殊にバワリア出身の私の病友達は、私の考へに賛成して已まなかつた。其處には「革命」の氣分などは微塵もなかつた。ミュンヘンにも氣運ひ沙汰が勃發するだらうとは、私は想像することも出来なかつた。私には、尊敬するヴィッテルバッツハ家（バワリア皇室）に對する人々の忠誠は、どんなことがあつても、少數ユダヤ人の意志よりは強固なものと思はれたのであつた。従つて、問題の海軍の叛亂騒ぎも、間もなく鎮壓されるであらうと信ぜざるを得なかつた。が、それから幾日も経たずして、私の生涯に於ける最も恐ろしき確認が來たのであつた。噂は今や壓倒的になつて行つた。前に私が地方的な事件と考へてゐたことは、正に全國的な革命であつた。加ふるに、戦線からまで屈辱的な報告が來た。人々は降伏を求めたといふのであつた。果してそんな事が有り得たものであつたらうか？

十一月十日、衛戍病院の牧師が一場の簡単なお話しをする爲に病院に來た。今や我々は凡てを了解したのであつた。

私はその簡単な話しを聴いてゐる間にも極度に昂奮した。老いたる品位ある牧師は、自分でもひどく慄へ乍ら、我々に次の如く語つたのであつた。ホーヘンツォレルン家は最早ドイツの皇位を保ち得ないであらう、祖國は「共和國」はなるであらう、我々は、神がこの變化に祝福を拒まないやうに、また我が國民を將來共に見捨てゝ呉れないやうに、神に祈らねばならない、と。彼れはその場合恐らくさういふより外になつたであらう。彼れはその僅かの言葉の間にも皇室のことを考へざるを得なかつた。彼れは、ボンメルン、プロシアに於ける、否、全ドイツ祖國に對する皇室の功績を讃へやうとした。だが、その時、彼れは遂に我れと自ら低い聲で泣き出した。小さな講堂は一齊に心から深い衝撃に打たれた。誰れ一人として涙を抑へることが出来なかつたやうである。それから年老いた彼れは、更に語り續けようとして次の如く話し始めた。我々は今や長い間の戦争を終へねばならない。我々は今や戦ひに敗れたことにより、勝利者の恩恵に身を託するのであるから、當然我が祖國は將來重い抑壓を蒙ることになるであらう、休戦はただこれまでの我々の敵の寛大を信じて行はれるのである、と。この時、私は最早耐へられなかつた。それ以上其處に居續けることは私には不可能であつた。私は眼が再び暗くなつて來たので、手探りで、よめき乍ら寢室に歸つた。そして私の寢室に身を投げ付け、割れるやうな頭を蒲團の中に埋めた。

私は、曾つて母の墓前に立つて泣いて以來、これまで、ついぞ泣いたことはなかつた。私は、その若き時



代、運命に残酷に取り扱はれた時、却つて益々反抗心を強めた。この度の長き戦争に於いて幾多の親しき戰友達が死んだ時でも、私はこれを嘆くことは罪惡かの如く思つた。彼等はドイツの爲に死んだのではないか、と。また、私自身が遂に、あの恐ろしい戰鬪の最後の日に、毒ガスにやられ、眼が見えなくなり始め、永久に盲目になるのではないかといふ惧れの爲に一時落膽せんとした時でも、私の良心は私を怒鳴り付けた。情けない憐れな奴よ！ 多くの人々はお前より數百倍もひどい目に會つてゐるのに、お前が泣くとは何事か、と！ 斯くて私は力なく黙して私の運命を忍んだのであつた。が、然し、今や私は泣かざるを得なかつた。私は今や始めて、祖國の不幸に比ぶれば、個人的悲哀の如きは凡て如何に小さいものであるかを知つたのであつた。』(S. 221—222)

## 十二 一切無駄となりて政治家たらんと志す

斯くして『凡ては無駄となつた』のであつた。斯くしてドイツは、十一月十一日即ち革命成立の二日後の正午に、シャンパーニュの森で聯合軍總司令官フオツシュ元帥の手から聯合國の休戰條件を無條件で受取し、無條件で降服したのであつた。而もその時のドイツ側代表は、前に紹介した中央黨の惑星的要人エルツベルガーであつた。戦線のドイツ軍隊の中には、この革命及び降服を理解し得ずして、反抗的な態度に出たものもあつた。が、彼等もまた力竭きて居り、それ以上に如何ともなし得な

かつた。斯くして一九一四年より一九一八年に至る前後五ケ年に互る大戦は終了し、ドイツの一切の犠牲はただ一片の無駄と化したのであつた。ヒトラーはこれを省みて次の如く悲憤してゐる。

『斯くして凡ては無駄となつた。凡ゆる犠牲、凡ゆる忍苦は無駄となつた。幾月にも互る屢々の飢餓も、渴も、一切無駄となつた。我々が死の不安に取巻かれつゝ而も尙ほその義務を盡して已まなかつた所の・あの諸々の時も、一切無駄となつた。其處に戦死した二百萬の人々の死も無駄となつた。曾つて祖國を信じて再び歸らざるべく出て行つたこの多くの人々は、凡てその墓場を與へられてはならなかつたのか？ その墓場は與へられず、泥と血に覆はれたる無言の勇士達は、この世に於いて人間がその國民の爲に捧げ得べき最高の犠牲をば斯くも嘲笑を以つて裏切つた所の故國に、恨みの亡靈として還らねばならなかつたのか？ 斯かる事の爲に、彼等〓一九一四年八月―九月の兵士達は死んだのであつたか？ 斯かる事の爲に我々志願聯隊は、同年秋、古き戦友達の後を追ふて出陣したのであつたか？ 斯かる事の爲に、僅か十七歳の子供達までがフランダールの土に埋れたのであつたか？ 幾多のドイツの母達が、悲しき心しつゝも、その最愛の子供達を二度と見ざるべく手離し、これを祖國に捧げた所の意義は、これであつたか？ これらは凡て、果して今日、一群の卑劣な裏切者共をして祖國を掌握せしめんが爲に行はれたものであつたか？

我々ドイツの兵士は、斯かる事の爲に、太陽の灼熱や吹雪の嵐の中に、幾夜ともなき不眠や果しなき行進に疲れ乍ら、飢えつゝ、渴えつゝ、凍えつゝ、頑張つて來たのであつたか？ 斯かる事の爲に彼等は、十字砲火の

地獄や毒ガス戰の焦熱の中に、唯だ常に敵の禍ひから祖國を守るの義務のみを考へて、退却もせず戦つて來たのであつたか？

——「旅人よ！ 汝れ若しドイツへ赴か正しくこれらの勇士達もまた一つの石を獲ち得たのであつた。」

「ば、我等が故國へ告げ給へかし。我等は、祖國に忠實に、義務に従順に、此處に横はつてゐると！」  
而して故國は——？

然し、我々の考慮しなければならなかつたものは、單に自分達の犠牲のみであつたらうか？ 過去のドイツも同時に考慮するべきではなかつたか？

過去の歴史に對する義務といふことも有つたのではないか？  
我々は尙ほ過去の名譽を我々にも云々する價值があらうか？ 更にこの行爲は將來に對して、如何に説明するべきであらうか？

淺間しくも下劣なる犯罪者共よ！

私はこの時、この恐るべき出來事を明らかにしようとする程、私の類は益々怒りと屈辱の羞恥に燃

えたのであつた。この悲しみに比すれば、眼の痛みの如きは何んであつたらうか！

續いて來れるものは、尙ほ恐るべき日々、ヨリ惡しき夜々であつた。私は凡てが失はれたことを知つた。

敵の恩寵を期待することは、精々、馬鹿か然らずんば嘔吐きや犯罪者のみが、能く爲し得ることであつた。  
私はこれらの夜々、憎惡に、この行爲の元兇共に對する憎惡に、驅られて行つた。』(S. 323—325)

前大戰におけるドイツの敗戦崩壊の原因を孤り社會民主黨の裏切行爲のみに歸することは、尤も當を得たものではない。其處には多くの原因が深く錯綜して存在してゐたのであつて、このことはヒトラーも充分認めてゐる所であり、それ故にこそ別に『崩壊の原因』と題する一章（原本第十章―本研究次章）を設けてこれを論じてゐるのである。若し夫れ、その責任を求むるならば、社會民主黨一派によりも寧ろ、カイザーを始めとする當時のドイツ爲政者階級自體に求めらるべきであらう。彼等は、日頃々しくその内外方策を誤つて來てゐた許りか、確たる覺悟も用意もなくして最悪の時に戦争に入り、信ずべからざるものを信じてこれにマンマと裏切られ、そして遂に國家國民を未曾有の屈辱と重苦に陥れたのである。社會民主黨マルクス主義一派をして『隠れ簑』をまとはしめ、革命を用意し得せしめたものも、元はと言へば、カイザーの第一の寵臣にして全戦争期間の三分の二に互れる戦時内閣の擔當者たりしベートマン・ホルヴェークとその一黨であつたのだ。

が今や彼等は、善くも悪しくも歴史の審判を受け永久にその地位を去つたのであつた。身を以つてその責任を負ふを餘儀なくされたのであつた。然るに何事ぞや、これと『最も禍ひ深く協力』し、遂にこれをしてその背後から蹉跌せしめた所の、而して本來ドイツ國家國民の仇敵たる所の、マルクス主義社會民主黨一派が、これに代つて新たなドイツ國家國民の支配者として登場して來たのである。成程彼等は戦争の直接の責任者ではなかつた。が、彼等は最初、戦争が不可避となるや、善かれ

悪しかれ、その『鼓舞者』として現れたのである。それが、戦争半ばにして國內漸やく疲弊し、外に於いてはアメリカまでも敵とするに至るや、漸次戦争の反對者と化し、陰に陽に國民の反戦化に努めたのである。そして、たま／＼ドイツが有利な條件の下にその最後の決戦に入らんとした時、實に勝たのである。そして、彼等は國內總罷業を以つて背後からこれを挫折せしめたのである。而も利は正にドイツのものと思はれた時、彼等は國內總罷業を以つて背後からこれを挫折せしめたのである。一國家一國民にとつて、これより大なる裏切り、これより大なる犯罪が何處にあらうか！ 而もその彼等が今や祖國に君臨するに至つたのである。斯かることは果して世に有り得ることであらうか？ 若し斯かることが世に許されるものとすれば、この世には正に『神』も『佛』も、正義も道理も、無いものでなければならぬ。果してこの世は斯かるものであらうか？ また、斯かるもので宜いであらうか？

少くとも、ヒトラー達『ドイツ兵士は、斷じて斯かることの爲に戦つたのではなく、斷じて斯かることの爲に死んだのではなかつたのだ。ヨリ正しくヨリ善きドイツを望んで、その爲に戦ひ、その爲に斃れて行つたのであつた。』

ヒトラーは、病院で、革命『敗戦』崩壊を知つてから幾日か、身を斷つやうな考察懊惱の末、マルクス主義者『ユダヤ人は斷じて信すべからざるものであることを改めて認識すると共に、遂に『政治家たらん』と決心したのであつた。其處に彼れの『運命』の歸結を見出したのであつた。彼れは問題

の章の最後に次の如く記して以つてその記述を終へてゐる。

『それから幾日かして、私は更に私の運命を自覺した。私は今や、つひ先頃まで尙ほ自分の將來のことを兎や角と痛く心配してゐたことを考へて、自ら嗤はざるを得なかつた。そも／＼斯かる基礎の上に家屋敷を建てやうとは（斯かる時代に、尋常の生活、を期しやうとはといふ意か）嗤ふべきことではなかつたらうかと共に、遂にまた私は、これまでも屢々掛念し乍ら、ただ感情的にこれをどうしても信ずることが出来なかつた所のものが起つたに過ぎないことを、ハッキリと知つたのであつた。

皇帝ウイルヘルム二世は、ドイツ皇帝として始めて、マルクス主義の指導者達に對して、彼奴等は何等の名譽をも持ち合せないことを氣付かずして、和解の手を差し延べたのであつた。然るに彼等マルクス主義の指導者共は、一方の手では尙ほ皇帝の手を握り乍ら、他方の手では既に匕首を探してゐたのだ。

ユダヤ人との間には絶対に妥協は有り得ない。ただ、假借なき「か——どうか」（殺すか殺されるか）有るのみである。

私は遂に政治家たらんと決心した。（S. 235）

一切が無駄となつて、政治家たらんと決心す——これがヒトラーの前大戰に獲た歸結であつた。蓋し、舊ドイツが文字通りその國運を賭し二百萬の生靈を犠牲にした大戰に於いて遂に敗れなければな

らなかつたのも、畢竟するに、その誤れる政治（或ひは言葉を換へて言へば無政治）の爲であつたのである。既に我々の見たる如く、ヒトラーに據れば、マルクス主義に取つて代る『マルクス主義以上』の政治・従つて思想の無かつた爲であるのである。而してヒトラーは今や、ドイツの革命・敗戦・崩壊の廢墟の中から、Nationalsozialismus の思想を以つて、マルクス主義に取つて代りドイツを再興すべく、齡ひ正に三十にして、一念發起したのである。斯くて彼れは、戦後、『ドイツ労働黨』の七番目の黨員として政治運動へと入るに至つたのであるが、この彼れが、如何にその運動を建設するかをば我々は尙ほ後に章を改めてこれを見るであらう。

## 附記 本書續刊諸分冊に就いて

以上の私の『マイン・カンツ』研究第二分冊の大半（第五章より第六章に至るまで）は、昭和十六年四月より十二月に掛けて雑誌『國際評論』に掲載されしものであり、第五章の第十節のみを今回單行本として出版に際し新たに書下せるものであるが——因に第三分冊も既に前記『國際評論』の十七年一月號以降に發表掲載中である——私は本書をば次の如く前篇後篇各三冊、全六冊に分ち、漸次これを執筆刊行し、以つて本書を完成したいと思つてゐる。

### 前篇 批判篇

第一分冊——單なる Nationalist より Nationalsozialist に至る迄の研究

第二分冊——前大戰に於けるヒトラーとドイツ革命・敗戦・崩壞の研究

第三分冊——國民社會主義運動の開始とその基本思想殊に民族觀の研究

### 後篇 建設篇

第一分冊——ヒトラー・ナチズムの世界觀乃至國家觀の研究

第二分冊——ヒトラー・ナチズムの運動方針及び運動組織の研究

第三分冊——ヒトラー・ナチズムの内外政策殊にその對外政策の研究

右の全六冊の中、前篇批判篇三冊は本年中乃至明年早々までに、後篇建設篇三冊は明年中に、脱稿刊行する積りである。が、私の生來の遲筆鈍重に加ふるに周知の如き時局であるので、果して豫定通り進み得るかどうか、私は自分でも保證出来ない。幸ひにして無事に續け得たならば、讀者諸君に於いては續けて讀んで頂きたい。

著者





昭和十六年十二月十五日 印刷  
昭和十六年十二月二十日 發行

ヒトラー著

「マイン・カンフ」研究（第二分冊）

定價 金一圓五十錢

（滿洲中國は一割増）

著者 石川 準十郎

發行者 東京市麴町區內幸町一ノ二東拓ビル  
五十嵐 隆

印刷者 東京市神田區錦町三ノ二〇  
金田 史郎

發行所

東京市麴町區內幸町一ノ二東拓ビル  
國際日本協會

（會員番號）  
（二二〇一五）

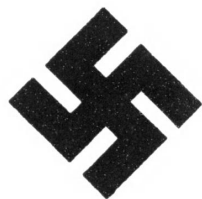
振替口座東京二四二〇四番  
電話銀座部六二八二番

東京市神田區淡路町二ノ九

配給元

日本出版配給株式會社

（印刷・丙午社和歌文印刷所）



定價一圓五十錢

行發・會協本日際國・京東